

修士論文 2024 年度

パッシングという経験
——ゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングに
関する語りを事例に——

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科

氏名 後藤田竣佑

パッシングという経験——ゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングに関する語りを事例に——

論文要旨

本稿は現代日本社会に生きるゲイ/バイセクシュアル男性による語りをもとにパッシングとはどのような経験であるかを論じる。はじめに、ゲイ/バイセクシュアル男性にとってパッシングが問題として経験されていることを概観し（1-1）、ゲイ理論からクィア理論への変遷を示しながら、パッシングの経験を主題化する意義を確認する（1-2）。つづいて先行研究の検討を通して（3-1、3-2）、これまでパッシングが対面的相互行為の場面を通過するための管理/操作の実践として位置づけられ、個人の行為主体性が強調されることで功利的な「戦略」としての側面が前景化されてきたことを確認する。そして、それ以降のアメリカ社会におけるパッシング研究を参照し、パッシングには個人のジェンダー規範との適合性の問題があることやパッシングのために規範的な前提が利用されていること、関係性によってそのありかたが変わることを確認する。しかし、アメリカ社会におけるLGBのパッシングは考察が蓄積されている一方で、日本におけるLGBのパッシングに関する研究は限られている。

本稿ではゲイ/バイセクシュアル男性の語りから、パッシングが場面や状況に規定されながら行われるがゆえに見られる多様性を示し、パッシングがいかに個人の管理/操作の「戦略」によって統制できないような、他者からの評価に依存して成立するものであるかを示す。またゲイ/バイセクシュアル男性にとって自明と認識される規範的な態度を示し、対面的相互行為に限定されないパッシングを論じる。様々な事例から先行研究と重なるパッシングの同化主義的な戦略ゆえの既存の支配的規範の再生産側面も確認された一方で、功利的な戦略や当該個人の実践に還元できないパッシングの成立過程を確認した。最後にパッシングの「失敗可能性」を起点にパッシングの理論的考察を行う。継続的な「普通」の達成を目的とするパッシングの「失敗可能性」が示すのは異性愛主義の一側面である規範的なセックス、ジェンダー、セクシュアリティの「首尾一貫性」を前提にした認識枠組みを崩しうる可能性であり、それをもって本稿の結論とする。

キーワード

1. パッシング、2. セクシュアリティ、3. ゲイ男性、4. 異性愛規範、5. パフォーマンス・ヴィジュアルティ

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科
後藤田竣佑

The Experience of Passing: Using the Narratives of Gay and Bisexual Men Who Pass as "Straight"

Summary

This paper discusses the experience of passing based on the narratives of gay and bisexual men living in contemporary Japan. First, it outlines the experience of passing as a problem for gay and bisexual men (1-1), and then it confirms the significance of making the experience of passing a subject by showing the transition from gay theory to queer theory (1-2). Next, through an examination of previous research (3-1, 3-2), I confirm that passing has been positioned as a practice of management/operation for passing through face-to-face interaction situations, and that the aspect of it as a utilitarian 'strategy' has been brought to the fore by emphasising the individual's agency. Then, referring to subsequent passing studies in American society, I confirm that passing involves issues of conformity with individual gender norms, that normative assumptions are used for passing, and that the way it is done changes depending on the relationship. However, there is little research on passing as an LGB person in Japan.

This paper examines the diverse ways gay and bisexual men experience passing, shaped by situational context and others' evaluations rather than individual strategy. It explores normative attitudes assumed to be self-evident and considers passing beyond face-to-face interactions. While passing often reinforces dominant norms through assimilation, it also involves processes that go beyond utilitarian strategies. The paper further theorizes passing through its inherent "failure potential"—the risk of disrupting the assumed coherence of sex, gender, and sexuality within heterosexual norms. This failure highlights passing as an ongoing practice of achieving "normality" while simultaneously exposing the fragility of normative frameworks. Ultimately, this study challenges the stability of passing and its role in reproducing or destabilizing dominant social structures.

Keywords

1. passing, 2. sexuality, 3. gay male, 4. heteronormativity, 5. performativity

Keio University
Graduate School of Media and Governance
Shunsuke Gotoda

目次

第1章	はじめに—研究背景	5
1-1	社会的背景—日本社会における「同性愛（/者）」の現在とパッシング	5
1-2	学問的背景—クィア理論の登場	8
第2章	主題	11
第3章	先行研究の検討	12
3-1	「パッシング」研究の古典	12
3-2	アメリカ社会におけるLGBのパッシング	15
3-3	日本社会におけるパッシング	18
第4章	調査の枠組みと調査協力者について	19
4-1	調査手法	19
4-2	調査協力者	21
4-3	研究者のポジショナリティ	23
第5章	ライフストーリーの要約	23
5-1	クジラさん	23
5-2	ライオンさん	24
5-3	イチゴさん	24
5-4	ブドウさん	24
5-5	ヒツジさん	25
第6章	分析	25
6-1	パッシングとはどのような実践なのか—パッシングの多様性	25
6-1-1	「嘘をついたり」することによる管理	26
6-1-2	「言わない（言えない）」ことによる管理	32
6-1-3	対面的相互行為の場における—「コミュニティ」を選ぶという管理	38
6-1-4	パッシングの失敗事例	40
6-1-5	まとめ	43
6-2	ゲイ/バイセクシュアル男性の規範への態度	45
6-2-1	〈理想の息子〉としてパスすること：家族との相互行為の場	46
6-2-2	公的な場における〈理想の〇〇〉	54
6-2-3	他者化される「LGBT」、「ゲイっぽいひと」や「オカマ」	58
6-2-4	まとめ	62
第7章	パッシングの理論的考察	63
7-1	カミングアウトの意義と困難	63
7-2	パッシングの「失敗可能性」	66
7-2-1	「異性愛主義」とはなにか	66

7-2-2 パッシングの「失敗可能性」	68
第8章 結論	72
8-1 結論——パッシングという経験	72
8-2 本研究の限界と今後の課題	75

第1章 はじめに——研究背景

1-1 社会的背景—日本社会における「同性愛（/者）」の現在とパッシング

近年、「LGBT¹」というカテゴリーへの関心が上昇しており²、その認知度は急速に広がっている³。しかし、複数の論者（森山 2016; 岡田 2019）が指摘する通り、日本における「LGBT ブーム⁴」は経済主導で始まった「ブーム」であり「LGBT」に関する言説が普及することは周縁化されてきた同性愛者に対するスティグマや抑圧の低減を必ずしも意味しない。例えば、森山（2024）は「LGBT」という言葉は本来、多様な性の間の不均衡に着目せよと呼びかけるが、「LGBT ブーム」において氾濫している「LGBT」という言葉は性の多様性を曖昧なままにまとめて名指すことを可能にしていることを指摘しており（森山 2024: 115）、テレビや映画における「LGBT」の表象が増えることは「LGBT」が対等な他者としての地位を獲得したことと同義ではないことを論じている。

また、元山（2022）は現代日本社会において、セクシュアルマイノリティへの理解や尊重の重要性がより強く顕在化してきている「同性愛歓迎ムード」の傾向を指摘しながら、同時にメディアに遍在する「笑い」や「からかい」の存在、「（同性を好きなのは）まだ異性を知らないからじゃないか」などの「カムアウトの歪曲化」、カムアウトをなかったことにされる「カムアウトの無化」など、「ホモフォビア」や「差別」とははっきりと言えないような捉えがたい差別経験の実態があることを明らかにしており、悪意のないマイクロアグレッション加害は常に起きうることを論じている。

現代のアメリカ社会では、言説の次元で平等が支持されるようになっていても、日常的な習慣や文化的な意味付けの水準において差別があることを説明するアイリス・マリオン・ヤング（1990=2020）は「支配的集団の経験や文化を普遍化し、規範として確立する」（Young 1990=2020: 83）特徴のある「文化的帝国主義」の抑圧は無意識の恐怖と嫌悪の側面を持つ

¹ 「LGBT」とはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字を取った性的少数者の総称。

² 日経テレコンを参照すると、2005年に初めて「LGBT」は「可処分所得が高く（子供がいないため）、インテリでトレンド感度が高い」（2005年1月14日日経MJ「LGBT市場（キーワード）」）と紹介がなされるのと同時に「LGBT」というタームが登場しており、2014年の間（2014年1月1日～2014年12月31日）は11件、2015年の間は60件、2016年の間は193件、2017年の間は220件、2019年の間は300件、2020年の間は190件、2022年の間は126件、2023年の間は257件「LGBT」というタームが登場しており、2015年を契機に記事が増大しており2019年をピークにして継続的に話題にあがっていることがわかる。

³ 電通ダイバーシティ・ラボの縦断的な4回にわたる「LGBT調査」に基づく、「LGBT」という言葉の浸透率は2020年の段階で2018年調査の68.5%から11.6pt上昇の80.1%となっている。

（2024年1月2日取得、<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2021/0408-010364.html>）

⁴ 「ブーム」の始まるまえもLGBTQ+の当事者たちは生きている。

感情とそれが引き起こす反応によって引き起こされること論じている⁵。ヤングの議論に基づくと、差別とは悪意を持って意識的に行われるから「差別」なのではなく、悪意に基づかない反応も差別と呼ぶことができる。

「ゲイ」や「オカマ」は依然としてからかいの対象として表象のなかで他者化されており（木場 2019）、「悪意」のないマイクロアグレッションの事例が示すのは自然化されているセックス、ジェンダー、セクシュアリティの「首尾一貫性」を自明視する規範⁶の素朴な存在である。そしてその規範的な図式は同性愛者にも認識されうるものであり、「正常な」セクシュアリティからの逸脱に対するスティグマは直接的な同性愛嫌悪や差別の言説に触れていなくても知覚することが可能になるだろう。

本研究の対象は同性に対しての性的欲望を有するシス男性であり、「ゲイ」を自認する当事者、「バイセクシュアル」を自認する当事者、自己のアイデンティティを既存のカテゴリーに当てはめることに対して懐疑的な当事者を含んでいる。以下、暫定的なカテゴリーとしてゲイ/バイセクシュアル男性と記述する。有徴化を避けて社会生活を送るパッシングする当事者たちはどのようにパッシングを経験するのだろうか。

厚生省の労働者アンケート調査結果⁷によると、LGB（n=572）のうち「いまの職場の誰か一人にでも、自身が性的マイノリティであることを伝えているか」という質問に対して「伝えている」と回答しているのは全体のうち 7.8%であり、少なく見積もっても日本社会に暮らす 9 割以上の LGB は自身の性的指向を周囲に必ずしも伝えずに社会生活を送っている。その理由は「仕事をする上で、性的マイノリティであることは関係がないから（37.2%）」「職場の人と接しづらくなると思ったから（32.1%）」などが挙げられている。「性的マイノリティであることを理由に、働く上で困っていること」という質問に対しては「プライベートの話をしづらいこと（15.2%）」や「異性愛者としてふるまわなければならないこと（12.0%）」などの回答があり、パッシングの経験はある種の「困難」として当事者に経験されていることがわかる。

しかし、パッシングに伴う困難は明確な主体を打ち立てたうえで集合的に「クレーム申し立て」を経て成立する「社会問題」とは言い難く、むしろ「クレーム申し立て」のプロトタイプである「カミングアウト」とは対置されるものであり、曖昧に経験される一種の「問題

⁵ ヤング（1990=2020）の議論は、アメリカ合衆国における政治や文化を前提にする議論であり、現代の日本社会において必ずしも「言説の次元で差別がなくなっている」という論理が適用可能であるかは疑問だが、元山（2022）の提示する「同性愛歓迎ムード」を鑑みるに、特に日本の都市部におけるあからさまな差別的言説の信用が失われてきている傾向はみられるだろう。

⁶ ジュディス・バトラーによる定式化を受けて竹村（[2002]2021）はセックス（解剖学的な性差）—ジェンダー—セクシュアリティが同延上に重ね合わせて理解され、近代市民社会を支える「正しいセクシュアリティ」を再生産する機序を異性愛主義と性差別を両輪にした抑圧構造と捉えて「ヘテロ」セクシズムと呼んでいる。

⁷ 厚生労働省（2024 年 1 月 2 日取得、<https://www.mhlw.go.jp/content/000625161.pdf>）

経験⁸」（草柳 2004）という枠組みで捉えることが可能である。草柳（2004）は明確な「クレーム申し立て」のためには、明確な「強い」主体（草柳, 2004: 101）を打ち立てる必要があると論じるが、パッシングの経験は「わからなさ」を孕んだ、主体化を伴わない困難として経験される。パッシングという経験の輪郭をより具体的に示し、どのような意味で曖昧な問題として経験されるかを示すために以下に引用するのは、岐阜県にある本屋メガホンの店主であり、ゲイ男性の当事者である和田たくみ氏によって書かれた、ゲイであることを隠し、透明人間のように生きてきた自己との決別をテーマにして書かれた⁹ZINE からの一節である。

「僕の無意識は、彼の隣を堂々と歩くことではなく、偶然近くを歩いていたただの通りすがりの人として彼を先輩たちに認識させることを選んだ。先輩二人の内一人は何も気づいていない様子だったが、もうひとりの先輩は彼と僕の関係を訝しむ様に交互に眺めていた。[.....] 僕が自分だけを守るためにとった無意識の言動は、恋人という関係を偶然すれ違った見知らぬ他人に置き換えてしまえるし、二人で暮らす家から彼を追い出してしまえる。無意識とはいえ自分の意志で行ったことだ。」（「無意識を手放す」より）

ここで経験されている「彼＝恋人」を「見知らぬ他人に置き換えて」しまうようなパッシングは「無意識」でありながら、自分の「意志」で行ったこととして引き受けられて整理されている。詳細な分析は後述するが、「無意識」的でありながら、自分の「意志」に回収されうるようなパッシングとはどのような経験なのだろうか。

「カミングアウト」をせずに様々な社会的場面を通過することを意味するパッシングは一度、「カミングアウト」を経験している当事者にも再び経験されうるものであり、ほとんどの非異性愛者が経験するものとも言えるが¹⁰、特に日本社会という文脈でゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングの経験が学問的な枠組みにおいて分析されている研究は限られており、その実践の様態や機序を考察する余地が大いにある。

⁸ 「問題経験」とは「いかに曖昧であっても自分にとって「問題」である何ものかについて語ろうとする言葉、これを『問題経験の語り』と呼ぼう。それは先に触れたように、人が『問題』をめぐる語る多様な状況に関する日常の表現、すなわち、文句を言う、疑問を述べる、自分の意見を言う等々の周囲に生まれる言葉であり、操作的に定義されない。」（草柳 2004: 76）ものである。

⁹ あんじー, 2023, 「2023 年 アノ人に会いにゆく。vol.10～『本屋メガホン』和田拓海さん～」(2025 年 1 月 15 日取得, <https://aun-web.jp/blog/blog-9758.html>)

¹⁰ 時代的背景や社会的背景は異なるが、セジウィックは「個人的なレベルにおいてさえも、ゲイであることにもっともオープンである人々でさえ、個人的に、経済的に、あるいは組織的に自分にとって重要である誰かの前ではあえてクローゼットの中にとどまろうとする場合が非常に多い。」（Sedgwick, 1990=1999: 98）ことを説明している。

1-2 学問的背景—クィア理論の登場

前節ではいかにパッシングの問題が個人にとって曖昧な問題として経験されていることを事例とともに確認したが、本節では社会運動とともに発展してきたゲイ理論からクィア理論への変遷を辿りながら「カミングアウト¹¹」の位置づけの変遷を確認し、ゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングの問題を論じる意義を確認する。

レズビアン/ゲイ・スタディーズは 1960 年代後半以降のゲイ解放運動とともに発展してきた歴史があり、つねに説明される立場として「客体」であった「同性愛者」は主体的にみずからについて語りなおすための「カミングアウト」という行為に重点を置きながら理論化が図られてきた（金田 2004）。その理論的変遷において「カミングアウト」は「解放」から「抵抗」へとその位置づけを変えてきている。

黎明期のゲイ解放運動においてオーストラリアの社会学者のデニス・アルトマンをはじめとした論者は「カミングアウト」を被抑圧/被差別からの「解放」を志向する言説とあわせて論じてきた。しかし、ミシェル・フーコーの権力論以降、権力の外部への「解放」の論理が疑問に付され、「カミングアウト」は権力内部の「抵抗」の行為として位置づけられるようになる。特に欧米では、レズビアン/ゲイの権利獲得の歴史が主体の確立による「抵抗」の軌跡として語られ、「カミングアウト」はアイデンティティ・ポリティクスの主要な手段として位置づけられてきた。

日本における同性愛研究は統一的アイデンティティに基づく可視化「戦略」としての「カミングアウト」に関する理論を欧米から引き継ぐ形で発展してきた。日本における初期の同性愛研究を牽引してきたヴィンセントら（1997）は「カミングアウト」をゲイ男性の主体形成の過程として捉えている（ヴィンセントほか 1997: 122）。また、風間（2002）は「カミングアウト」の実践を「同性愛を排除するための公/私の区分けを実体化してきた力学を暴く行為であり、このような実践の積み重ねにより同性愛者のおかれた現実を変化させていく行為」（風間 2002: 362）として位置付けており、「カミングアウト」の実践が公的領域からも私的領域からも排除されている同性愛（者）に対して働く差別の力学を暴き、現実を変えうる政治的な効力、つまりは権力の再編の可能性を持つことが強調されている。

しかし、近年ではジュディス・バトラーやイヴ・コゾフスキー・セジウィックの理論をはじめとしたクィア理論の登場に伴い、集団内部の同一性を前提にすることで内部の差異を

¹¹ 「カミングアウト」とは「coming out of the closet」の省略形であり、「自身が非異性愛的な欲望をもつ主体であることを（言語・振る舞い問わず）なんらかの手段で他者に伝達しようという企図をもってなされる手段」（大坪 2023 :10）と定位できる。飯野

（2023）はカミングアウトの諸相を（1）自分自身に対するカミングアウト（2）不特定多数に向けてのカミングアウト（3）特定の他者へのカミングアウト という三つの水準に整理している。「カミングアウト」という実践に関してこれまで主に議論されてきたのは主に（2）や（3）に位置する「カミングアウト」の政治的効力であり、1-2 で論じているカミングアウトは（2）や（3）の位置づけにある「カミングアウト」を指す。本稿において扱うのは「パッシング」するゲイ/バイセクシュアル男性であるため（2）は想定されず、カミングアウトと記述するときは（3）を指すことに留意されたい。

抑圧するという批判や、解放の実践として推奨されてきた「カミングアウト」という行為についても運動的規範のもとに抑圧性が指摘されるようになっている（大坪 2013）。

例えば、バトラー（1993=2021）は「公的領域が、それ自体の同性愛嫌悪で人種主義的なヘゲモニーを、文化的で政治的に構築されたアイデンティティの消去や馴致を通じて構成しているとき、従属化されたアイデンティティの徴しをそうした公的領域において行使する能力は、疑いもなく重要である」（Butler 1993=2021: 158）というように、アイデンティティ・ポリティクスで見られる種差性を強調する戦略的本質主義の果たしてきた役割に一定の評価を下しながらも、種差化されたアイデンティティを分節化することが最重要の政治的目標となることによって分節化されたカテゴリーへの同一化と同時に常に起きる排除の暴力を点検する作業が見落とされることを指摘している。そしてこれは「諸々のアイデンティティ・カテゴリーを使うことに反対する議論ではなく、そうしたあらゆる使用に伴うリスクへの注意喚起である¹²」（Butler 1993:227-8=2021:312）と説明される。

バトラーの主張はまさに集団内の同一性を前提にすることで生じる内部の差異で生じる抑圧の問題への懸念であるといえるだろう。クィア理論はアイデンティティの戦略的使用に伴うリスクを検討する重要性を示唆している。

しかし、アメリカと日本が必ずしも同じ歴史を辿るわけではない。伊野（2005）は日本におけるクィア理論の受容過程において、固定的なアイデンティティを基盤にしないことを主張するクィア理論はパッシングであり、「戦略」として、パッシングではなく「カミングアウト」すべきであるという主張や、レズビアン/ゲイの主体化が困難な日本において無批判にクィア理論を取り入れても「自分たちが解放されていくための理論」にはなりえないことを論じる複数の議論がみられたことを紹介しながら、クィア理論への反発があったことを示している。伊野（2005）はそれらに対する反駁として、前者の主張に関しては、そもそも個人が「カミングアウト」できないかもしれない社会構造を問題化せずに「カミングアウト」をしないことの非政治性を帰責させることの問題（伊野 2005: 65）を指摘し、加えて、このようなクィア理論をパッシングと呼ぶ「不当な貶価」（伊野 2005: 65）は、そもそもアイデンティティを媒介にしてセクシュアリティを語ることへの拒絶感を抱える当事者が実際にいることを隠蔽することとなることを指摘している。後者のクィア理論に対する批判に対しては、まず、アイデンティティの確立があつて、第二段階としてアイデンティティの脱構築をすべきであるという段階論を支持する者は多いことを述べながらも、そのような戦略的本質主義的な段階を絶対的なプロセスとしてしまうことは、アイデンティティ概念では捉えきることの出来ない自己定義やカミングアウトの多様な現実と戦略を捉えきることができないことを論じている。

先に引用したバトラー（Butler 1993=2021）の主張からも明らかなように、そもそもクィア理論の視点は、ゲイやバイセクシュアルというカテゴリーを必ずしも消失させるよう

¹² 「This is not an argument against using identity categories, but it is a reminder of the risk that attends every such use.」（Butler 1993: 227-228）

なものではなく、「カテゴリーという虚構に支えられていない現実はそもそも成立しない」（伊野 2005: 69）という立場に立ちながらも、そのカテゴリーを本質的なものとして想定しないところにその特徴がある。本稿においても、調査協力者を「ゲイ/バイセクシュアル男性」というカテゴリーにおいて説明するが、それらのカテゴリーはあくまでも暫定的なものに過ぎず、本研究の視点はパッシングや「カミングアウト」の問題を個人に帰せず、制度化された異性愛主義との複雑な関係性において位置づけて論じることを一つの目的としており、本質化には慎重な視点を包含する。

菊池・堀江・飯野（2019）は、視点としてのクィアを「特定の性のあり方のみを『ノーマル』とみなし、それ以外のあり方を『逸脱』と位置づけ、他者化する考え方を批判的に検討すること」（菊池・堀江・飯野 2019: 5）として説明しており、「異性愛」を支配的な制度として批判的に検討する意味合いを包含している。本稿の目的は決して「カミングアウト」に基づく「抵抗」の論理を批判するわけではなく、パッシングが個人の選択の問題としてだけでなく、いかに支配的な制度と密接な問題であるか、また「カミングアウト」に限らない「抵抗」の可能性を模索することである。

これまでの多くの実証研究において設定されてきた「クローゼット」な状況と「カミングアウト」をした状況を比較するような「イン/アウト」モデルの二項設定をクィア理論の視点から脱構築する必要はすでに指摘されており（藤井 2023）、そのためには「カミングアウト」をする主体、「クローゼット」に閉じこもる主体のどちらにも還元させられないような、個人の一人称的に語られるパッシングの経験を照射する必要があるだろう。

そして、「カミングアウトをすること」と「クローゼットに留まっていること」を二項的に設定することの問題は以下のように指摘されている（眞野 2014: 堀江 2008）。

一つ目はそもそも「カミングアウト/クローゼット」という二項的な認識論上のメタファーが現代社会で生きるゲイ/バイセクシュアル男性のリアリティを捉えるうえで妥当なのか、という疑義申し立てである。眞野（2014）は地方都市で生きるゲイ男性のライフストーリーの分析を通じて、「カミングアウト」をした記憶がなくても周りの友人は自分のことが「ゲイ」であると知っていたと語る若者の例を取りながら、「カミングアウト」をしなくてもクローゼットのなかにはいない現代の若者の「ゲイ」のリアリティを記述している。このような現実在即して、「私たちがやらなくてはならないのは、カミングアウトし続けることや語り続けることではなく、カミングアウト/クローゼットという二元論的な構図/制度を無効にすることなのではないだろうか」（眞野 2014: 78）と現在の日本社会における「カミングアウト/クローゼット」という二項対立的なイメージの脱構築の必要性を示唆する。

二つ目には、そもそも「クローゼットに留まっていること」が原理的に不可能であるという指摘である。「クローゼット」という空間の内外を隔てている境界は常に曖昧であり、クローゼットのなかに留まり、同性愛者であることを隠蔽できているという自己認識があってもそれが「本当に隠し通せているのかどうか確かめることのできない」という問題がある（堀江 2008: 106）。

パッシングの経験を主題化することによって、「カミングアウト」が一度成功してもなお、経験される「クローゼット」の問題や、そもそも「クローゼット」の中にいることを自覚しない当事者の問題にアプローチすることを可能にし、これまで多くの実証研究において設定されてきた二項的な「イン/アウト」モデルにおいて説明することで見落とされてしまう当事者の経験されるリアリティを考察することができるようになると思う。実際にゲイ/バイセクシュアル男性が社会的場面でどのように自己呈示し、振舞うのかどうかは主体的に選ばれる場合もあれば、直面する場面や状況において制約/規定されることも想定される。

パッシングの経験を通じて、既存のジェンダー規範や異性愛中心主義との交渉のあり方を一人称的な観点から記述することは、新たな「抵抗」の可能性を探る上で有効である。小手川（2023）は「ジェンダー規範との関与の仕方は、従属か抵抗かといった二者択一には限られず、身体への取り込み（内面化）、利用、譲歩といった多様な形態をとりうる」（小手川 2023: 28）ことを指摘したうえで、ジェンダー規範に対する応答を、三人称的な観点から規範に従っているか否かだけを判断するのではなく、一人称観点から単純化せずに記述することで複雑な形態を観察することができるようになるという。本稿では、ゲイ/バイセクシュアル男性が社会的場面でどのように自己を呈示し、振る舞うかを分析し、「カミングアウト/クローゼット」という二項的な枠組みでは捉えきれないような当事者のパッシング経験にアプローチすることを目指す。

第2章 主題

本研究の問いは現代の日本社会においてゲイ/バイセクシュアル男性たちが自己をどのように既存の性的アイデンティティのカテゴリーに同一化するプロセスを経由するのかということやどのような状況下で「自己呈示の操作/管理」（Goffman 1963=2001: 81）を行うのかを問い、多様な形態を持つパッシングの諸実践に関する語りを分析する。その分析からゲイ/バイセクシュアル男性によるパッシングの位置づけを再定位することを目的としている。

そこで本研究の主題（RQ）は以下のように設定される。

- ① ゲイ/バイセクシュアル男性によって語られるパッシングの諸実践とはなにを行う（/行わない）ことで成立する諸実践なのか。
- ② ゲイ/バイセクシュアル男性は規範に対してどのような態度を有しているのか。

一つ目の問いは、具体的になにを行う（/行わない）ことで社会生活の場が通過できると認識されているのか、ということをしスのゲイ/バイセクシュアル男性の当事者である調査協力者らに問い、それぞれの語りに依拠しながら考察することでパッシングの成立過程を明らかにする。先行研究で整理されたパッシングの枠組みを参照しつつ、ある程度の類型化を試みながら、パッシングが個人に選択されるような意図的な「戦略」に限らず、他者の評価や支配的規範への応答を含む多層的な実践であることを明らかにする。

二つ目の問いは規範に対する態度や調査協力者の持つ「普通」観を対話のなかから読み解

くことで、どのような規範への態度がみられるかを分析する。調査協力者らにとって自明とされている認識や語られた「異性愛者」を意味するに留まらない「普通であること」が何を指しているのかを整理しながら、規範に対する態度を明らかにする。家族や職場における相互行為のプロセスでみられる、自然化されて内在化される規範的な意識を明らかにしながら、対面的相互行為の場を「やり過ごす」ことだけではパッシングできないような水準におけるパッシングの困難を照射する。

本稿は上記の二つの問いに応えながら、最終的にはパッシングにはどのようなパフォーマンスティヴィティがあるのかを検討することによって支配的規範への「従属」や功利的な「戦略」だけに回収させられないような、パッシングの位置づけの再検討を目的としている。

第3章 先行研究の検討

3-1 「パッシング」研究の古典

「パッシング」に関する社会学的研究の初出はゴッフマン（1963=2001）による『スティグマの社会学』であり、様々なスティグマ保有者¹³たちの対面的相互行為の場における「戦略」や、それに伴う心理的な影響が考察されている。「パッシング（越境）」（Goffman 1963=2001）とは「まだ暴露されていないが〈暴露されれば〉信頼を失うようになる自己についての情報の管理/操作」（Goffman 1963=2001: 81）と定義されており、「情報制御の様々な手法（Techniques of Information Control）」（Goffman 1963:75=2001:156）として、様々な事例が紹介されている。ゴッフマンは、スティグマの「可視性（visibility）」に着目して「すでに信頼を失った者（The Discredited）」（Goffman 1963:39=2001:79）と「信頼を失う事情のある者（the Discreditable）」（Goffman 1963:39=2001:79）に分けて説明しており、後者において「パッシング（越境）」のための「管理/操作」に伴う「二重生活」が可能になることを説明するが、一瞥による判断でそのスティグマが露呈しないゲイ/バイセクシュアル男性の経験はまさに後者の範疇における経験であると言える¹⁴。

ゴッフマン（1963=2001）は「パッシング（越境）」に伴う心理現象として、

¹³ 「スティグマ保有者」という表現は『スティグマの社会学』（1963=2001）でしばしば登場する。「スティグマ」とは本来、ギリシャ語で肉体上の徴を言い表す言葉であり、今日では「不面目（=disgrace）を表す肉体上の徴ではなく、不面目自体をいい表すのに使われている（Goffman 1963=2001: 10=13）」と説明される。一方で「スティグマという言葉は、人の信頼をひどく失わせるような属性を言い表すような属性を言い表すために用いられるが、本当に必要なのは明らかに属性ではなくて関係を表す言葉なのだ（Goffman 1963=2001:16）」というように本書で焦点が当てられているのは「常人」と「スティグマ保有者」の関係性の問題であることには留意されたい。

¹⁴ 草柳は『スティグマの社会学』（Goffman 1963=2001）の論を「完全な秘密」と「完全な情報開示」の中間に平がるグレーゾーンを論じていると解釈しており、「組織の期待に従っているように見えてそうではない、他者たちの期待／仮定の範囲に合わせながらもそうではない、不適切でありながらそれを隠し適切さを装う、この曖昧な領域に「二重性」がさまざまな様態で設えられる可能性」（草柳 2023: 117）を論じていることを読む。

- ① 「つねにいつ崩壊するかわからないという点で非常な心理的負担」(Goffman 1963=2001: 148)
- ② 「新たに所属しようとしているカテゴリーの構成員による＜攻撃的＞な言及に反対できないとき[.....]不実と自己嫌悪に悩む」(Goffman 1963=2001: 149)
- ③ 「他人が何も仕組まれておらず、また配慮もされていないものとして扱うような社会的場面に伴うさまざまな局面に、越境しているものは敏感でなくてはならない」(Goffman 1963=2001: 150)

など、自己に関する重要な情報の管理/操作を伴う「パッシング(越境)」の経験は個人に多くの心理的負担を伴うことが示される。

また、同書(Goffman 1963=2001)では同性愛者の事例も複数回登場する。しかし、同性愛者のスティグマは「個人の性格上のさまざまな欠点¹⁵⁾」(Goffman 1963:11=2001:18)と定位されている。そして、「〈両者間の接触〉という問題—つまりスティグマのある者と常人が同一の社会的場面にある場合[.....]にとくに関心を払っている」(Goffman 1963=2001: 30-31)にもかかわらず「同一の社会的場面」において「スティグマのある者」と「常人」のあいだで働く権力関係の機序の考察が十分だとは言えない¹⁶⁾。

加えて、同書(Goffman 1963=2001)で取り上げられるパッシングの論理においてスティグマの可視性に着目し、「信頼を失う事情のある者」に限定して議論されているが、「ユダヤ人」をはじめとした多様なスティグマ保有者が考察の対象となっており、「パッシング(越境)」の戦略的特性についても、「明らかに第一の戦略は、スティグマのシンボルとなっている記号を隠すか、その痕跡をなくしてしまうこと¹⁷⁾」(Goffman 1963:75=2001:157)と極めて一般化された説明がなされており、同性愛者に固有のパッシングのあり方は追求されていない。つまり、同性愛者にとって、その「記号」とは具体的にはどのようなモノなのか、そもそもその「記号」はスティグマ保有者と「常人」の間で必ずしも共有されているモノなのかということは必ずしも明らかにされない。

また、同時代におけるパッシング研究としてよく知られているのがエスノメソドロジー

¹⁵⁾ 原文では以下の通りである。“Next there are **blemishes of individual character** perceived as weak will, domineering or unnatural passions, treacherous and rigid beliefs, and dishonesty, these being inferred from a known record of, for example, mental disorder, imprisonment, addiction, alcoholism, homosexuality, unemployment, suicidal attempts, and radical political behavior.” (Goffman 1963: 11 筆者強調)

¹⁶⁾ あくまで『スティグマの社会学』(1963=2001)における「パッシング」に関する考察において対面的相互行為の場における権力関係への考察が不足していることを指摘しており、ゴッフマンのすべての論が対面的相互行為の場においてはたらく権力関係を軽視していることを指摘しているわけではない。例えば、ゴッフマンの最晩年の著書『Forms of Talk』(1981)では対話の場面においてはたらく権力関係の機序に言及している。

¹⁷⁾ 原文では以下の通りである。“Obviously, one **strategy** is to conceal or obliterate signs that have come to be stigma symbols. Name-changing is a well-known example.” (Goffman 1963: 75 筆者強調)

の創始者として知られるハロルド・ガーフィンケルによる通称「アグネス論文」(Garfinkel 1967=2004)である。

ゴッフマンが複数のスティグマ保有者の事例を分析するのと対照的にアグネスという一人のトランス女性を考察の対象として「パッシング (通過作業)」(Garfinkel 1967=2004)を分析するガーフィンケルは、ゴッフマンの示したスティグマの徴を隠すことは「パッシング (通過作業)」の一面的な部分に過ぎないことを指摘しており、むしろアグネスにとっての「パッシング (通過作業)」とは第一義的に「自分とおなじようなごく普通の人々 (つまり正常な女性たち)」(Garfinkel 1967=2004: 289)を目指す実践であることが示されている。またアグネスが自己を客観的に評価するときに自分を他の人(「正常な女性たち」と同じ「正常」なものとして見なしており、なによりそれを自明のものとすることを求めたという (Garfinkel 1967=2004: 289)。つまり、アグネスにとっての「パッシング (通過作業)」とは必ずしも、スティグマのシンボルとなる記号を隠す自覚のある作業ではなく、それは第一義的に「普通」で「あり続ける」実践であった¹⁸。

本稿において考察の対象としているのは、現代の日本社会で暮らすシスジェンダーのゲイ/バイセクシュアル男性であり、性自認が出生時に割り当てられた性別と異なるトランス女性のパッシングと異なる経験である。例えば、ガーフィンケルは同性愛者やトランスヴェスタイト¹⁹とは対照的な信念として「どうあろうと自分は、本当にもともと自然な女性なんだというのが、アグネスの信念だった」(Garfinkel 1967=2004: 296)ことを説明しているが、同性への性的欲望や性的関係を持ちゲイ/バイセクシュアルというカテゴリーに自己を定位している男性がパッシングする際に「自分はもともと自然な異性愛者である」という信念を持つことは考えづらいだろう。

しかし、パッシングとはゴッフマンが提起するようなスティグマの徴を隠すための自己呈示の「操作/管理」であるという理解では不十分であり、第一義的に「普通」を目指す実践であるという発見は示唆深く、ゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングの在り方とも連関する可能性が大いにある。

一方でブシュカラ・プラサド (2005=2018) は「ドラマツルギストと同じく、エスノメソドロジストは過度に意識的行為に囚われており、社会的現実を作り上げる行為者のスキルに納得してしまっている。」(Prased 2005=2018: 76)という批判を紹介するが、ガーフィンケルはアグネスによるパスの成功事例のみに主眼を置くことでパッシングの功利的かつ意識的な側面のみを照射している点にその限界がある²⁰。

¹⁸ 河村 (2017) も同様の指摘をしている。

¹⁹ ドラッグなどに代表される、性自認と身体的性が一致しているが、割り当てられたジェンダーとは異なって女装/男装などの異性装をする方。

²⁰ 鶴田 (2004) はゴッフマン/ガーフィンケルのパッシングの論理において「ノーマルな外見」が所与のものとされており、一瞥で「ノーマルな外見」をもつ者として見てもらおうとする人々の実践のありようを捉えきれていなかったこと (鶴田 2004: 33-34) をトランスジェンダー当事者の語りに依拠しながらゴッフマン/ガーフィンケルのパッシングの論

3-2 アメリカ社会における LGB のパッシング

1990 年代以降のアメリカ社会における LGB のパッシングを分析する研究 (Kanuha 1999; Rosenfield 2009; Shippee 2011) は主にゴッフマンのスティグマ論や「パッシング=越境」の論理を参照/批判的検討しパッシングの問題を論じている。

Kanuha (1999) は米国における有色人種のゲイ男性/レズビアン女性 (20 代~50 代) を対象としたインタビューを通して、パッシングが可能になる 4 つの条件を提示しており、LGB のパッシングに関して、ゴッフマンのパッシングの論理をさらに発展させている。条件の一つ目にはジェンダー規範との「適合性 (fit)」、二つ目は「リスクと安全性 (risk and safety)」、三つ目には「観客との関係 (relationships with the audience)」、最後には「モチベーションとエネルギー (motivation and energy)」の問題が掲げられている。「リスクと安全性」や「観客との関係」はゴッフマン (1963=2001) も言及した要素であるが、ジェンダー規範との「適合性」や「モチベーションとエネルギー」の問題は Kanuha (1999) による新しい視点であった (Shippee 2011)。

また、ジェンダー規範との「適合」のプロセスはゲイ男性のみに見られた傾向であり、レズビアン女性は幼少期にステレオタイプの振舞いや身体を達成していなくても「修正」の選択をとることが確認されなかった。Kanuha (1999) はゴッフマンの枠組みに従い、パッシングを意識的/意図的なパフォーマンスに位置付けて論じており、それは「抵抗」行為として説明される。しかし、パッシングとつねに「意識的」に行われるような実践で、パッシングの行為者はパッシングが一時的で幻想的なものであることを知っているのだろうか²¹という点は本稿で確認する点である。

次に Rosenfield (2009) はロサンゼルスにおける 65 歳以上の高齢のゲイ/レズビアン 28 名を対象にインタビューを行い、パッシングの問題を論じている。1950 年代以降の同化主義的なホモファイル運動から 1960 年代後半にはじまるゲイ解放運動という歴史的文脈のなかで、二つの競合する規範意識のなか、パッシングの正当化のためにいかに異性愛規範が動員され、ホモファイル運動の過程で醸成された同化主義的な規範 (homonormative precepts) が用いられているかを明らかにする。パッシングのあり方としては多くの調査協力者にとって「同性愛者であること」の問題は性的対象の選択の問題として捉えていたが、一部の調査協力者は「性別」にふさわしい外見を構築するための「ジェンダー化された外見の管理」が行われた。また、「ジェンダー不適合者」との交流を避けることや、ゲイ男性の場合はその相手が性別に適合的な見た目をしている場合でも同性間の交流を避けることが選ばれるなどの「ジェンダー化された関係の管理」も観察され、「ジェンダー化された外見

理の限界として提示している。

²¹ “I suggest that passing always constitutes an **intentional performance**, and that passers know that their "passing" as performance is **temporary and illusory**” (Kanuha 1999: 41 筆者強調)

の管理」と「ジェンダー化された関係の管理」の二つの局面にパッシングが整理された。ジェンダーへの適合が中核的なパッシングの基準であることが説明され、「適合」を補強するために逸脱に対しての「からかい」や「笑い」に共謀しないといけない場面も説明され、個人的・政治的利益のために利用される異性愛規範と同化主義的な規範のそれぞれの連関が論じられている。Rosenfield (2009) は制度的な異性愛規範によって課せられる制約を反映しながら、社会的圧力を回避し、個人的な安全を確保するために、高齢の同性愛者が選択した戦略であるとしてパッシングを解釈している。この二重の視点は、パッシングが、アイデンティティを管理する主体性と、抑圧的な社会規範の影響の両方を含むことを浮き彫りにする。日本はアメリカと同様のゲイ解放運動の歴史を経験していないため、同様の論理は適用されないが、いかにして規範的な態度がパッシングの正当化のために用いられるか、という視点は本稿において援用したい。

Shippee (2011) はアメリカ中西部の 18 人の 10～40 代のレズビアン/ゲイ（白人：16 人、東アジア系：1 人、黒人と白人のミックス：1 人）に対してインタビューを行い、ゲイ/レズビアンの個人がパッシング行為者の解釈に焦点を当てて、彼女ら/彼らを取り巻く文化的環境の中でパッシングがどのように根拠づけられているかを検証した。Shippee (2011) はパッシングが自己呈示の在り方を変えることなく「何を話さないか」ということに主眼が置かれていたことが説明される。

またパッシングに動員された枠組みに「親密さ」を挙げている。家族など親密性の高い関係性においては開示の圧力が高く、拒絶のリスクも高くなる。一方で同僚や同級生など中程度の親密性の関係性においてはプライバシーの境界線を保ちやすく、パッシングが選ばれる傾向がある。見知らぬ人や遠い親戚などの低い親密性においてはパッシングが自然と選ばれる、という傾向が論じられた。パッシングという自己呈示のあり方は社会規範のなかでどのようにして自己を規定するかというだけではなく、関係のなかで決定されるような問題であることが示唆される。

ゴッフマンによる研究や 1990 年代以降のゴッフマンの枠組みを援用する研究は様々な事例を挙げて、スティグマ管理の方略の一つとしてパッシングを説明しているが、そこで提示される事例はすべてアメリカ社会における事例に限定されており²²、日本社会で暮らすゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングにおいても同様のプロセスや機序がみられるかどうかは検討の余地がある。例えば、小宮（2015）は日英の文化比較を行い、日本/英国における同性愛嫌悪の特徴をそれぞれ、黙示的嫌悪/明示的嫌悪とそれぞれ類型化して説明している。国家や文化圏によって「同性愛（者）」に対する差別の様式や態度は様々であり、当該

²² アメリカ社会を舞台にする研究のみならず、トルコの労働者階級の LGBTQ+ へのインタビューをもとに、支配的な性的指向や性自認の規範に合うよう行動すると定義される様々なパッシングが制度的規範に対処する戦略としてどのように用いられているかを明らかにする研究 (Mustafa ほか 2022) など存在する。

社会においていかなる規範が共有されているかどうか依存して、パッシングの在り方が異なることが予想できる。また、パッシングを対面的相互行為の場における「戦略」に帰することで限定的なパッシング理解に留まってしまうことも留意されたい。例えば、Daniel (2018) はパッシングを「能動のパッシング (active passing)」と「受動のパッシング (passive passing)」に類型化しており、前者の「能動のパッシング」を「期待やステレオタイプ、分類の機序を利用して、特定の人物像であるという認識を作り出したり、ある種の人間であると認識されるのを回避したりする²³」戦略として位置づけている一方で、後者の「受動のパッシング」は「社会的集団の目印を根拠に、個人が意図せずに誤認される場合²⁴」に起きるものとして説明しており、「戦略」としては説明されない。Daniel (2018) はこの類型は暫定的なものであり、実際には曖昧な場合もあることを説明するが、この類型化は、個人の功利的な「戦略」に回収できないパッシングを考察するうえで有効だろう。対面的相互行為の場における「とりあえず乗り越える」ような、パッシングの一回性ゆえの戦略的な側面を照射し、ゲイ/バイセクシュアル男性の「パッシング」を理解することは継続的に行われなくてはならないために、「つねにいつ崩壊するかわからない」(Goffman 1963=2001: 148) がゆえの個人の可傷性を考察することを難しくしている。

本稿ではなぜ、パッシングに及ぶのかという個人のパッシングの意味付けや、語られるまでは意識化されることのなかったパッシングの諸実践、「パッシングの失敗可能性」という側面に焦点を当てて、論を組み立てることでこれまで言及されてこなかったパッシングの新しい様態を示すことを試みる。

例えば、バトラー (1993=2021) はネラ・ラーセンの『パッシング；流砂にのまれて』 (1986=2022) の作品分析を通して、パッシングのより複雑な様相に言及しており、その分析からはパッシングにおよぶ個人の可傷性を読み取ることができる。ラーセンによる本作においては、人種主義者である白人男性のベルーと、「白人」としてつねにパッシングしている有色人種のクレア (ベルーの妻) と、しばしば「白人」としてパッシングすることのある有色人種のアイリーン (クレアの友人) の三人で「白さを規範とすることを前提にする会話」(バトラー 1993=2020: 233) がなされ、彼女たちはベルーによる黒人差別的な発言に対して、「笑う」ことでその場を通過するシーンが登場するが、彼女たちにとって「黒人」というカテゴリーに対する差別に不必要に反応してしまうことは自身の立場を危うくするものであり、ベルーの妻であるクレアならなおさら敏感にならざるをえない。これらのことから白人としてパスする実践とは「クレアがパスしているのは、肌の色が薄いからだけではなく、彼女が自分の黒さを会話に出すことを拒否しているからであり、そうすることで、彼女が白人であるというヘゲモニー的前提に異を挟むような会話上の徴を抑えているからだ」

²³ “It involves exploiting expectations, stereotypes, and other sorting mechanisms to create or avoid the perception of a certain type of person.” (Daniel 2018: 3)

²⁴ “Passive passing occurs when an individual is unintentionally misidentified on the strength of these social group markers.” (Daniel 2018: 3)

(Butler 1993=2021: 232-233) と説明があるように、特権的な身体的特徴—それはクレアとアイリーンの肌の色素の薄さ—を持つことだけで可能になるわけではなく、規範的な態度を取ることもまた要求されるような諸実践である。

加えて、一度通過する (passed) だけでは叶わず、一度通過する (passed) ことは常に通過し続けなくてはならない (passing) ことを意味する。ここで分析されている人種的パッシングの特徴はLGBのパッシングと重なるところがあるだろう。実際に「異性愛を規範とすることを前提にする会話」はしばしば同性愛者が遭遇する機会であり、そのような支配的な文化や規範に迎合しないと自身の立場が危ぶまれるときにゲイ/バイセクシュアル男性はパッシングのために規範的な態度を取り続けるだろう。そしてそれらの実践は一度達成されればそれで終わるような実践ではなく、常に達成し続けなければならない継続性が要求されるような諸実践である。そして、この一連の通過行為こそが、パッシングである。本稿においてこれまでの先行研究において、明らかにされてきたことと照らし合わせながら日本社会におけるLGBのパッシングの問題にアプローチする。また、パッシングと記述する際には意識的に社会的場面においてパスを試みるためのゲイ/バイセクシュアル男性の諸実践も含むが、主体的であり意識的な実践であるかどうかにかかわらず、相互行為の場を通過、もしくは越境すること自体もパッシングと呼ぶ。

3-3 日本社会におけるパッシング

本節で確認するのは日本社会においてパッシングの問題がいかに論じられてきたかという点である。パッシングに関する研究の検討に入る前に、心理学における研究を概観する。そこでは、多くの同性愛者は異性愛者を演じないといけないがゆえに、さまざまな心理的ストレスを抱えることが報告されている (日高 2000, 石丸 2002)。日高 (2000) は異性愛者を装うことによるストレスを感じている者ほど抑鬱、特性不安、孤独感が高いことを示している。つまり、日本社会におけるゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングに伴う心理的負担はすでに説明されている。

社会学の領域においてLGBのパッシングの問題を論じているものとして三部 (2014) の研究が挙げられる。三部 (2014) はゴッフマンのスティグマ論を参照しながら、当事者の会におけるLGBに対するインタビューを行っており、その分析において a) 性的指向を周囲に言わないことによるパッシング b) 自己を「異性愛者」と周囲に提示するパッシングと類型化された二つのパッシング局面を示す。しかし、三部 (2014) の研究において主題化されているのは子から親へのカミングアウトの経験と問題/カミングアウトを受ける親の経験する問題であり限定的なパッシングの考察に留まっている。例えば、三部 (2014) は対面的相互行為の場におけるパッシングのみを分析の対象としており、パッシングの位置づけは十分に考察の対象とされていない。

また前述したとおり、眞野 (2014) は「パッシング」というタームやゴッフマンの枠組みを援用しないものの、カミングアウトをした記憶がなくても周りの友人は自分のことを「ゲ

イ」だと知っていたと語る若者の例を取りながら、カミングアウトをしなくてもクローゼットのなかにはいない現代の若者の「ゲイ」のリアリティを記述している。

LGB のパッシング以外で日本においてゴッフマンの「パッシング」概念を分析視角とするものは他に〈ひきこもり〉のパッシング実践とその技法（石川, 2003）、リウマチ患者のパッシング実践（山田 2015）や髪のない女性の「生きづらさ」への対処戦略としてのパッシング（吉村 2020）やゴッフマンやガーフィンケルの「パッシング」概念を整理し、再検討するものなどが挙げられる。（樫田 1991；鶴田 2004；河村 2017）

LGB のパッシングに関する研究は少なく、実際に日本社会に生きるゲイ/バイセクシュアル男性はパッシングをどのように経験するのかということを明らかにすることによって、パッシングの可能性に言及し、これまでのパッシング研究の延長に本研究を位置づけながら理論的考察を試みる。

第 4 章 調査の枠組みと調査協力者について

4-1 調査手法

研究手法としては語り手が紡ぎ出す主観的意味世界をすくいとることに重点を置くライフストーリー法を用いることで、彼らのパッシングに関する経験を中心とした主観的世界を分析対象とする。

ライフストーリー研究はインタビューによって得られた史資料が、話し手とインタビュアーの共同作業による構築物であるという前提に立つ。それは桜井（2015）が「対話的構築主義」と呼んだものであり、「対話」という言葉は以下の意味で用いられたと説明されている。

「「対話」という言葉で表現したかったのは……関係としては非対称だけど調査協力者も主体でありこちらも主体であるということで……調査協力者を調査対象として見るだけではなく、自己も調査対象であることを意味します。」（桜井・西倉 2017：桜井の発言より）

ライフストーリー法は調査者を主体、調査協力者を客体とみなす従来の捉え方をせず、調査者/調査協力者どちらも主体としてみなすアクティブインタビューの側面を有している点にその特徴がある。インタビューの場では調査者である「私」もゲイ男性の当事者であることを明かして、時には相互了解を得ながら進められた。そのプロセスを経て得られた史資料を分析するうえで聞き手である「私」の影響は無視できず、共同的に構築された史資料として解釈することが妥当である。

語り手によってパッシングという人生経験が再構成され意味づけられているのかということ問うことで、パッシングがどのようにして成立していると認識されているのか、どのような規範に対する態度を有するのかということ考察可能にする。

中尾（2021）は客観主義的な見方での「事実」の把握よりも、語り手の意味世界を把握し

ようとする立場や 時系列的な変遷などのプロセスの観点を取り入れる調査において、ライフストーリー法は調査法としての強みをもつことを説明している。パッシングの成立を論じるためには語り手の意味世界を通して一人称で語られる語りを解釈することが重要であり、パッシングに及ぶようになるきっかけや、どのような経緯でパッシングに及ぶようになったのか、という時系列で追わないといけない側面がある。

しかし、前提として、インタビューで聞かれた調査協力者らの自己に関する語りは暫定的な自己の要約に過ぎず、また対話の場では調査者である「私」と調査協力者のあいだで相互理解が取ることができるように、暫定的に既存のカテゴリーに収斂させる形で自身のことを説明するような場面もあったが、それらの語りを紐解くことですべての「経験」や「体験²⁵」を捉えきくことは原理的に不可能である。その意味で、語られた「語り」は調査協力者の「生」を網羅しない。そして、「経験」や「体験」が再統合された「語り」を主な分析の対象とする以上、限定的な接近になることには留意されたい。「生とはまさしく、私たちがそれに与えようとするいかなる説明も超えたものと考えられる」(Butler 2005= [2008] 2024: 63) であり、対話において語られる語りにはつねに制約がある。

また、語りの分析においては調査協力者それぞれ個人の語りごとに分類して分析することとはせずに、語りの種類ごとに整理して考察することを試みる。パッシングに関する理論的考察を本稿の目的の一つとしており、パッシングのあり方の整理をするために「語りの種類」で語りを整理することを試みる。本稿の対象としているのは日常的にパッシングしているゲイ/バイセクシュアル男性であり、あまりにも詳細な個人ごとのライフストーリーの記述は個人の特定やそれに伴うアウトイングの危険を誘引しかねない。そのため、必ずしも、今回インタビューで得られたすべての語りを本稿で公開せず、パッシングの理論化のために必要である語りのみを公開し、それを対象に分析している。

またインタビューに際しては、事前に調査概要に関する書類を調査協力者に共有し、書面および口頭により説明を行って、同意書への署名をお願いしてからインタビューを録音とともに実施した。調査の方法や録音データの管理に関しては、個人情報漏洩しないように細心の注意を払って管理しており、それらの方法に関して、2023年10月17日倫理委員会の承認を得ている(受付番号: 517)²⁶。

分析に際してはインタビューの録音を書き起こし、トランスクリプトを作成して、パッシングやカミングアウトに対する意味付けをはじめとしたことを語りから抽出し、先行研究

²⁵ 町田(2022)は「体験」を「経験」と区別して、単に「出来事」を経ることではなく、「出来事」をその時々において固有の「身体感覚」や「実感」、「感じ」を伴って潜り抜けること、と定義しており、「経験」が主体にとって対象化されえる者であるのに対して、「体験」は主体にとって客体化されえないものとして捉えている。

²⁶ 研究審査申請書においては、申請の段階ではパイロットインタビューのみ行っており、本調査を行っていない段階であったため、暫定的に「コードマトリックス分析」によって語りを分析することを宣言しているが、本稿においては分析手法に関して特定の方法論に依拠しないという姿勢に変更している。データ処理の方法を変更することによって、調査協力者に影響を及ぼすことは考えづらいため、変更を採用している。

で示された既存の枠組み（パッシングの「能動/受動」、規範への態度、や関係性における「親密性」など）と照らし合わせながら分析している。

4-2 調査協力者

本研究において調査協力者は日本社会で暮らすパッシングの経験を持つシスのゲイ/バイセクシュアル男性であり、7名のゲイ/バイセクシュアル男性と1名のレズビアン女性に話を聞かせていただき、本稿においては5名のゲイ/バイセクシュアル男性の語りを分析の対象としている。それぞれの私との関係としては私の知り合いからの紹介（クジラさん、ブドウさん）やSNSやインターネットを通じて知り合った友人（イチゴさん、うどうさん）、私の中学時代からの友人（ヒツジさん）に協力を依頼した。話は協力者の方に希望を伺い、それに沿って対面（ブドウさん、イチゴさん、ヒツジさん）とオンライン（クジラさん、ライオンさん）でそれぞれ話を聞かせていただいた。調査協力者の詳細に関しては以下の通りである（表1）。

名前	年齢	性的指向	職業	インタビュー実施日
クジラさん	28歳	ゲイ	事業会社の人事職	2023年10月25日, 2024年6月3日
ライオンさん	35歳	バイ	システムエンジニア	2023年6月24日（プレイインタビュー）, 2024年7月2日
イチゴさん	23歳	ゲイ	広告代理店の営業職	2024年4月20日
ブドウさん	23歳	ゲイ	高校教員	2024年5月11日
ヒツジさん	23歳	ゲイ	アパレルの接客業	2023年5月30日（プレイインタビュー）, 2024年10月16日

（表1 調査協力者）

対象をゲイ/バイセクシュアル男性に限定しているのは第一に調査者の調査協力者へのアクセスの問題もあるが、加えて、パッシングが既存のジェンダー規範と不可分な実践であり、ジェンダー規範への適合プロセスがゲイ男性のみに見られたこと（Kanuha 1999）などを理由にゲイ/バイセクシュアル男性に限定している。

心理学の実証的な研究群は、同性愛に対する態度に「性差」があることを報告しており、アメリカにおいて、女性より男性の方が同性愛への否定的な態度を示し、男性による男性同性愛者に対する蔑視が女性のレズビアン女性に対する蔑視よりも深刻であり、男性同性愛者が最も嫌悪に晒されやすいことが報告されている（Kite and Whitley 1996）。

Kite and Whitley（1996）は男性同性愛者がより激しい蔑視の対象になるのは、彼らが

「男性である (being male)」という特権性の放棄をしていると認識されているからであると説明する。日本における心理学の実証研究においても個人的受容感において女性はゲイ男性・レズビアン女性を同程度受容し、またレズビアン女性は男女ともに同程度に受容されていた一方で、男性のゲイに対する受容感のみが低いことが明らかとなっている (織田・野村 2019)。

ゲイ男性とレズビアン女性は同じ「同性愛者」というカテゴリーで括られることもしばしばあり、性的少数者として生きるうえで重なるような経験があることも想定できるが「ゲイであること」と「レズビアンであること」はそれぞれ異なる経験である。

竹村 ([2002]2021) は男性同性愛と女性同性愛の非対称性の基盤に性差別の存在があることを論じている。ゲイ男性の方がより可視的であり、より強力に弾圧されるのは、女性の場合には終身的な単婚を前提に社会でヘゲモニーを獲得する階級を再生産する家庭内のセクシュアリティである「正しいセクシュアリティ」から得られる特権が比較的限られているのに対し、ゲイ男性は「正しいセクシュアリティ」を拒否することによって、彼らに与えられるはずであった多大な特権を捨て去り、「正しいセクシュアリティ」への疑義を突き付ける価値転覆力をより強力に持ちうるためである (竹村 [2002]2021: 42)。竹村 ([2002]2021) の論理に従えば「生殖=次代再生産」(竹村 [2002]2021: 43) に貢献する「正しいセクシュアリティ」としての「異性愛者」として社会場面を通過することで獲得できる「特権性」は男女において非対称的なものであり、男性の方が獲得しえるものである。そのためシス男性であるゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングは「男性」に固有の事象として認識すべきであり、ゲイ男性とレズビアン女性のパッシングを同じ水準で論じることとはできない²⁷。

本稿においては、より同性愛嫌悪に晒されやすく、パッシングすることによって得られる「特権性」を獲得しやすいとされる男性同性愛の当事者であるゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングに考察の範囲を絞り、レズビアン/バイセクシュアル女性のパッシングの問題は今後の課題としたい。

しかし、セジウィック (1990=1999) は「レズビアンとゲイ男性がそれぞれの歴史、文化、アイデンティティ、政治学、そして運命という、議論も多いが重要な側面を分かち合っているかもしれないという、新たな感覚が導かれてきた」(Sedgwick 1990=1999: 52) なかで、ジェンダーとは別個のセクシュアリティという軸が理論化されてきたことを説明しており、理論的枠組みにおいてはレズビアンを想定している「同性愛 (/者)」に関する議論や研究を援用しているが、あくまで本研究における考察の対象はシスのゲイ/バイセクシュアル男性に限定されているという本研究の限界には留意されたい。

²⁷ レズビアン女性に対する抑圧がないことを説明しているわけではない。ゲイ男性は「禁止」の対象となりえるために可視的であり弾圧されるが、レズビアンは存在が「抹消」されており、「禁止の対象」にさえなりえない (Butler 1991=1996)。それぞれの抑圧の形態がまったく異なるため、抑圧に対する応答の側面を持つパッシングの分析に際して、本稿においては男性に限定せざるをえなかった。

4-3 研究者のポジショナリティ

すでに述べている通り、本研究において調査者であり、インタビューの聞き手でもあり、本稿を執筆している「私」は本研究において、ゲイ男性としての当事者性を有する存在であり、そのことが明かされながら実施されたインタビューにおいて中立的な立場ではいられないことには留意されたい。インタビューの場においても、質問者と回答者の立場が逆転する場面や、調査協力者が質問に答えあぐねたときに調査者である「私」の経験を話すことで調査協力者の語りが促された場面もあった。

本稿の分析において、主に対象とするのは調査協力者の経験に関する語りになるが、その語りの産出に「私」の経験に関する語りがおおいに関与する場合、「私」自身の経験に関する語りもまた分析の対象となる。本研究においては、一般化された知の積み上げを目指す伝統的な学問において目指されるべき主観的態度を削ぎ落した「客観的」で「中立的」な態度を取ることはできない。差別とマイノリティの問題についてアイデンティティの孕む権力という観点から理論的に検討している坂本（2005）は「社会の中で、差別やマイノリティの問題を客観的に論じ裁ける第三者は存在しないと考えている。すべての人が当事者であり、共犯者である。」（坂本 2005: vii）と論じるが、そもそも差別の問題は中立的な立場から論じることのできない問題であり、インタビューの聴き手の立場としてここに記述する。

第5章 ライフストーリーの要約

5-1 クジラさん

クジラさんは東海地方出身の28歳（二回目のインタビュー実施時）のシスゲイ男性であり、大学進学を機に上京し、18歳から今まで東京で一人暮らしをしている。私の友人からの紹介を受けて、場所と時間の希望を伺い、オンラインで計二回に及んで話を聞かせていただいた。クジラさんは自己のセクシュアリティの開示状態として女性の友人（5～6人）に対してのみカミングアウトをしていることを話しており、それ以外の場では完全にパスしながら社会生活を送っていると言う。幼少期に「ビーズ」や「きれいなもの」が好きだったことから、同級生に「オカマ」と名指されたことで同性に対する性的欲望を自覚する以前に、自己の「普通」からのズレを初めて認識したと話す。職場においてカミングアウトをしない理由を尋ねると、「どっか普通と違うってことはやっぱりいつかどこかで不利益を被る可能性があるから」や、カミングアウトすることによって「仕事に影響が出てしまう」ことを話している。「ノンケモード」（職場や家族との場をはじめとしたカミングアウトをしていない場）と「そうではないモード」（ゲイ/バイセクシュアル男性の友人らと遊んだり、飲んだりする場が主に語られた）それぞれで生活するうえで二つの「モード」を使い分けていると話し、それとは別に〈一人の世界〉が必要であることを話した。そしてクジラさんは〈あっちの世界〉における抑圧的な圧力に基づく困難だけではなく、〈こっちの世界〉における異なる基準の同調圧力の存在を話した。

5-2 ライオンさん

ライオンさんは関東地方出身で、現在も家族と同居している 35 歳のシス男性である。SNS を通じて知り合い、インタビューを依頼したプレインタビューにおいて本人の性的指向について聞くと「ゲイ」や「バイセクシュアル」というカテゴリーに自身を当てはめたくないと言いつつも実態としては「バイセクシュアル」に近いことが説明されたが、二度目のインタビューにおいては「バイセクシュアル」であることが自明であるとして説明が進み、一度目のインタビューを振り返り「カテゴリーに当てはめたくない」という感覚はどのようなものだったのかと質問をすると、カテゴリーに「当てはめたくない」というより「意識したことがない」ことが強調された。異性愛者として社会生活を通過していることについて聞くと、そもそも自分はパスしているという実感がなく、ただ同性との関係やセクシュアリティについては「言わないだけ」と説明している。本人は「異性と結婚をするべきである」という一つの考えを持っており、「ゲイ」にも「ヘテロ」にも同一化できない両義性ゆえの困難が語られた。

5-3 イチゴさん

イチゴさんは東海地方出身の 23 歳のシスゲイ男性である。大学進学を機に上京し、18 歳から今まで東京で一人暮らしをしており、現在営業職をしている。誰に対しても自身の性的指向は明かしていないと話しており、職場においても友人関係においても家族との相互行為の場においてもパッシングしている。しかし、パスすること自体にストレスは感じていないと語っている。これまで「同性愛嫌悪的な言説に触れたことがあるか？」という質問に対して、「触れたことがない」と語られ、同性愛に対する「差別はないのではない」と認識しているということも語られた。加えて、「LGBT」の問題にも関心がないことが話された。異性間の結婚を自明視しており、結婚願望を持つ理由として「親から、うん、愛情たっぷりもらって育てられた子だから、多分、家庭に対する憧れがどっかにあって、自分もこういう家庭を築きたいなっていうのは多分心にあって」と語っている。

5-4 ブドウさん

ブドウさんは九州地方出身の 23 歳のシスゲイ男性である。大学進学を機に上京し、18 歳から現在まで東京で一人暮らしをしており、現在は高校教諭として勤めている。私の友人に紹介いただきインタビューを依頼し、第一回のインタビューではその友人も同席したうえで話を聞かせていただき、第二回のインタビューではオンラインにて一時間ほど話を聞かせていただいた。2024 年 5 月 11 日の第一回インタビュー時点では前職の友人数名に対して退職時にカミングアウトをしたことが話されたが、第二回のインタビューにおいて職場における同期にカミングアウトしたことが語られた。学生時代は自身の性的指向ゆえの悩みよりも「くせ毛」など容姿に関して「いじられた」経験がより大きな悩みとして経験され

たことを話している。教員という立場ゆえに公的にカミングアウトをすることの難しさを語っており、カミングアウトできないことを「保身なのかな」と迷いを見せつつも、自分自身がカミングアウトをすることは教え子たちにとってプラスに働かないことを話す。生徒たちからの反応がわからない以上、万が一自分がカミングアウトをして、それが「イジリ」に繋がったときに学内にいるはずの性的少数者に対する抑圧として機能してしまう可能性を危惧しており「正当性」がないとカミングアウトはできないと話した。

ブドウさんは調査協力者のなかで唯一、「パッシングの失敗」について語っており、部活の先輩に「ゲイであること」が露見したことを話した。露見した理由について尋ねると、目線や振舞いなどを根拠に推察されたことを話し、「ホモなの？」と聞かれることで結果的にカミングアウトをさせられた経験を話した。

5-5 ヒツジさん

ヒツジさんは関東地方出身で23歳のシスゲイ男性である。現在はアパレル関係の接客業に勤めており、実家において両親や兄弟とともに暮らしている。私との関係としては中学と高校を共にしている友人である。プレインタビューと合わせると計二回のインタビューを行っており、職場や家族との相互行為の場では基本的にパッシングしており、高校時代の友人数名や前職の友人にはカミングアウトをしていることを話す。パッシングは基本的にストレスのかからない問題であると認識しており、パッシングの一つの在り方として同性のパートナーに関する話を女性に置き換えるという手法を用いていることを話している。19歳のときに筆者である私からのカミングアウトを受けたことをきっかけに、「ゲイ/バイセクシュアル」という一つの「生」のあり方を認識し、これまで自分の抱いてきた同性に対する性的欲望が一つの人格的なカテゴリーに統合されていった過程を話した。

第6章 分析

6-1 パッシングとはどのような実践なのか—パッシングの多様性

本節では当事者の語りを基に、対面的相互行為の場における具体的なパッシング実践の多様性を明らかにする。パッシングの形態は、先行研究の視点に基づき、主に（１）「嘘をついたり」（２）「言わない（言えない）」、（３）「コミュニティ」を「広げない」という三種に整理する。

（１）「嘘をついたり」することと（２）「言わない（言えない）」ことについては、それぞれ、三部（2014）が示した「(b) 異性愛者として提示するパッシング」「(a) 性的指向を言わないことによるパッシング」の類型に対応する。しかし、「言わない（言えない）」ことは必ずしも性的指向を隠すことや「異性愛者」として振る舞うことに限られない。それは、Kanuha（1999）や Rosenfield（2009）が指摘するジェンダー規範への適応の一環としてのパッシング、つまり「男であること」を示すためのパッシングも含まれる。

また、Daniel（2018）の「受動/能動」の枠組みを参照すると、（１）「嘘をついたり」す

ることは能動的パッシング、(2)「言わない(言えない)」ことは受動的パッシングとして整理できる。これに対して(3)「コミュニティ」を「広げない」という語りは、対面的相互行為の場における「管理/操作」ではなく、その前の水準にあるような「管理/操作」のありかたであり、両者のいずれかに明確に位置付けられないようなものである。

また能動的パッシングだと理解できるようなパッシングのありかたであっても、語りのプロセスにおいてそれぞれのパッシングは一貫して戦略的と認識されているわけでもなく、そもそも自身にとってどういうものなのかということが明確に認識されていないような迷いや矛盾を含むような語りも同時に確認している。以下、先行研究の枠組みに依拠しながらそれぞれのパッシング整理し、パッシングの多様性を説明する。

そして、最後にパッシングに失敗する事例を示すことで、パッシングの成立が行為者によって制御できるような問題ではないことを示す。

6-1-1 「嘘をついたり」することによる管理

本項で確認するのは、対面的相互行為の場を通過するための「嘘をついたり」という語りに象徴されるような能動的なパッシングの形態である。3-1 ですでに確認したとおり、Daniel (2018) は「能動的なパッシング」とは対照的に積極的に「期待」や「ステレオタイプ」を用いて人物像を構築し、自己提示するような能動的なパッシングを「戦略」と呼んでいる。

インタビューの場で実際に語られたのは「どのような種類の『嘘』をつくことで能動的にその場が乗り越えられているのか」という「戦略」のバリエーションだけではなく、嘘をつくことでどのような「人物像」を打ち立てることが目指されているのか、嘘をつくことによる「管理/操作」とはどのようなパッシングであるかであるかが語られた。分析においても語られたパッシングを成立させるプロセスに焦点を当てている。

最初に確認するのは、クジラさんの家族との相互行為、「ノンケ²⁸」との相互行為の場における能動的なパッシングである。

クジラさんの語り (一回目のインタビュー)

私：18歳からもうずっと一人暮らしで？

クジラさん：もう、一人暮らしですね。もう家族とちょっと住めないなって思いました。

私：なんでですか？家族とは住めない？

クジラさん：はい、何ですかね。やっぱり、その家族って世界で一番、なんだろうな。

自分のことをよく知ってる人だし、本来は何でも相談できる相手のはずなんですけど、その、自分の性的指向もあって、まあたまに、なんだろう。その、**嘘をついたり**ちゃったりとか、**物事を隠したりとかする**っていう、なんだろうな。親には素直で

²⁸ 「異性愛者」を意味するスラング

いたいのになんかそうはできないいたたまれなさとか閉鎖的な感じとかちょっと辛くなっちゃって。もう絶対親と住みたくないんですね。自分も疲れるし、なんだろうな。なんかもう親と一緒にいてもリラックスできない。それも地元の友達、地元の親友、高校の親友、部活の友達、高校の先生も全員そう。ずっとリラックスできない[.....]

私：ご友人で、そのゲイやクィアの方たちもおそらくいらっしゃるじゃないですか。その彼らと会うときとそうじゃない人たち、例えば会社の同僚と会うときはスタンスやキャラクターは変わってきますか？

クジラさん：全然違うと思いますよ、基本的に。

私：どういうふうに変わっていくとか？

クジラさん：どういうふうに変わるんですかね。う～ん、

私：どっちが、どっちがやりやすいとかはありますか？やりやすいとか過ごしやすいといいますか。

クジラさん：あーもうめちゃくちゃ難しい質問ですね。僕はどっちも過ごしやすい、それでいうと。なんかもう二重人格ですねよね、ほとんど。ほとんど二重人格だし、なんだろう、どっちもちょっと誇張して演じている部分がたぶんあるから、ゲイの人と会ってるときは[.....] まあ少し誇張して、そのホゲたりはしないけど、少し誇張してオネエ言葉を使うとかは、あの、なんだろうな。まあ、キャピキャピする、キャピキャピするってちよっと死語だけど。みたいなのはあるかもしれないし。一方でノンケとの(コミュニケーションの)方で言うと、こっちもまあどうなんですかね。こっちも、だから。常に、ちょいちょい嘘をついたりだとか、なんか多少男らしく、別に意識はしないですよ、自然とできるけど、「多少男らしくしないといけない」とかなんか、女性的话题が出た時に食いつかないといけない、とか、そういうなんだろう。そういうのをいちいち考えないといけないのが面倒くさいっちゃ面倒くさいけど、それも慣れれば別に普通。

クジラさんは親に対しては素直でいたいのにな「嘘をついちゃったりとか、物事を隠したり」したことで「いたたまれなさ」を感じ、「閉鎖的な感じ」がつかくなり、家族や地元の友人とは会いづらくなったことを語っている。家族や地元の友人との相互行為の場において、具体的にどのような「戦略」が取られているかは語られないが、「ノンケ」との会話の局面では、「多少男らしくする」ことや「女性的话题が出たときに食いつく」ことが「パッシング」の実践のあり方として語られる。そして、それらは「自然とできること」であり「異性愛者」としての振舞いがすでに身体化されていることが伺える。前者の「多少男らしくする」ことはジェンダー規範への適合作業であり、「女性的话题が出たときに食いつく」ことは、「異性愛者」として自己呈示するセクシュアリティ規範への適合作業である。

小手川（2023）は「男らしさ」を本質的なモノではなく、身体化された習慣として捉え

なおすことを試みており、ジェンダー規範の多層性に着目することで規範に対する対応や応答の仕方も規範の様態に応じて変化しうることを説明している。クジラさんの語りが示していることは規範の非参照的な反復²⁹によって「男性」の一側面である「男らしさ」がパフォーマティヴに生産される一例でもある。しかし、このようなパフォーマティヴな「男らしさ」の反復はゲイ/バイセクシュアル男性に固有なものではないだろう。

これらの適合作業についてクジラさんはインタビューのなかで、「二重人格」と説明したが、それぞれの「モード」をどのように使い分けているかを問うと、職場をはじめとした公的な場における相互行為は「ノンケモード」、ゲイの友人たちとの相互行為の場「そうではないモード」、それらとは異なる、一人の時の「自分モード」を説明した。これらの「モード」はそれぞれの場において共有される規範の様態に合わせた対応であることが示唆される。三部（2014）はゲイ/バイセクシュアル男性が「こっち」と名指すことでゲイ・コミュニティが出現する様を析出する議論（森山 2012）を援用しながら、議論を展開させて、性的少数者であることがスティグマ化されうる「場³⁰」を〈あっちの世界〉、性的少数者であることが直ちにスティグマ化されない「場」を〈こっちの世界〉と概念化している（三部 2014: 53）が、「ノンケモード」は〈あっちの世界〉に対応するための「モード」であり、「そうではないモード」は〈こっちの世界〉に対応する「モード」と理解できる。

そしてクジラさんは二回目のインタビューで、特に職場における対面的相互行為の場で、具体的なパッシングの様相として「こういう女の子が好き」とか「こういう子とデートして」という「女性が好きっていう話」をすることが語られたが、それらは「異常者」に見られないための諸実践であることが語られている。

²⁹ バトラーの「パフォーマティヴ」概念は「演劇的 (dramatic)」と「非参照的 (non-referential)」の二面で整理することが可能である (Butler 1988: 522)。後者の「非参照的」で示される意味は、パフォーマンスが参照するような「台本」となる本質や起源が存在しないこと、その意味でジェンダーのパフォーマンスが「事実確認的」ではないことを意味する (藤高 2017: 191)。実際にバトラー (1988) は、ジェンダーがパフォーマティヴな「行為」であることを説明しており、身体とは文化的規範によって受動的に台本を刻みつけられるわけでもなく “The body is not passively scripted with cultural codes”

(Butler 1988: 526)、身体化された自己が、本質的に身体を記号化する文化的慣習に先立って存在するわけでもない “But neither do embodied selves pre-exist the cultural conventions which essentially signify bodies” (Butler 1988: 526) という、その二重性を論じている。つまり、ジェンダーパフォーマティヴィティの論理において指し示されている「非参照的」であることは「事実確認的」な構築ではなく、構築に際しての起源はなく、その場における構築と「起源」の生産が同時的であることを示す。

³⁰ ここで説明する「場」とは大貫 (2014) が示す「社会空間」に近い概念として理解できる。大貫 (2014) は「社会空間」とは物理的な「場所 location」を指すものではなく、行為者の役割や行為の性質に基づいて設定された概念的な「領域 realm」を意味するものであると説明する (大貫 2014: 7)。

クジラさん（二回目のインタビュー）

私：職場の時にこういう風に見られたいみたいなのっていうのは、ご自身の中で意識してるものはありますか。それとも何も意識はしていない？

クジラさん：異常者じゃないように思われたいよね。基本的には。

私：なるほど。

クジラさん：うん。異常者っていうのは。ごめん。ここで言う異常者っていうのは、例えばサイコパスみたいなガチの異常者の話じゃなくて、「普通の男性だね。」くらいの温度感で見られたい。

私：なんか。その、普通の男性の温度感っていうのはどういうものですか。

クジラさん：まあ、女性が好きで、出世欲が、まあ、出世欲はちげえな。うん。女性が好きで...なんだろうな。ごめん、わかんねえな...その、出世とか仕事に支障がないようにしたいだけなの。ただ、本質的には。

私：自分が、なんでそうするかっていう。

クジラさん：そうそうそうそうそう、

私：異常者じゃないように見られることは。

クジラさん：そうそうそう。異常者で見られると仕事に支障が出るので、やはり。

私：はいはい。

クジラさん：うんとね。ごめん、わかんないけど、きっと出ると思う。

私：はい。

クジラさん：その、影でなんか言われたりとか。そういうところになんだろうな。そう、例えば、同性愛者とか、同性愛に賛同ができないアンチ同性愛の方からは、多分白い目でどうしても見られちゃう。

私：うん。

クジラさん：腫れ物だと、腫れもの。そうじゃなくても、やはりなんか変わった人というか、珍しいものとして、腫れ物として見られたりするの、仕事に支障が出たりとか。あとは、例えば、「クジラくんはどうせ結婚しないから...」とか言って、その昇格とか昇給とか転勤とかに影響されて、そういうの一切なくしたいっていうのが、本質的な普通に振る舞いたいたいっていうところの目的です。

私：はい。なんか、その、異常者じゃない人になるための実践みたいなものってどういうものがありますか。

クジラさん：実践。だから、自分のどこが「異常」かっていうと、本当に男性が性的対象、恋愛対象ってところだけだと思うから、そこ以外は多分普通の人間なので「女性が好き」っていう話、全然好きじゃないんだけど、「好き」って話をしたりとか、最近はこの子と、女の子とデートをしますみたいな、

小話をちょこちょこちよこつてちよつと挟むくらい。

「異常者」に見られないために職場でパスすることが語られているが、ここで語られた「異常者」が指し示す意味は「サイコパス」のような意味ではなく、「普通の男性」から外れる非・規範的な男性像のことを指しており、限定的な意味で用いられている。そして自分の「異常者」としての側面は「同性愛者であること」であり、「同性愛者」としての徴を隠すためのパッシングの様相が語られた。また、職場におけるパッシングの目的の一つには「仕事に支障が出」ないようにすることが挙げられている。実際に「異常者」でないことを示すために、どのようなことが行われているかと尋ねると、「女性が好きで」という側面のみが語られ、「異性愛（/者）」であること以外の「普通の男性」の要素は必ずしもクジラさんにとって明確なものとして認識されていないではないことが語られた。

次に参照したいのがブドウさんの「嘘をついたり」することでパッシングを成立させようとする語りである。

ブドウさんの語り（一回目のインタビュー）

私：家族に嘘をついたりすることもありますか。

ブドウさん：それはちょっと...なんか、あの子...なんか、なんだろうな...「あのこ...可愛い」みたいな、女の子の、なんだろうな。そんな明らかな話じゃないんですけど。普通は装ってるつもりです。そうは見せないように。

私：「普通を装う」って、なんかどういうことをやってます。

ブドウさん：うん。

私：バレない工夫とも言うかも

ブドウさん：...ちょっと...まあ、女優の話をしてみたり。俳優ですね、女の人の。この俳優の話を自分の中では多くしているつもり。家族との会話で。それが普通のつもりです。

ブドウさんは家族との相互行為の場において、普段から「女優の話」をすることで、予防的に「普通」を装っていることを話している。クジラさんと同様の傾向として、パスするために異性愛主義の軸において「普通の男性」像が呈示されることが示唆された。

次に引用するのは、ヒツジさんの語りである。ヒツジさんは自覚的な「戦略」を具体的な事例とともに説明した。

ヒツジさんの語り（二回目のインタビュー）

私：なんていうの。その、バレたくない場面で話すときはどういう風にかかわるの？

ヒツジさん：かわす。

私：かわす。なんか色々あるじゃない。そもそもそういう話、そういう話っていうのは、恋愛とかの話ね。持って行かせないようにキャラ作って最初から振る舞っておくとか。あとは、その答えないとか、嘘をつくとか、わかりやすくてね。もう最初に「興味ないです」って自分で言っとくとか。

ヒツジさん：それでいうと、そういう会話になったら、相手に自分が「ゲイです」って言えない状況であれば、その、自分の男の人との体験。「付き合った」とか「エッチした」とか、そういう話だったら、女性に置き換えて喋るから、

私：それは、実際に誰に対してやってる？

ヒツジさん：仕事の同僚。とか、お客さんとか。

私：なるほどね。そっか。それは結構うまくいく？

ヒツジさん：めっちゃうまくいく。

私：あ、ほんと？

ヒツジさん：ていうか、多分ね。じゃ、そういう（性愛に関する）話を振られた時に、変に喋らない方がバレる。まあバレるわけではないんだけど。

私：うん。

ヒツジさん：もう、なんか、そこに消極的な方が変かなと思って。うん。なんなら割とおおっぴろげに言っちゃうの。それを女性に置き換えた上で。

[.....]

ヒツジさん：でも、だから、（交際相手を同性であることを説明）しないからこそ、うん、弊害みたいになることはある。例えば、俺、タバコ吸うけど。

私：うん。

ヒツジさん：タバコ吸うのは、うん。元カレの影響だから、

私：うん。

ヒツジさん：っていう話をすると、「え、逆だね。」って言われるじゃん。「元カノ」って説明するから。そしたら「え〜、女の子で？」とか、なんか「逆だね」みたいな。「変」とまでは言われないけど。

私：うん。

ヒツジさん：そんなのあるんだ〜って言われるけど。それはもう別にそれとして喋る。そこでなんか相手が引っかかるのはわかるけど。

ヒツジさんからは職場において同性との関係や行為を異性に置き換えて話すことで、性愛に関する話題が上がる場面においてパッシングしていることを話す。その「戦略」は「めっちゃうまくいく」ものとして認識されており、主体的な「戦略」がその場面を通過可能にしていることが実感されていることが語られている。しかし、「変に喋らない方がバレる」

と語られており、積極的な自己呈示である「戦略」は意識的に行われている一方で、その場において「普通」であるために「強制」されているものでもある。「変に喋らない方がバレル」ことが予感されているから、「嘘をついたり」せざるをえないような状況に陥ることが示唆される。つまり「嘘をついたり」することは必ずしも個人の積極的な「選択」に還元できないようなものである。

また、性別を置き換えて話すことの弊害も併せて話された。例えば、ヒツジさんは「元カレ」の影響でたばこを吸い始めたエピソードを人に説明するときに、「え、逆だね。」と相手が「引っかかる」ことがあることを話している。「タバコを吸うこと」やそれを「教えること」が男性ジェンダーと結びつけられて理解されていることが想定されるが³¹、「男らしさ」や「女らしさ」の基準は、対面的相互行為の場における当該発話者に対してのみならず、すべての者に適用されるものであり、男性とのエピソードを女性に置き換えて話すことによって、話を聞いている側の認知に不整合を起こされ、「普通」ではないと捉えられる事例が複数重なれば、「疑惑」が生み出される可能性がある。このように、ジェンダーを置き換えて話すという「戦略」は必ずしもパッシングの成立を保証する「戦略」ではないだろう。

本項で確認してきたのは「嘘をついたり」することで対面的相互行為の場を通過するためのパッシングであった。この場で繰り出される「嘘」たちは主に「異性愛者」としての「普通の男性」に適合するためにつかれる「嘘」たちであり、パッシングにおいて「スティグマの徴」を隠すためだけではなく、より積極的に「普通の男性」像を呈示するパッシングの「戦略」としての側面も見られた。しかし、実際に語られている諸実践は基本的には異性愛主義の軸において「異常者」ではなく「普通」であることを目指すための諸実践であり、その態度は「女性が好き」であることに回収される傾向にあった。そして、それ以外の「普通の男性」の側面に関しては必ずしも高い解像度では語られず、曖昧な語りがみられた。また、それらの「戦略」は必ずしもパッシングの成功を保証せず、暴かれかねない危険性を持つことも同時に確認した。

6-1-2 「言わない（言えない）」ことによる管理

本項では「言わない（言えない）」という語りに象徴される、パッシング受動的に対面的相互行為の場を通過するパッシングを説明する。クジラさんは幼少期から「きれいなモノ」や「ビーズ」が好きであることを語った。

クジラさんの語り（第二回インタビュー）

私：なんかその、「ビーズ好き」みたいなことは言えました？親とかにも？

³¹ 日本における喫煙率は令和元年のデータに基づくと男性が 27.1%、女性が 7.6%と偏りがあり、喫煙のイメージがジェンダー化されている可能性はおおいに考えられる。厚生労働省, 2020, 「令和元年国民健康・栄養調査結果の概要について」(最終取得日 2025 年 1 月 14 日, <https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000722240.pdf>)

クジラさん：言っていました、言っていました。

私：なんかそれに対して違和感とか、「これを隠さなきゃいけないものだ」みたいなのは、そんなに？

クジラさん：そうですね。小学校に上がってからは、だから5、6歳の時は別に良かったけど、7歳、8歳になってからは、これ完全に「隠さないといけないやつだな」とは思いました。

私：あ、小学生になって初めて？

クジラさん：あ、そうそうそう、小学校だとやっぱり一年生とか二年生になるとみんなドッジボールとか、なんだろう、サッカーとかをやるじゃないですか。「好き」って言うし、「やる」って言うけど、僕サッカーもドッジも全然好きじゃなくて（笑）。好きなものになんか聞かれたら「光るもの」とか「きれいなもの」ってのがあったので。そこは、だから普通の男の子と違うな、違うんだなと思ったし。えっと、やっぱ20年前なので、それがおかしいっていうのは同年代の子、7歳くらいの子から「男が綺麗なものを好きだとおかしい」みたいなことをいう子もいたというか、「あ、これは隠さないといけないんだな」って感じでしたね。あ、あと、あれか、あと20年前っていうとアレなんですよ。やっぱその「オネエ」って言葉すらまだなくて、そういう人は「オカマ」っていうひとくくりのものだったんですよ。だから「オカマ、オカマ」ってなんかこう7歳くらいの時に、7歳くらいの子とかに言われて、言われたこともある、から、あれですね。まあクレヨンしんちゃんが悪いのかもしれないけど（笑）それは（笑）

私：そうですか（笑）

クジラさん：そうそう、あるから、この辺りから（「ビーズ」が好きであることを言うことを）やめた。まあ、今も好きだけどね。今もすごい好きなんだよね。石とか、その辺に飾ってあるんだけどさ。

私：そっか、そのなんか、じゃあ当時、その「オカマ」って言われて、手放しました？好きであることは手放さないけど？

クジラさん：好きであることは手放してないです。

私：けど、隠す？

クジラさん：隠してましたね。はい。親は知ってただろうけど。友達には見せない。自分の宝箱の中だけにいっぱいきれいな石入ってるみたいな状態。

[.....]

クジラさん：なんか好きなスポーツも、別にフィギュアスケートだけ好きなわけじゃないから、うん、陸上競技とか、陸上とか、バレーボールとかっていうのも、別に好きだから、そういう風に答えたりとかもしてたから。

私：それは別に、なんか、嘘ついてるというよりかは、なんか、持ってるカード

を使う...

クジラさん：嘘ついてるわけじゃないですね。なんか、なんていうの、あえて言わないだけ。

ここで説明されるクジラさんの幼少期におけるパッシングの経験とそのきっかけになった事例は「異性愛者」としてではなく、「男性」として相互行為の場をパスするための諸実践である。クジラさんは幼少期に「ビーズ」が好きなことを同級生に明かしたことで「オカマ」と名指されたこと³²をきっかけに、「ビーズ」や「おジャ魔女ドレミ」、「フィギュアスケート」など女性ジェンダーと結びつけられる趣味は隠すようになったことを語った。しかし、それらの趣味に関しては、「あえて言わない」だけであり、「嘘をつく」必要はなかったことを説明している。その代わりに女性ジェンダーとは結び付かないだろうとクジラさんが認識する趣味³³を答えることでその場は乗り越えられてきたことが話された。これは先行研究で指摘されるジェンダー規範への「適合」(Kanuha 1999)のための管理のあり方であるが、クジラさんのジェンダー規範への適合のプロセスは「オカマ」という明確な呼びかけを発端としていた。また、この「オカマ」という蔑称の固有性を「あと 20 年前っていうとアレなんですよね。やっぱその『オネエ』って言葉すらまだなくて、そういう人は『オカマ』っていうひとくくりのものだったんですよ」と、「オカマ」というカテゴライズや呼び方を 2005 年前後の日本社会という時代背景と併せて解釈されている。

次に提示するのは、イチゴさんとライオンさんのパッシングに関する語りである。

イチゴさんの語り（第一回インタビュー）

私：なるほど。なんか。でも、バレないようにしなきゃいけない部分あるじゃないですか。バレないようにするためにやってることってあります？意識してることとか。

イチゴさん：いや、でも、バレる要素がないから。

私：バレようがない？

イチゴさんさん：うん。自分から言わない限り。

[.....]

私：なんか飲み会とかで恋バナとかになることもあるじゃないですか。

イチゴさん：うん。

³² 伊野（2005）はゲイ男性に対するインタビューのなかで「オカマ」という蔑称について、それは「男性同性愛者」のことだけを指すわけではなく、呼びかけられる対象は「男性規範から外れた男性」（伊野 2005： 58）であり、「オカマ」という蔑称は同性愛に対する嫌悪の言葉であるだけでなく、女性的であることが蔑まれるという女性嫌悪をも内包していることを説明している。

³³ 少年漫画の「ワンピース」やゲームの「ポケモン」、「陸上競技」などがその例として挙げられた。

私：そういうのも、割とするっと乗り越えて...乗り越えられるというか。別に。
イチゴさん：うん。なんかうまく、その場の話は。うん。うまく。合わせたり、逃げたり、適当に話して。うん。
私：その、なんかうまく。合わせたり、適当に話すのは全然苦じゃない？
イチゴさん：苦じゃない。
私：そっか。じゃあ、別にバレないようにする上で大変なことは特にはない。
イチゴさん：うん。今のところは。うん。まあ（ゲイだと）思われてるかもしれないけど。それは、多分「恋人がいない」っていうことだったりとか、それこそ女性の話も積極的に自分からするわけじゃないから。うん。そういう面で（ゲイだと）思われてるかもしれないけど。
私：うん。
イチゴさん：だからと言って、じゃあ嘘をついてまで。うん。なんだろう、繕おうとは、やろうとは、めんどくさくて思わないって感じかな。
私：そっか。じゃあ別に繕わずに、割とニュートラルな、ナチュラルな状態でいるけど
イチゴさん：そうね、「やや繕ってるな」ぐらいかな。

ライオンさんの語り（第二回インタビュー）

私：バイセクシュアルであること...それは開示してますか？誰にも言ってない？
ライオンさん：言ってない。
私：じゃあ、完全に全員に対して隠しているという状態ですか？
ライオンさん：うん。
私：それは、なんで隠しているかみたいなことを聞いてもいいですか。難しいと思うけど。
ライオンさん：う〜ん...。
私：そもそも機会がないとか、言う必要がないとか。
ライオンさん：一つには言う必要がないっていうのは思ってるし、隠してる？隠してるのかな。隠してるっていう状況？うん...、なんだとは思うけど...多分...女の人も普通に好きだから隠してるっていう意識がないんだと思う。別に。
[.....]
私：コミュニティ、まあ二丁目に飲みに行ったりとかもないですよ...そもそも「パスする」という観念がないのかな。
ライオンさん：でも、隠すっていうのはあるよね。
私：それはあるか。
ライオンさん：隠すっていうか、言わないだけなんだけど。自分から言ってないだけだけど。

私：そうか...それはただ言わないという形で。積極的に「自分は異性愛者です」とアピールするわけでは、

ライオンさん：そうだね。いう必要がないかな。それを言ったことによって逆に変に思われたらいやだな。

イチゴさんとライオンさんの語りにみられる共通項はその場をパスする際に本人に「嘘をつく」という自覚がないことである。イチゴさんの場合、実際には「うまく、その場の話は。うん。うまく。合わせたり、逃げたり、適当に話して」いる場面や「やや繕っている」場面もあることが語られており、実際には嘘をつくことでその場をパスする可能性も示唆されているが、意識的に嘘をつくことでその場をパスしているという実感には至っていない。ライオンさんは、そもそも「隠している」という意識がないことを語りながらも、インタビューの後半では「言わない」という形で隠していることになっていることを自ら話している。ライオンさんはインタビューを受ける前までは「隠している」実感がなかった³⁴が、インタビューのなかで自己の振舞いや意識について問われ、対話とそれに伴う言語化の過程において、自己の行為が「パッシング」として意識化されることとなり、これまでの振舞いや態度が「隠している」ために行われていた、という認識に統合されていったことが示唆される。実際に、ライオンさん、イチゴさんの二人に対してインタビューの序盤においてパスするために「なにか意識的に行っていることはありますか？」と聞くと、「ない」ことが前提に話がすすめられた。両者の語りが生じるプロセスからわかることとして、両者にとってパッシングは、意識的になにかを行うこととして理解されているわけではなく、むしろ支配的な異性愛主義の認識枠組みが生み出す「誤認」のメカニズムの「利用」であり、それは「同一の社会的場面」で共有される規範を利用するという「戦略」的な側面を有するものでもある。また、前項ではヒツジさんの「変に喋らない方がバレる」という語りからパッシングのために、「嘘をついたり」という「戦略」が選択されることが話されたが、ライオンさんは反対に「それを言ったことによって逆に変に思われたらいやだな」と、積極的な「戦略」が有徴化の契機となりうることを予感していた。

一方で「言わない」ことだけでパスを成立させることの困難もイチゴさんの語りから示唆される。例えば、上記で引用している、イチゴさんの『『恋人がいない』っていうことだったりとか、それこそ女性の話も積極的に自分からするわけじゃないから。うん。そういう面で（ゲイだと）思われてるかもしれないけど』という語りにおいて示唆されていることは、当該個人が「ゲイ」であるかどうかを規定するのは常に他人であって、「言わない」という個人の「戦略」だけで制御できるものではないことに対する自覚的な態度である。

堀江（2008）は性的マイノリティが「クローゼット」のなかに留まることの不可能性を論

³⁴ 「パッシング」という用語を調査の前より知っている調査協力者はいなかったが、インタビューのはじめに、「性的指向を周囲に言わないこと」として、簡単にパッシングに関する説明をしている。

じているが、「クローゼットの内外を隔てる〈境界〉は、つねに〈異性愛主義〉という社会規範によって生み出される権力関係のなかで、ときに恣意的に維持されるものである。そのためクローゼットの内側にいるという自己認識と、周囲の認識のあいだにズレが生じることがある」（堀江 2008:106）ことを指摘している。「戦略」としてのパッシングは曝されることのない安全なクローゼットに留まるという目的を有するが、その境界はパッシングの行為者にとって自明なものではなく、第三者によって暴かれる危険性がつねに存在しており、そもそも安住できるクローゼットなどは用意されない。

受動的なパッシングが、個人の功利的な「戦略」に還元できないことを説明するために、以下で引用するのはクジラさんの職場におけるパッシングの経験に関する語りである。

クジラさんの語り（一回目のインタビュー）

私：家族の話を聞かせていただいたんですけど、職場で言わない理由とか。またもしくはその言わないことで... どのような抑圧的な状況を実感するのかとか。どのような不便があるのかみたいなことは？

くじら：あーそうですね。不便は、でもやっぱりありますね。職場で言わない理由、まず前者の方からお答えすると職場で言わない理由はやっぱりどっか普通と違ってことはやっぱりいつかどこかで不利益を被る可能性があるからですよ。やっぱりそのみんながみんなそのゲイに対してその理解があるわけじゃないですし。

私：うん。

クジラさん：そうですね。そこですね。そこでまあ人間関係が悪くなるとか、あの、だと仕事に影響が出てしまうので、そこは周りにはあんまり言いたくないです。で、後者がなんだっけ。あ、抑圧を感じているかって話か。抑圧されてるかって話で言うと、結論、かなりされています。抑圧かなりされていて。やっぱりえっと僕の会社って外資系の会社でその LGBT に寛容みたいな空気はあるんだけど、やっぱり第一声くるのって「彼女いるの？」みたいな。やっぱなんだろう。「異性愛者だ」というアンコンシャスバイアスを通した上で結構、話しかけられるとか、関わりをどうしても最初持たれてしまうので。そのそれをなんかこうわざわざ覆してゲイですっていう必要もないし。どんだけ LGBT に寛容でも、あの、なんだろうな。いや、そういうバイアスは、みんな持ってるものなので。うん言えない。うまく言えない。

クジラさんは、職場において、「彼女いるの？」と聞かれることなどを根拠に、職場の周りの人達が「（人は皆）異性愛者だ」という「アンコンシャスバイアス」を持っているだろうと予期している。そして職場における日常的な対話の場において相手から「異性愛者だ」ということを前提とした会話を持ちかけられたとき「ゲイ」であることは「言わない」ことではなく「うまく言えない」経験として語られている。クジラさんの主観的な側

面を考慮したとき、クジラさんによる職場でのパッシングは支配的な規範の「利用」に還元できるような問題なのだろうか。Daniel (2018) は個人が意図せずに誤認されるような受動的なパッシングを「戦略 (strategy)」としては位置付けていないが、その「誤認」を修正しないという意味ではこの場におけるパスもまたクジラさんが職場で生き延びるための一つの「戦略」として解釈できるかもしれない。しかし、「言えない」ことはパッシングが「戦略」とは呼び難いようなある種の抑圧的な経験であることを示すとも言えるだろう。「(人は皆) 異性愛者だ」ということを前提にする会話は同性愛者に対するマイクロアグレッションだとも説明されているが³⁵、多くの同性愛者が遭遇しうる場面である。そしてこれはクジラさんにとって「抑圧」的な経験であるとして説明される。ヤング (1990=2020) は「抑圧 (oppression)」を五つの形態に整理して、その一つに「文化帝国主義」を挙げている。「文化帝国主義」とは支配的集団の経験や文化が普遍化され、それを規範として確立し、しばしば無意識的に作動されるものである。そして「文化的支配を受けた者は、ステレオタイプによって選別され、それと同時に不可視化されている」(Young 1990=2020: 84) と説明される。当該発話者に「悪意」があるか否かは関係なく、アンコンシャスバイアスに基づく日常的な会話が「抑圧」として働くことで、「LGBTに寛容みtainな空気」のある「LGBT」への理解が表明されている組織内においても対面的相互行為の場において「異性愛者」として通過せざるをえない、ということが起きている。「異性愛者」であると誤認される状況を修正しないことは、規範的枠組みの中での生存の手段ともなり得るが、それは同時に個人の自己呈示を制約する力として作用する。

本項で論じてきたことは、受動的なパッシングには「言わない」という語りに象徴されるような、その場を「やり過ごそうとする」ための「戦略」としての側面があるのと同時に、必ずしも意識的には行われていない側面、行為者の「戦略」だけではパスしきれない場面が想定されていること、「言えない」という語りに象徴される受動的なパッシングは必ずしも行為者の主体的な選択としての「戦略」に還元できるものではなく、むしろ強制された制約の結果である可能性が示された。いずれにせよ、受動的パッシングの一側面には「(人は皆) 異性愛者だ」という規範的異性愛の認識枠組みの影響があることは示唆される。

6-1-3 対面的相互行為の場における——「コミュニティ」を選ぶという管理

次に確認するのが、「コミュニティ」を「変に広げない」という語りに現出するようなパッシングである。これまで確認してきたパッシングの様態は主に、対面的相互行為の場

³⁵ マイクロアグレッションという概念の提唱者であるデラルド・ウィン・スー

(2010=2020) は性的指向に関するマイクロアグレッションを意識的で熟慮のうえなされるものから、無意識的に意図せずなされるものまでであるとし、7つ挙げている。そしてその7つ目に「異性愛を正常とする文化/行動の是非」(Sue 2010=2020: 316)を示しており、意図せずしてLGBTに押し付けられる「男性には彼女がいるのか」と当たり前のように聞くことを異性愛規範の文化と行動の例として示している。(Sue 2010=2020: 317)

においていかに発話を制御するかということに主眼が置かれていたが、本項で説明するのは、そのような水準にはないパッシングの様態である。

ブドウさんはこれまで確認してきた通り、「言わない」ことや「嘘をついたり」という「戦略」を取ることも語ったが、中学時代の学校における相互行為の場において「好きな異性のタイプ」を聞かれたときにどのように答えていたかと尋ねると、「適当な勢い」で話されていたことが語られ、パスするために「何を/どのように語るか」ではなく「誰に対して語るか」ということに意識が向けられる場面もあることが示唆された。

ブドウさんの語り（一回目のインタビュー）

私：なんか...なんかその、中学生の時とかに好きなタイプとか聞かれたらどう答えてました？

ブドウさん：いや、なんかその時に、なんか適当な勢いで言ってたと思います。うん、なんか割と、多分...それを聞かれて答えられない状況になるのが嫌だったんで、あえて、コミュニティとかは、小学校から...やっぱ小学校から大多数の人がみんな同じ中学校に行くんですけど、小学校のときから気心知れてるコミュニティにずっといましたね。それはもう卒業まで。そこにいれば仮にその話になってもうまいこと乗り越えられるし。ただ、なんかその中学校で出会った自分のまだあんまりよくわかってないグループとかにいたりすると、自分が窮地に陥りかねないので...と今思う。

私：じゃあコミュニティを選んで...

ブドウさん：変に広げなかったですね。

私：そのうまいこと乗り越えられるっていうのは具体的にどういうことですか。

ブドウさん：でもなんか普通に...「なんかそういうのいいわ」みたいなことができる。あ、

私：じゃあ、嘘をつくみたいになっていうよりかは、割とぼかして？

ブドウさん：なんか（嘘を）ついてたと思う時もあると思うんですけど。ぼかしてたかな。適当に。

ブドウさんは「聞かれて答えられない状況」になるのが嫌だったため、コミュニティを広げないことで「窮地に陥る」状況を回避していたことを話した。信頼のおけるコミュニティに属することで「うまいこと乗り越えられる」環境を選ぶという意味では、能動的な管理のありかたとして解釈することも可能だが、対面的相互行為の場における「管理/操作」を最低限にしている点やコミュニティを「変に広げない」という語りから示唆されるように選べるコミュニティが制約されているという意味では受動的な管理の在り方として理解することも可能である。「コミュニティ」を選ぶことでブドウさんは、自分の性的指向に関することが露呈しそうな話題が出されたときに「そういうのいいから」と語ること

を拒絶することができるようになると話すが、パッシングとは必ずしも対面的相互行為の場における個人の発話を制御するような「戦略」に限るような問題ではなく、そもそも当該個人が可傷的になりうるコミュニティを避けるという水準でも働くような「管理/操作」の諸実践でもあり、対面的相互行為の場を「能動/受動」的に回避するか否かという視点はパッシングの部分的な側面であることが理解できる。

6-1-4 パッシングの失敗事例

これまでは対面的相互行為の場をパスするための行為者の「管理/操作」の様相、もしくは、「異性愛者」として「誤認」する社会規範の存在ゆえにパッシングできていた（もしくはさせられていた）事例、もしくはそもそも可傷的になりえない環境を選ぶようなパッシングのありかたを示してきた。しかし、すでに提示した語りのなかでも示唆されていたとおり、パッシングとはつねに「成功」するようなものではない。以下に引用するのはブドウさんのパッシングに「失敗」したときの事例に関する語りである。

ブドウさんの語り（一回目のインタビュー）

私：割と嘘つくの得意な方ですか？

ブドウさん：いや、全然得意じゃないです。

私：あ、そうなんですか。

ブドウさん：下手くそですね。

私：でも、そういう（パスする）時はつける？

ブドウさん：バレる人にはバレんじゃないかなとか思ってますね。自分では下手と思ってるので。

私：なるほど。バレたことがありますか？

ブドウさん：1人だけバレたことがあります。

私：それは、どういった方に、どういったシチュエーションで？

ブドウさん：部活の先輩に、オフの日に、その、部活で夏の間は泊まり込みなんですけど。

私：部活、何やってたんですか

ブドウさん：ライフセービングをやってまして。

私：大学ですか？

ブドウさん：大学の時です。で、1個上の先輩がいるんですけど、すごいよく周りが見える人で、で、なんか2人乗りのケーブルカーみたいなのがあって、なんかもうむき出しの。「怖いね〜」なんて言って、二人一組でやるんですけど。で、シフト制なんで。オフが被った人と一緒に遊びに行くんですけど。先輩と2人きりになった時に「ホモでしょ」って急に言われたことがあります。

私：お〜。

ブドウさん：で、「なんで?」「なんでですか?」って聞くんですけど、目線って言うてましたね。一番は。もちろん会話の時の挙動不審さとかもあるけど、やっぱり目線が...って。

私：目線ってどういうことですか。

ブドウさん：だから男は見てるけど、女は見てないってこと。

ブドウさんのパッシングの失敗に関するエピソードは、「言わない」ことや「嘘をついたり」すること、「コミュニティ」を選ぶことなどの行為者による主体的な実践だけでは制御できない場面を説明しており、パッシングが常に失敗する可能性を孕んでいる実践であることを示唆している。ブドウさんの「先輩」は「目線」や「会話の時の挙動不審さ」を根拠にブドウさんに対して、「ホモでしょ」と聞いた。ブドウさんの「パッシングの失敗」事例が示すことは、社会的場面のパスのためには「目線」や「振舞い」にも気を配らないといけない実践であり、なおかつ「成功/失敗」に関する評価は当該行為者によって必ずしも管理可能なものではなく、パスが成功しているかどうかを評価するのはその場における他者であるということだ。またその評価軸とはパッシングを行うゲイ/バイセクシュアル男性にとって明確なものではなく、想像上の規範に基づいてしか「戦略」をとることはできないといふところにパッシングの限界はある。パッシングとは、想像上の規範の上演であり、それは常に暴かれうるリスクを伴うものだ。

ゴッフマン（1963=2001）のパッシングに関する記述がその「戦略」的な側面に偏って分析されていることはすでに指摘したが、しかし、ゴッフマン（1963=2001）は規範を維持しようとする「意志」だけでは不十分であることを説明しており、「多くの場合に個人は、当面問題とされている基準をどの水準で維持しえるかに関しては、それを直接統制/支配する力はまったく持っていないからである。それは個人が置かれている〔客観的〕条件の問題であって、彼の意志の問題ではないのだ。」（ゴッフマン 1963=2001: 215-216）と説明している。

パッシングの「成功/失敗」を決定する「〔客観的〕条件」は常に行為者にとって不明瞭であり、いかに「統制/支配」しようとしても不可能なものである。しかし、この「パッシングの失敗」とは当事者にとってどのような事態を招くような問題なのだろうか。

二回目のインタビューにおいて「失敗」した以降の話を聞いた。

ブドウさんのインタビュー（二回目）

私：なるほどね。そこのさ、経緯をさ、もう1回聞いてもいい。

ブドウさん：経緯ね。そうだね。[.....]（「ホモでしょ?」と指摘したのは、）その人、その年のチームのキャプテンだったの。部長だったの。

私：それは、その学校の部長じゃなくて、海単位の部長ってこと?

ブドウさん：そう、そのチーフっていう、1番偉い人で、学生統括の立場にあっ

た人で。そういう、やっぱ、立場上もそうだし、その人の、こう、性格的にも、こう、いろんな人よく見てるといとか、こう、俯瞰してるような人だったのは印象として覚えてる。

私：ちなみに男性だよね？

ブドウさん：うん。で、それで、突然言われた。「お前、ホモでしょ。」「男好きでしょ」って。

私：そうか。

ブドウさん：「なんでですか？」みたいな。最初とぼけてたけど。もう「もう俺にわかる」みたいな感じで。

私：うん。

ブドウさん：目線がめっちゃ男見てるし。その当時、ちょっと好きだった先輩がいたんだけど。

私：うん。

ブドウさん：「その人のこと好きだったでしょ」って、俺が多分その先輩にちょっとメロついてて。うん。なんか、その、メロ付き具合で多分バレた。その人以外にバレなかったから、一般的には騙せてたと思ってるんだけど。その人にはバレてた。

私：その後の話って前回もちょっと聞いたと思うんだけど、バラされたわけではないよね？

ブドウさん：なんか、「言いなよ」ってずっと言われてたけど。ずっと。で、なんかちょっと、なんか危なっかしい話めっちゃされてたけど。

私：危なっかしい発言されてた話、ちょっと聞きたい。それはどういう。

ブドウさん：例えば。うん。なんだろう。飲み会とかで風俗とか、女の子関連の話になった時に、「いや、こいつはあれだから。」とか。それだけ。バレてる可能性、あると思うんだけど。

私：うんうん。

ブドウさん：まあ、結局バレてたとしても、それ以外、その人以外からは言われてないから、自分としてはアウティングとしては受け止めてない。

私：うんうんうん。

ブドウさん：ぐらいの、本当にギリギリのライン。

ブドウさんは自身の性的指向が「先輩」に露呈したあとに、明確にアウティング³⁶されたわけではない、と語るが、パッシングが「失敗」してからのコミュニティにおける相互行為は「本当にギリギリのライン」であったことが話された。部活内におけるホモソーシャル的な会話において「いや、こいつはあれだから」と、「普通」ではない可能性が仄めかされる

³⁶ 本人の同意を得ることなく性的指向に関する秘密を暴露すること。

ような機会に遭い、明確に「ホモでしょ」と本人に対して問いかけたのが一人の「先輩」だっただけであり、それ以降、様々な相互行為を通じて、他の部員にも「同性愛（/者）」であることが伝わっている可能性もブドウさんには予感されている。この事例はまさにパッシングとは一度、その「秘密」が露呈してしまうと、その時点から「修正」することが難しい、つまり一つの場においてパスするためには、つねに「成功」が求められるものであり、パッシングは恒常的な「成功」が成立の条件になっているということを示唆している。パッシングに一度「失敗」すると、その場においてパッシングしている当事者は常に「秘密」が暴かれかねないという可傷的な現実直面する。

6-1-5 まとめ

これまで確認してきたことは、対面的相互行為の場をパスするためには主に「異性愛者」としてパスすることが重要だと認識されており、「嘘をついたり」、「言わない（言えない）」という実践のあり方があったと同時に、対面的相互行為の場における自己呈示のあり方の問題だけでなく、そもそも「コミュニティ」を「広げない」という水準にあるようなそれぞれの対応は、当該状況に合わせてその場で選択される、もしくは「させられる」ものであって、必ずしも当該行為者にとって意識的に行われるとは限らないことが確認された。そして最終的にパッシングの「成功/失敗」を決定するのは、本人による努力だけでは不十分な場合があり、「失敗」に開かれていること、そして一度「失敗」することは再度の「修正」を困難にすることを示してきた。また、その場で共有される規範や呼びかけに応じて応答のあり方は変わるものであり、具体的にパッシングとは「～を実践すること」として固定的に規定することが難しいこともわかった。そしてパッシングの行為者の語りに基づくと、明確な規範として現れたのはあくまで異性愛規範であったことも確認してきた通りである。

また今回の分析においては、主に行行為者の「能動/受動」の諸実践で整理しながら、対面的相互行為の場における実践に限らないような水準にある実践を呈示し、最後にパッシングの成立においては行為者の制御できない問題であることを示してきたが、それ以外にも「時代」や「地域」という特性がパッシングのあり方に影響することも示唆された。

以下に引用するのはそれを示すライオンさんとクジラさんの語りである。

ライオンさんの語り（二回目のインタビュー）

ライオンさん：なんか、その...

私：まし...ごめんなさい、どうぞ。

ライオンさん：なんか。でも、わかんない。今だったら言うのかもね。わかんない。こういうのって時代じゃん。やっぱり。どんどん、どんどんさ、そういうのが広がっていつているから、今は、うん、自分たち(が学生)の時は別に、そんなに、まだまだじゃないかな。

私：それは、おいづつぐらいの時の話ですか。

ライオンさん:だから、大学生とか、別に、うん、なんか急激に...なんか認められてるっていうか、そういうのが、こう、メディアとかでもバーって(LGBTQ が)出てきた感じが、この数年間って感じがする。うん。ガーって。だから、すごくみんなオープンに言う人も出てきてるだろうし、まあ全然言えない人もいっぱいいると思うけど。うん。またちょっと違うのかもね。今、大学生とかだったら。うんうん。別に男の人も好きだけどね？とかって言うのかも。うん。

私:うんうん。

ライオンさんは自分がパッシングをしている理由についてその時代性を挙げている。そして、「今」であつたら自分がカミングアウトをしている可能性も予想できるが、自分の学生時代であつた 2010 年前後においてはまだ言えるような環境でなかったことを語った。

次に引用するのは時代だけではなく地理的な要因、つまり「都会/地方」という枠組みにおいて、「地方」で共有され、経験されているジェンダー規範が異なることを示唆するクジラさんの語りである。

クジラさんの語り（二回目のインタビュー）

クジラさん： 今もスケートは好きだけど、浜崎あゆみは好きじゃなくなったな。別に。今も女性的な好きなもの。わかんないよね、今。今はもう時代が違うからさ。ジェンダーレスというか、性別の境目って近年なくなってきているから。なんか、今そういうのが身の回りにあるのかちょっとわかんないな。他の人から見たらあるかもしれない。

私：ジェンダーレス的な価値が許容される価値感が 広まってきたとか、自分の中にそれを実感したのはいつ頃かとかわかりますか？そんなにここでパツンってわけではないと思うんですけど。

クジラさん： いや、ここでパツンはないよね。ここでパツンはないけど。どうなんだろうな。でも、時代の問題だけじゃなくて、多分土地...土地的な話もある気がする。

私： あー。

クジラさん： それって大学生になってからなんだろう。東京に上京してから、そういうなんだろうな。例えばスキンケアとか。脱毛とかさ、なんか、日焼け止め塗るとか、日傘指すとかでもいいんだけど、うん、なんかそれって一般的には女性がやることだよね、みたいなことも割と東京では普通だった気がする。18歳の当時からね。

私： うん。

クジラさん： じゃ、そこからさらに時が経ち、ちょっと、いつからかとかはごめんわかんないけど、りゅうちえるだのマツコデラックスだの、k-pop アイドルとかが出てきて、その、あとはなんだろうな。世間的な風潮、その LGBT を

認めようとかの風潮も後押しして、なんかまあ境目あんまなくなってきたよね。ごめん、ちょっとここうまく喋れてねえな。こんな感じ。

すでに引用したとおり、クジラさんは「ビーズが好き」であることに紐づけられて「オカマ」と呼びかけられて以来、自身の「女性的」な趣味を隠すようになったことを話した。その「女性的」な趣味の一貫として「フィギュアスケート」や歌手の「浜崎あゆみ」の存在を挙げ、大学時代はその趣味を「言わない」ことでパスしていたことを語ったが、現在においても隠している「女性的」な趣味はあるか、と尋ねると上記のように語った。

現在においてはジェンダーを固定的で本質的なものとして捉えないような「ジェンダーレス」の価値観が広がっていることと同時に、「土地」によって、その価値観が異なることを経験していることを語る。同時代において男性が「スキンケア」や「脱毛」、「日焼け止め塗る」などの、容姿に気を遣うような価値観は、クジラさんが幼少期から高校時代までを過ごした「地元」にはなかったが、「東京」に上京してからそれは「普通」なものと経験された。

しかしこれらの語りもまた、パッシングの成立は「場」において共有される規範に対する応答であることを示唆する。時代や土地によって共有される価値観は異なるはずであり、本稿においてはあくまで調査協力者の経験に基づいて推論することしかできないため、その詳細な影響に関しては論じることができていないが当事者の生きている「時代」や「土地」がパッシングの経験に影響を与えることは確認できた。

6-2 ゲイ/バイセクシュアル男性の規範への態度

前節において対面的相互行為の場をパスするためのパッシング実践には場面や状況に規定されて生じる複数の実践の様相があり、パッシングを「能動/受動」の類型化に対応させる形で整理してきたが、パッシングとは規範への応答であり、「～を実践すること（/しないこと）」として固定的にパッシングの諸実践を規定することの困難さを確認してきた。

本節においては具体的にどのような事象やモノが「普通」として、もしくは「普通」ではないものとして位置づけられて、語りの中にあらわれるのかを確認する。ガーフィンケル（1967=2004）が示した「普通」であることを第一義的に目的とするパッシングにおいて、対面的相互行為の場を「やりすごす」ように通過するだけではパスしきることの出来ないパッシングの側面とはどのようなものなのだろうか。

語りの分析に入るまえに確認したいのが、語られる「普通」の位置づけである。前節において「嘘をついたり」するために動員される「普通の男性」像が語られ、それが第一義的に「異性愛者」を示していることを確認してきた。ゴッフマンのスティグマ論に依拠すれば、「普通」の人とは第一義的に無徴化された人々である。『スティグマの社会学』（1963=2001）において「常人=the normals」は実体概念ではなく操作概念であることが前提にされている。つまりは本質的に「常人」が「いること」を想定することは難しく、「常人」であるか

否かはつねに関係のなかで決定されることである。本調査では私がゲイ/バイセクシュアル男性のアイデンティティ形成の過程やパッシングの問題に関心があることを調査協力者に明かした状態インタビューがなされた。そのとき「普通」と名指されているのは、文脈に依拠すると、ほとんどの場合において「異性愛（者）」を示すことが推察される。すなわち、「普通」を目指す実践とは当事者の「同性愛者」としての徴を隠すことを含んだ「異性愛者」を志向する実践として理解できるが、一方で「普通」が指す意味はそれだけに留まらない可能性にも留意されたい。

例えば、ゴッフマン（1963=2001）は「肉体の端正さ」のような誰も到達できない標準としての「基準（norms）」が存在することを示している。事例として挙げられているのが、アメリカにおける男性の一つの「型」として「若くて、既婚の、白人で、都会に住み、北部出身で、大学教育を受けた、性的に正常で、プロテスタントの、子どもがいて、ちゃんとした職につき、きれいな肌をし、中肉中背、何かスポーツで一ついい記録を出している男」（Goffman 1963=2001: 216）という共通価値を示しながら、そのとき「基準」は「理想」という形をとっており「これらの基準のどれにも達していない男性は誰によらず、少なくともこのことを考えている間だけは、自己自身を取るに足らぬ、不完全で、劣等なものとみなす傾向がある」（Goffman 1963=2001: 216）と説明される。すでに 6-1 で確認してきた通り、「普通の男性」は「異性愛者」と密接に結びつく形で説明されたが、「普通」という「基準（norms）」は達成できない理想³⁷の「男性」としての一つの「型」として語りにおいて現れる可能性があることに留意しながら、この先の分析を進めたい。

6-2-1 〈理想の息子〉としてパスすること：家族との相互行為の場

調査協力者との対話のなかでは様々に自明とされる規範的な態度が示された。それは多くの場合「普通」という言葉で指し示され、もしくは「普通」と対置するような形で語りにあらわれたが、最も顕著に見られた認識は異性間の婚姻を自明とするものであった。

以下に引用するのはライオンさんの「結婚観」に関する語りである。非常に迷いながら言葉が選ばれて、一通り語った後に「わからないけど」と語ったことを疑うような場面もありながら、整理できずに言葉に起こされているのはライオンさんの「（異性と）結婚しないといけない」という一つの考えである。

³⁷ 「ハーフ」表象における抑圧的なレイシズムとルッキズムに関して考察を行うケイン樹里安（2021）はスティグマは無徴である「普通」の人々と、その正常性から逸脱した劣位の関係にある人びととの関係においてのみ生起するわけではなく、「社会に埋め込まれた、誰も到達しえないような理想的な「共通価値」（Goffman 1963=2001:217）から疎外されているのであれば無徴な常人すらも「恥ずべき差異」（Goffman 1963=2001: 221）として感受しうる」（ケイン樹里安 2021: 32）と論じている。つまり同性愛的欲望を持つシス男性のパッシングは必ずしも自身の「同性愛（者）」の徴を隠すだけでなく、到達不可能な理想とする主体からの疎外によって様々な徴が隠されている実践である可能性がある。

ライオンさんの語り（二回目のインタビュー）

私：なんか、家族からの...結婚してほしいみたいなプレッシャーを感じることはありますか。

ライオンさん：(両親は) あんまり (結婚について) 言わないから。言ってこないから。元々ね。好きに生きたらいいって言うタイプだから。うん。だから、そこに対して、毎回毎回、こう、「結婚！結婚！結婚！」とは言ってこないんだけど。うん、親のことを考えれば、結婚した方がいいんだろうなとは思うね。

私：うーん。うん。それはなんか。

ライオンさん：でも、**親は多分、別になんでもいいと思ってるよ。**

私：うん。

ライオンさん：男の人が好きならそれでもいいと思うタイプの人。

私：そうか。じゃあなんか。そうか。親のこと考えたら、結婚した方がいいっていうのは、親孝行として孫を見せたいみたいなことですか？

ライオンさん：いや、別に孫とかではなく、結婚している状態になって、ま、パートナーがいてほしい、いた方がいいっていう。

私：両親がパートナーがいた方がいいって思ってるんじゃないかってことですよね？

ライオンさん：とは思ってると思う。それはずっとね。うん。独り身でいるよりかは。

私：それをなんか実感したエピソードとかありますか？...両親からの...特にそういうわけではないけど、なんとなく？

ライオンさん：うん、それはなんとなくだね。

私：そのパートナーっていうのは、別に異性じゃなくてもいた方がいいっていうことですか。

ライオンさん：親からの視線は...いや、異性の方がいいと思うよ。いいと思ってると思う。

私：親は。それはそうか。

ライオンさん：正直、その男の人のみ（に性的惹かれを感じるタイプ）の人。うーん、でもそうか。人それぞれだもんな。関係ないわ。

私：できたら、続きを喋ってみてください。

ライオンさん：他の人はどうかわかんないけど、その（男女）両方とも好き（になる可能性のあるよう）な人って。うん。なんか、踏ん切りがつかないから。うん。なんか生きるの大変かもね。生きるのっていうか。

私：踏ん切りがつかない？

ライオンさん：うん。どっちにもよらずじゃん。**両方好きって、どういう状況なんだろうね？**

私：う～ん。踏ん切りがつかないっていうのは、その男性を好きであるっていう状態でありながら、女性も好きになるし、ということですか？

ライオンさん：そういうことじゃないかもしれないな。

私：どうということですか？踏ん切りがつかないって。

ライオンさん：他のどっちにもよらずの状況だから。じゃ、なんか後悔するんじゃないかみたい。後悔？うーんこう、なんていうのかな。

私：男性を選んでも、女性を選んでも、後悔するんじゃないかっていうこと。

ライオンさん：結婚したところで、男の人になんか未練というか。

私：うん。

ライオンさん：それは良くないんだけど。

私：いや...まあ。

ライオンさん：完全にこう振り切ってる状況の方が...なんか考え方が定まって...こう生きていけられるような気がするって勝手に思っちゃってるけど。まあ皆それぞれに悩みあるけどね。

私：完全に振り切るってのはどういうことですか。

ライオンさん：完全にストレート。ゲイとか。カテゴリーで言うとな。うんうん。

私：なるほど。なんか今自分がじゃあどこのカテゴリーにいるかはわからないっていうのも含めて？

ライオンさん：あんまりなんか、さっきも言ったけど、そういうのをずっと考えてはこなかったから。うん。でも逆にそれに当てはめようともあんまり別に思っていないし。って感じ。

私：なんかそれによって、でもちょっと生きづらいかもな、みたいな話は、そのカテゴリーに当てはまらないからにつながることですか？

ライオンさん：うーん、最近、それはよく感じるね。生きづらさは。

私：それって。生きづらさってなんですか？

ライオンさん：生きづらさっていうか、なんていうの。もうね、年齢もそろそろだから、そろそろっていう言い方変か。結婚とかさ。

私：そっか

ライオンさん：子供とかさ。うん、普通に周りにはもう結婚しててさ、子供もいたりするわけじゃない。うん。もう別に何にも考えないでずっと1人でもいいや。だったら別に遊びたい放題遊べるかもしれないけど、それでもいいやっていう風には思っていないし。その、1人でずっと、うん。ね、いいよとも思っていないし。

私：うん。

ライオンさん：で、それを考えると、なんか、「生きづらさ」っていう言葉はおかしいんだけど、なんか決めないとな、みたいな。

私：決める。

ライオンさん：うん。ちゃんとそのへんを決めて、次の行動に移さないと、みたいなのは、思うね。

[.....]

私：決めないといけないことがあるっていう、そのなかの1つに結婚も。結婚も含まれてるって。

ライオンさん：うんうん。うんうん、うん。

私：それは、結婚するっていうだけじゃなくて、結婚しないっていうことも含まれてますか。それとも、結婚するっていうことを前提にして？

ライオンさん：しないっていうのは、あんまりないかもしれない。うん。結婚する。

私：そうすると、じゃあ誰？誰と結婚するかみたいなのを決めないといけないと、なってるって？

ライオンさん：とか？うん...そうだね。

私：そっか、そういうことは初めて聞きました。じゃあ、そうか...それは結構意外というか、今。そっか、誰と、結婚するか決めないといけないっていうのがあるんですね。それは、なんで、です...？なんでですか？というか、

ライオンさん：年齢とか。

私：それは「これぐらいの年齢だったらみんな結婚してるから、自分も結婚しないとな」みたいなことですか？

ライオンさん：うん。結婚においては、ちょっとやっぱそれを思っちゃうね。うん。それ以外のことはあんまそんな思わないんだけど。別に年齢とか気にしない人なんだけど。

私：なるほどな。

ライオンさん：わかんないけどね。

私：それは、その、両親のことを考えたら、ということも含まれますか？

ライオンさん：親が1番でかいね。

私：1番でかい。

ライオンさん：うん。それを考えるのは...仮に親がいない世界だったら。仮にね。わかんないけど。結婚なんて考えてないかもしれない。

私：でも、それは別になんか直接言われたってわけではないですもんね。

ライオンさん：それは全然違う。

私：自分の中で思ってるってことですよ。

ライオンさん：うん、妹は結婚してるんだけど。で、子供がなんか作れない状況にあって。男の方に原因があんのかな。じゃあ、なんだ...俺か。ってなるわけじゃん。いや、無理やりなんか作るとか、そういうことじゃないよ。ただ自分も子供好きだからさ。

私：なるほど。

非常に複雑に様々な問題が語られているが、ここで語られているライオンさんの「生きづらさ」とはどのようなものなのだろうか。一つに、ここで語られていることは「両方好きって、どういう状況なんだろうね」という語りに象徴されるような「バイセクシュアル」というカテゴリーに自己を位置付けることの困難である。

バトラー（1991=1996）は〈私は「異性愛者」ではない〉という「レズビアン」の「派生性（derivativeness）」はむしろ「異性愛」に向けられうることを論じる論稿において「カミングアウト」において前提とされる〈レズビアンとは～である〉と説明することの不可能性を以下のように論じている。

「その『わたし』の真の完全な中身を露出してくれるような行為のさなかに、その行為のために、ある根源的な隠蔽が産み出される。というのは、レズビアンという能記（原文ママ）を喚起することで意味されるものは、最終的にはつきりしなくなってしまうのが常だからだ。なぜなら、その意味は常にある程度はわれわれの手に負えないものであるからだが、また同時に、その特異性は、排除によってしか線引きすることができないのだが、排除されたものは立ち戻ってきて、一貫性の主張を混乱に陥れるからでもある。もしわたしがレズビアンであると主張したなら、『わたし』の姿は露見されるが、それはただ新しい別の『隠れ場所』を産み出すに過ぎない。」（Butler 1991=1996: 118-119）

「問題はレズビアンとかゲイの範疇を認めるか否認するかということではない。むしろ、何故範疇がこの『倫理的な』選択の場になるのかということである。既存の一連の否認を繰り返すことによってしかその特異性と一貫性を維持することができないような範疇を正当と認めるということが、何を意味するのかということである。[.....] このことから、もうわかってもしも良いところである。レズビアンには必ずしも共通の要素がないということ。」（Butler 1991=1996: 120）

〈私は「レズビアン」である〉と他者に自分自身を説明すること——カミングアウト——は〈私は「異性愛者」でない〉ということの表明でしかなく、「その意味は常にある程度はわれわれの手に負えないものである（Butler 1991=1996: 118）。異性愛から独立した「レズビアン」の特異性、〈レズビアンとは〇〇である〉というときの〇〇は常に隠蔽されており、「レズビアン」「ゲイ」を説明することは「異性愛」との差異に依存している。「ゲイ」としての要素を持ちながらも、「異性愛者」としての要素も用いる「バイセクシュアル」を説明することは「ゲイ/レズビアン」であることを説明することに比べて、〈私は「異性愛者」ではない〉ということを明確に示すことの困難があり、「レズビアンには必ずしも共通の要素がない」とことと同様に「バイセクシュアル」の固有性も、暫定的に定義することできても、

一貫した自己に同一化するカテゴリーとして定義するうえではつねに困難がある。「異性愛/同性愛」という二項のカテゴリーにおいて「バイセクシュアル」が存在する位置は存在しない。草柳（2004）は「セクシュアリティがわからない」というリアリティが一定の幅で共有されていることを指摘しながら、いかに曖昧であっても自分にとって「問題」である何ものかを語ろうとする言葉を「問題経験の語り」という枠組みで分析している。（草柳 2004: 76-85）そしてこのような「問題」を抱える者を、「逸脱」的アイデンティティを積極的・肯定的に掲げて道徳的要求を突きつけるような「強い」主体と対比して、「曖昧な主体」と説明される。このような「曖昧な主体」が経験する困難はアイデンティティをあえて掲げることの政治性の強調から不可視化されやすいことも同時に草柳（2004）は論じている。

ライオンさんはパイロットインタビューの時点で、自身のアイデンティティの位置づけを「考えたことがない」ことを語り、今回のインタビューを通して、自己について説明するために、「バイセクシュアル」というカテゴリーを暫定的に採用したが、その内実は明らかではなく、「強い」主体ではいれないがゆえに、自身の経験する「問題」を明確に語ることもできず、曖昧な「生きづらさ」という言葉で説明されることとなる。

また、この語りの断片において理解できるライオンさんの「生きづらさ」につながる問題とは、直接的に両親からの結婚をしてほしいという圧力を感じて生じているわけではないが、「なんとなく」、「年齢」や「両親のために」結婚することを「決めないとな」という一つの考えであり、「結婚しない」という選択肢は、ライオンさんにとっては「ない」ものとして語られる。この一見矛盾している考えはライオンさんの「生きづらさ」に関連することも示唆されたが、このような考えがどのようなプロセスで獲得されてきたかは今回のインタビューでは必ずしも説明されないものであったが、「妹は結婚してるんだけど。で、子供がなんか作れない状況にあって。[.....] じゃあ、なんだ...俺か。ってなるわけじゃん。」と、結婚することと「次代再生産=生殖」に貢献することを関連させる形の語りもまた見られた。

一方で、クジラさんは「結婚観」に関する態度が知覚されたプロセスを明確に語った。クジラさんに対して「これまでに触れてきた同性愛嫌悪的な言説」について問いかけたときに、真っ先に上がったのが家族による「悪気のない」発言や「オネエタレント」に対する「気持ち悪い」という反応だったという。家族との会話において、「そのなかで印象的なのって？」と問うと、クジラさんは以下のように語った。

クジラさんの語り（一回目のインタビュー）

クジラさん：あとこれは問いに対する答えじゃ全然ないかもしれないんだけど、なんかすごく印象的で僕がすごく傷ついたのは、えっとまあ、親に自分がゲイだって言えないですね。言えてないです。でも親から求められるのは「結婚して欲しい」とか「子供が欲しい」とかだから、異性愛者だと思われるからさ。「結婚してほしい」「孫が欲しい」とか、「奥さん連れてきてほしい」みたいな、「花嫁姿が見たい」とかそういう話をすごくいまだにされるし、帰る度にやっぱり今

でもされるんですね。僕はそのたびに自分をゲイだとは言えないので、「結婚に興味ない」と（伝える）。結婚する気はないので。「孫を見せられないし、あの花婿姿を見せられません」みたいな話を永遠にしないといけなくて。その度に親から言われるのは、めっちゃめっちゃ謝られるんですよ。母から謝られて、「なんで謝るの？」って聞くと、

私：うん。

クジラさん：「あなたに家族の素晴らしさ、家族がいる、家族を作るっていう素晴らしさを伝えられなくて本当にごめんね」って謝ってくるんですよ。親は。いや別にそういうことじゃなくて、僕は家族のすばらしさも全然分かっていて、でも僕が「申し訳ないけど同性愛者として生まれちゃったので、家族は作れないんですよ」っていうところまで言えないから、そこはいつもモヤモヤしてるところですかね。地元帰る時。だからもはや地元、親ともあんまり会いたくない。それ、会うとそうなっちゃうんで。

私：だいぶそれはしんどい... ですね、なるほど。

クジラさん：ごめんなさい、質問の回答と違う。

私：むしろたぶん質問以上の、というか。それそっちの方が多分大きいんですよね。多分ご自身のなかで。

クジラさんは両親に対して「ゲイであること」は隠し通せているが、「もはや地元、親ともあんまり会いたくない」という語りに表れているのは、家族との対面相互行為の場を「普通」としてうまくパスしきれていない感覚ではないだろうか。クジラさんは「家族の素晴らしさ」は理解しているが、自身の性的指向ゆえに異性間の婚姻関係を結び「父・母・子」という構成員によって構築される核家族的な「家族はつくれない」ことに負い目を感じており、それが結果的に自己嫌悪につながるため「親とは会いたくない」という状態が生み出されている。

30 代中盤のライオンさんと 20 代後半のクジラさんの語りから推察されることとして「異性間の結婚」や「家族を作ること」が、「ある年齢」以降に、あるべき規範として働く可能性である。

結婚に関する規範に伴う抑圧はクジラさんのように直接親から「悪意」のまったくない形で通達されることで経験される場合もあるが、ライオンさんのように仮に両親をはじめとした他人からの直接的な言及がなくても経験される場合がある。

前川（2017）は 1920 年代の性欲学雑誌『変態性慾』以降の「男性同性愛者」からの読者投稿分析から当事者の「結婚をめぐる苦悩」が一つの大きな「悩み」として表出していたことを報告している。「男性同性愛者」が異性と結婚することに対して「幸福な家庭」への憧れや両親からの結婚プレッシャーに悩んでいる旨の投稿が「男性同性愛者」から寄せられ、雑誌上の読者投稿欄が悩みを共有する「語りの場」として機能していることを前川（2017）

は評価し、「結婚をめぐる苦悩」の表出は 1920 年代の『変態性欲』から 1980 年代に刊行されていた『薔薇族』まで続いたことが報告されている。

これらの「結婚観」に関する語りはゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングを分析するうえでどのように位置づけられる問題であろうか。まず、クジラさんの語りとその分析からわかることとして、対面的相互行為の場における自己呈示の在り方や発話の「管理/操作」を行うような「戦略」のみでは「結婚しないこと」によって生じうる「独身者」としての「スティグマ」を隠して家族との相互行為の場をパスすることが困難であることが示唆されている。確かにクジラさんにとって「結婚しない/できない」ことは必ずしも即座に「同性愛者」の徴には結びつかないために伝えることが可能になっている。しかしその「結婚しない/できない」ということを伝えることが結果的にクジラさんの「普通」からの疎外を実感する契機となり、「普通」であることを目標とするパッシングがうまくいっていないとも評価できる。

「標準」家族を前提にすることが社会制度において確認されることを阪井 (2024) は「標準」家族を前提とした社会制度を見直すことが必要不可欠 (阪井 2024: 146) であると提言しているが、現在の日本社会においては「父・母・子」を単位とする核家族的な「標準」家族が前提とされていることはゲイ/バイセクシュアル男性にも自明視されうる。例えば堀江 (2015b) は、家庭内における女性差別に関して議論するワークショップに参加した際に議論の参加者のなかには未婚女性を含む多様なライフスタイルを育む人々がいる可能性がありながらも、家庭内の女性が受ける差別の問題を議論するとき「父・母・子」というユニットが常に想定して語られたことから日本社会における「標準」家族を自明視する「家族イデオロギー」の根強さを指摘する。

パッシングの意味付けを問うなかで、直接的に「家族」を理由にした説明はされなかったが、モノガミーの異性婚を前提とする核家族的な「標準」家族を前提とするような話は、ライオンさん、クジラさんだけではなく、他の調査協力者 (イチゴさん、ヒツジさん) においても見られた姿勢であり、特に定位家族との相互行為の場をパッシングすることと無関係ではないだろう。今回、明確に、「結婚」の問題が語りに表れたのは 30 代中盤のライオンさんと 20 代後半のクジラさんに限られる。

どちらも定位家族との相互行為の場において「異性愛者」としてパスすることに成功している。しかし、ライオンさんが「生きづらさ」として話したことや、クジラさんが「親ともあんまり会いたくない」という事態に陥ったことは「普通」の絶え間ない達成であるパッシングの失敗に起因すると考えたときにそれはどのような事態であるといえるだろうか。それは異性婚を前提として「標準」家族を形成することが (明確ではないが) ある一定の年齢に達すると「普通」なことであり、家族との相互行為の場においては規範化された〈理想の息子〉としてのパスができていないと説明できる。ここで示唆される〈理想の息子〉とは「標準」家族を形成し、「次代再生産=生殖」に貢献するような人物像であり、原理的に「異性愛者」でないと達成できない基準である。そして、この〈理想の息子〉としてパスすることは、

日常的慣行の修正をはじめとした対面的相互行為の場におけるパッシングの次元ではパスができない水準のものである。定位家族との相互行為の場をパッシングする困難は以下に引用するヒツジさんの語りからも推察されるが、定位家族というコミュニティの閉鎖性や代替不可能性に起因することも同時に示唆される。

ヒツジさんの語り（一回目のインタビュー）

私：変な質問だけど、言わないでいる理由はある？あ、てか、この先言うつもりはある。職場、家族。

ヒツジさん：あるんじゃない。職場はちょっとわかんないけど。うん。ずっと今のところにいるとも思わないし。うんうん。職場はちょっとわかんないけど。うん。家族はね、基本的に死なない限り一緒にいるから、関係を持たざるを得ないから、言うと思う。

ヒツジさんに対して「ゲイであること」をこの先、職場や家族との場において「ゲイであること」を言うつもりがあるのかどうか尋ねると、家族に対してはいずれ話すことが語られた。そしてその理由は「関係を持たざるを得ない」特性とともに語られた。Shippee (2011) は関係性を「親密性」という軸で類型化し、家族のなかでも、両親との関係は最も親密性が高いがゆえに、開示の圧力が強く、かつ拒絶のリスクも高くなるために、パッシングを選ぶことを説明している。日本社会におけるゲイ/バイセクシュアル男性を対象とする本稿においても、クジラさんが家族に対して嘘をつかないといけないことに対して「いたたまれなさ」を感じていることや、ヒツジさんの「関係を持たざるを得ない」がゆえにカミングアウトをすることが予期されている語りからも示唆される通り、カミングアウトが選ばれるか、もしくはパッシングすることの決定（パッシングに関しては明確な「決定」ではない場合があることも確認しているが）は関係性に拠って変化するものであり、開示すべきという圧力は定位家族に対してより強いものとして経験されていることが示唆される。

そしてそういったパッシングの困難は定位家族との相互行為の場においてパッシングすることが「異性愛者」であることを示して「やり過ごす」だけでは不十分であり、それは定位家族（特に両親）が要求するだろうと当事者が認識する規範的な想像上の〈理想の息子〉像を示すことができないからであると推察される。

6-2-2 公的な場における〈理想の〇〇〉

次に確認したいのは、対話のなかでパッシングを意味付けるうえで語られた公的な場における〈理想の〇〇〉というあるべき規範的な態度と関連して説明される語りである。例えば、ブドウさんは〈理想の教員〉像と重ね合わせながら、職場においてカミングアウトをしない理由が話される。

ブドウさんの語り（一回目のインタビュー）

私：なんか逆にこういう環境だったら言いやすいんじゃないかな、みたいなのはありますか？

ブドウさん：言えないっすね。これ（性的指向）は言えないっす。

私：なんで、言えないんですかね。

ブドウさん：まだ日本の環境的に言えない。なんて言うんですかね。学校ってやっぱり臭いものに蓋をする文化っていうのがあると思うんで...だし、なんだろうな、自分...自分が言うことで。言ったら仮定した時、学校で。先生に対しても生徒に対しても周りに及ぶ影響って、あんまりプラスじゃないのかなって思うんです。

私：プラスじゃないっていうのは、自分にとって、ってことじゃなくてその人達にとって？

ブドウさん：その...周りですね、はい。やっぱり高校生ってすごい自分のセクシャリティとか、セクシャリティに限らず、自分がどういう人間なのかっていうのを知覚していく時期というか、そういう存在だと思っていて。で、とても危なかしい。そういう意味で、どっちにも転べる。どっちにもっていうのは、（非異性愛を）きちんと知覚をして、そういう人間だっていう、自分でちゃんと理解をして飲み込んだ上で大人になれるパターンもあれば、自分の中でこう気づいたもの（非異性愛の兆候）にこう絶望して、なんかその自分を傷つけるような状態になってしまったりとか、そういったのにやっぱりなるかもしれない。どっちにもなれる、どっちにも振り切れる可能性がある危ない存在なので。なので、我々教員としては、そういう状態の子たちをきちんとその前者の方向に持って行ってあげないといけない。[.....] セクシャリティに限って言えば、もちろん...多分、自分が勤めてる学校にゲイとかバイとか結構いると思う。思ってるんですけど。（アイデンティティとして）認識してなかったり、言わないだけで。（自分がカミングアウトをすることで）そういう子たちの後押しに果たしてなるのかなっていう。オープンにするっていうのは、学校の現場の中では、やっぱりその意味を見出す必要があるな。教員っていう立場なので、自分のアクションは子どもたちにとってなにかしらの、絶対その見本というか、先人の行動になるので、なんかしら絶対に意味がないといけないと思ってるんですけど、やっぱその意味が揺らぐ...揺らぐというか、必ずしも正しい存在ではないと。授業とかは絶対正しい...正しい？というか、そこに意味がある。正しいものとして、行われるべきものとして行われてるので。他の関わり、部活とかも全部そうなんですけど行われるべくして行われてるものだけで構成されてるのが学校現場なので。

私：うん、そうなのか。

ブドウさん：俺がオープンにすることってというのは、その行われるべきものからは外れるし、オープンにしたとして必ずしもプラスの方向で働かない。さっき言った通り、生徒たちの状況ですね。教員なんてどうでもいいんですよ、教員にどう思われようと別にどうでもいいんですけど。生徒たちに及ぶ影響っていうのがあまりプラスじゃないのかなっていう風に思うんで。

私：うん。

ブドウさん：それと同時に、もちろんそういうそのセクシャルマイノリティの気質を持った子たちに後押しができるような存在で、その後押しができるような働きかけをやるべきなんですけど、そのやり方っていうのは、自分がオープンにするっていうこと以外にもっといい方法があるんじゃないのかなっていう。それがじゃあ具体的に何かっていうのは思い浮かばないんですけど、なんかそれは違う方法があると思ってるので...いや、でも保身なのかな？わかんないんですけど、

私：でも、なんか、今思ってるところでは、多感な時期の子供たちの前で、自分のセクシュアリティをオープンにしたとて、それは当事者の子に対しても、そうじゃない子に対しても、プラスの意味がないんじゃないかっていう？

ブドウさん：他の要素もいろんな踏まえて、例えば、すごい自分ではすごいこと言ったつもりでも、生徒たちの間で僕が存在がどういうものかわかんないので。（自分が）やばい存在、いじられる存在、軽い存在だったら。「え。あいつホモだよ。」みたいになって。で、嘲笑の対象になり得る。

私：うん。

ブドウさん：それは、当事者の子たち以外の子たちに対しての悪影響。

私：嘲笑させてしまう、という意味で？

ブドウさん：そうそう、そうそう、そう。じゃなくて、今んとこ、僕が思ってるのは、そういう、その、セクシャルマイノリティっていう事実だけがわかる状態での、なんて言うんですかね、ロールモデルを示してあげるっていうのが、やっぱり理解を深める上で大事だと思ってるので、なんて言うんですかね。あう。自分がオープンにするんじゃなくて、外部の人を呼ぶとか、なんか自分が人づての話みたいな形で話をするとか、なんかそういうやり方が色々できるなって。

私：うーん。

ブドウさん：だから、まとめると、職場で言わない理由としては、言うという行為は、教員っていう立場で考えると必ずしも正当性がないっていうことと、言ったとして、正当性があつたとして、それを言うことによって与える影響は、教員という立場としては（生徒にとって）プラスでないといけないうのに、必ずしもそれがプラスじゃなくなるっていうこと

この一連の語りはブドウさんの認識する〈理想の教員〉像を示す語りである。ブドウさんは「ゲイである」ことを告げることが「行われるべきものとして行われている」学校における秩序を乱すこととなり、自分が「ゲイ」として矢面に立つことによって生徒たちの同性愛嫌悪的な言動が誘引されて、それが間接的に学校に存在するだろう他の非異性愛（者）の生徒を傷つけるうし、自分の「いじめられやすい」という「特性」と「ゲイ」というカテゴリーが結びつくことで生徒たちに人を「嘲笑させてしまう」機会を提供してしまう可能性があることを語る。この一連の語りからわかることとして、ブドウさんは学校という職場において〈理想の教員〉としてパスすることを目指していることが挙げられる。そして、ブドウさんが〈理想の教員〉としてパスするためには「ゲイである」ことは隠さないといけないことであることが認識されている。カミングアウトがなされるときは、それが「意味のある」行為ではないといけないことも同時に語られており、「学校」という場で教員が「同性愛者」として自己表明するためには、それ相応の「正当性」がないとできないことであることが示唆される。

一方で、ブドウさんが〈理想の教員〉としてパッシングするためにカミングアウトを選択していないと解釈することはブドウさんのパッシングを一面的に捉えた理解になりうることに留意されたい。ブドウさんは、同時に「学校」という職場においてカミングアウトすることの困難も語っており、以下に引用する語りにも表れている通り「保身かもしれない」と語りなおされている。

ブドウさんの語り（一回目のインタビュー）

私：あとは、それは...普通に言うてしまうことで、自分の職を追われる可能性はありますか？

ブドウさん：それはあると思います。だから、保身も絶対あると思います。

私：保身というか...そうか。でも、それも正当な理由だと思います。そうか。

ブドウさん：自分自身の側面と、教員としての側面か。じゃあ、その2つですかね。

はじめは〈理想の教員〉像とパッシングの理由が結び付けられて語られていたが、インタビューが進み、私が、カミングアウトをすることによって「職を追われる可能性」があるかを尋ねると、職を追われかねないという「自分自身の側面」が立ち現れてきた。そして「自分自身の側面」と、生徒の前で「正当性」がないのにも関わらずカミングアウトをすべきではないという規範的＝理想的な「教員としての側面」の二面で整理された。丸井（2020）は2011年時点の調査の結果から、日本における異性愛中心主義の教育が性的少数者の子供たちに負の影響を与えていることを論じているが、その教育体系は生徒だけではなく、教師にも十分に影響を与えうることは容易に想像できる。ブドウさんの語りが示すことは「学校」

という場における「異性愛（/者）」を自明と認識する異性愛主義の素朴な存在である。

ブドウさんほど明確な形ではないがヒツジさんも「同性愛者」であることが働くうえで「ノイズ」になる可能性を危惧している。続いて引用するのはヒツジさんの職場でカミングアウトをしない理由である。

ヒツジさんの語り（二回目のインタビュー）

私：そっか。じゃあ職場から聞いとこう。職場で言わない理由はどういう理由？

ヒツジさん：仲はいいし、ある種、友達みたいな感じもあるけど、目的としては、その、お仕事をしに来てるわけで、そこになんか。え。じゃあ俺がゲイであるっていうことって関係ない。

私：うん。

ヒツジさん：別にいい人たちだし、受け入れられて。うん。普通に接せられる未来も十分に想像できるけど。ノイズになっちゃう可能性もあるから。よっぽど、まあ相手もね、年齢が上の人も多いし。4、50ぐらいの人もいるから、よっぽど受け入れられなくて。うん。関係崩れちゃうとかも考えられるからってなると、別に危ない橋を渡る必要ないかなっていう。

私：そうか。働く上で必要のない情報だし、それをきっかけに関係壊れたりしても、めんどくさいし...ってということか。

ヒツジさんは自身がカミングアウトすることによって必ずしも即座に差別を受けないことが職場における日常的な相互行為の積み重ねをもってして予期されているが、それでもなお「ゲイであること」が働くうえで「ノイズ」になってしまう可能性が危惧されている。

公的な場においてカミングアウトすることが「ノイズになっちゃう可能性」とする態度はブドウさんやヒツジさんだけではなく、クジラさん、イチゴさん、ライオンさんの語りにおいても同様の傾向がみられた。「同性愛者」を公的な場において引き受けることはふさわしくないという観念、それは「同性愛者」を引き受け、呈示することによって差別に遭う可能性が増して、様々な機会を損失したり、職を失いかねないという意味で個人が可傷的になりえるという問題でもあった。一方で公的な場（職場）において「同性愛（/者）」であることを引き受けて呈示することは「わざわざ」言う必要のあることではなく、ブドウさんの言葉を借りれば、それは「正当性」がないという論理で説明され、公的な場における規範的＝理想的な像から「同性愛者であること」は排除されることが示された。

6-2-3 他者化される「LGBT」、「ゲイっぽいひと」や「オカマ」

ガーフィンケル（1967=1987）が明らかにしたことは、彼の調査対象であったトランス女性のアグネスが「自然な」女性という地位を確立すると同時に同性愛嫌悪的な態度をとっていることである。アグネスは同性愛者やトランスヴェスタイトの話題が上がるたびに「自分はある人達と同類じゃないわ」と繰り返し語り、同性愛者やトランスヴェスタイトに対

して「ふつうの人達」と同じような「理解の欠如」を示したことが報告されている。トランスヴェスタイトの人やアグネスと同様の性別の越境経験を持つ人たちがアグネスと話していることがアグネスに伝えられると、接触することは断られて「そんな人たちのことに、関心がない」と語られたという（Garfinkel 1967=2004: 260-262）。

山田（2020）はアグネスがなぜ同性愛者などのカテゴリーの人々を忌み嫌ったのかという問いを立てながら、それは彼女に固有の差別意識ではなく「彼女が必死で誠実な成員になりつづけようとした」（山田 2020:130）証左であると解釈している。「ここで働いた排除や差別の行為は、当該社会において自明視された道徳的秩序に進んで従うことによって引き起こされている。いわば「差別することを」させられている。」（山田 2020:130）とアグネスの同性愛者やトランスヴェスタイトに対する差別的な態度が解釈される。

これまでの語りを分析する中で〈普通の男性〉像や〈理想の教員〉像などから「同性愛者」性が排除されていることが分かったが、パッシングのための排除は他にはどのようなものがあるだろうか。一部の調査協力者らの語りでは「LGBT」を自己の問題とは切り離して他者化する「無関心」の語りや「ゲイ」から「オカマっぽい人」が他者化されていることが示唆された。

イチゴさんの語り（一回目のインタビュー）

私：なんかこれまでの人生で、言わないでいる理由に何があるのかなっていうのをちょっと考えたくて。なんか、これまで...ごめん、カタカナしか出てこないわ。ホモフォビックな言説とか。

イチゴさん：え、全然わからん。

私：同性愛嫌悪的なニュースであったり、

イチゴさん：あ〜はいはいはいはい。

私：周りの言葉だったり、みたいなものに触れたことはある？

イチゴさん：なんか本当、身近でそういうのがあったってことはないけど、世の中的にはそういう（同性愛嫌悪的な）思考の人だったりとか。それに影響与えられて、嫌な思いしてる人はたくさんいるんだろうなって風には思うけど、結局他人事であって。

私：うん。

イチゴさん：自分が...

私：自分がなんか傷ついたり...みたいなことは、というか、そもそも、直接的なものに触れたことがあんまりないのか。

イチゴさん：うん。なんかあんまぱっと今浮かばなかったかな。うん。しかも、なんかそういう（同性愛嫌悪っぽい）こと言われても、多分「そうだよな」とか、「うん、確かにね」とか、なんか別に言っちゃうと思うし、嫌な気持ちにならない気がする。

私：どうせ同性愛嫌悪っぽいことを言われても、「うん、そうだよな」って返せる？

イチゴさん：返せるし、それに対して別に罪悪感もないし、「そういう考えもなんかあるよね」だったりとか。

私：なるほど。

イチゴさん：なんかめっちゃ「LGBT」とかに関心全くないかも。

私：うん。そっか、そうか。なるほど。「LGBT」に関心がないのというのは結構掘りたい部分で...それは、自分はもう別に「LGBT」の区分にないということではない？

イチゴさん：いや、区分だとは思ってるけど、自分がそうであるからといって他人がどうであろうとどうでもいいって感じかな。

[.....]

私：なんか...なんで...自分がそれに関心がないのかとかってわかります？本当に関心がないから？

イチゴさん：なんかそういう「LGBT」とかそういう枠に限らず、うん、あんまり人に関心を持たないんだと思う。

私：なるほどね。でもさ、その「LGBT」ってさ、ある種自分のことでもある...じゃない。

イチゴさん：うんうん。

私：なんか自分が...でもそうか、言わなかったら、差別を受ける機会もないっていうことですね。

イチゴさん：うん。

私：そうか。

イチゴさん：しかも差別してくる人は周りにいないと思ってるし。

私：あ、差別してくる人は周りにあまりいない。

イチゴさん：いないと勝手に思い込んでるし。いたとしてもその人の考えだから、なんかそれはそれで尊重できる気もする。

私：うーん。

イチゴさん：でも、実際にされたら嫌な気持ちになるかもしれないけど、そこはなんか原体験として、ぱっとそういう経験が浮かばなかったから。うん。多分ないんだと思うかな。

「同性愛嫌悪的な[.....]ニュース」に触れたことがあるか、と尋ねるとイチゴさんは同性愛嫌悪的な言説に触れたことがないことを話しながら「LGBT」の問題は「他人事」であり、関心がないことを話している。社会的場面をパスできているからこそ、自分が差別に遭うことや、「同性愛（/者）」に対する差別を目にする機会はなく、「他人事」として処理することが可能になっている。また仮に同性愛嫌悪的な言葉を投げかけられたとしても罪悪感なく同調できるだろうということが語られている。「ゲイの友人はどれくらい

いる？」という質問に対してイチゴさんは「でも全然、1～2人とかで。少ない...普通の人だ...。」と回答され、そこで語られた「普通」が指す意味について確認を取ると、それは「ゲイっぽくない人」であるという相互了解が取られながら話が進んだ。「『LGBT』とかに関心がない」という語りがイチゴさんから発せられたことはどのように解釈できるだろうか。一つにはアグネスと同様、ゲイ/バイセクシュアル男性が自己を「普通」に定位することは同時に「普通」ではない「LGBT」を他者化し、「無関心」な態度が選ばれたり、「ゲイっぽい人」を他者化する機序がある可能性である。イチゴさんが同性愛に対する嫌悪の言説に触れても、それはその人の考えであるため「尊重できる」と語った際に、私が「じゃあそのゲイであることは、自分にとって嫌なことみたいな感覚はそんなにない？ ノンケだったらよかったな、みたいのは？」と問うと、「それはある。普通でありたいとは思うけど。もう普通に女性好きになって。結婚とかもしたいと思うし、そっちの方が、楽だ...生きやすいとは思うから。ノンケになれるんなら、ノンケになりたいって思うかな。」と答えられた。この語りからもイチゴさんの「普通でありたい」という欲望において「普通＝ノンケ」という定式化が確認できる。ここで語られる「ノンケ」とは規範的な「異性愛者」を指している。異性愛者は必ずしも、皆結婚するわけではなく、結婚している異性愛者は必ずしも「普通」であるとは限らない。ここで語られる「ノンケ」とは規範的＝理想的な人物像であり、達成不可能な基準として設定される幻像である。

次に引用するのはブドウさんの「オカマ」と同一視されたくないことを示唆する語りである。

ブドウさんの語り（一回目のインタビュー）

私：[.....] なんか、その周りとの会話...というか、周りの子とか、家族とか。

ブドウさん：はい。

私：親戚とかからの同性愛嫌悪っぽい発言とか、なんかちょっと揶揄してるような発言とか、聞いたことはありますか？

ブドウさん：最近ありますね。

私：最近？

ブドウさん：なんか、割と、なんか、今までそういうのを聞いたことはなかったんですけど。近い人間からは。まあ、なんか...嫌悪とまではいかないんですけど、理解が乏しいんだろうなっていう。あんまわかってない。ざっくりと考えると、うちの母親...なんですけど、我々、子供が大学生になったりして、ある程度自立してくると、ドラマを色々観始めて。パソコンでいろんなドラマを見てるんですけど。その中で言ってきたのが、「最近、あれが面白い...」みたいな。『昨日、なに食べた？』

私：うんうん。

ブドウさん：で、「オカマの人たちが面白い」みたいなこと言ってて。

私：あ～。

ブドウさん：「あ、オカマの人たち」っていう認識なんだ。あ、じゃあ多分これ
言えないなっていう気持ちが深まりましたね、その瞬間。そんな感じで。

私：なるほど。

ブドウさん：はい。

私：それは自分も「オカマの人たち」って思われちゃうんじゃないかってこと？

ブドウさん：う～ん。確かに。じゃあ俺、「オカマ」って思われたくないと思っ
てるのかな。そうなのかもしれない。

私：あ、それは、ありますか？自分の中で。

ブドウさん：まあ、間違いなく違いますからね。別物なんで。うん。そういう。
そういう認識のズレを持ってほしくないっていうこと。気持ちであることを願
いたいんですけど。わかんないです。ちょっと今の段階ではそうだと思うて
るんですけど。

『昨日、なに食べた？』はよしながふみによるシスゲイカップルの日常を描いた漫画であり、テレビドラマ化³⁸や映画化もされている大衆的人気作品である。職場でパッシングしている弁護士の筧史朗（通称・シロさん）とお客さんをはじめとした不特定多数の相手にカミングアウトをしている美容師の矢吹賢二（通称：ケンジ）は原作においても映像化された作品群においてもシス男性のゲイとして表象されている。「オカマの人たち」は基本的には登場しない作品だが、ブドウさんの母親のなかに「ゲイ男性＝オカマ」と認識する図式があることが推察される。そして、その母親からの発言を受け、「ゲイであること」を伝えることが「オカマであること」として歪曲して伝わる可能性があるがゆえに自身が「ゲイであること」を伝えることが困難であることが語られた。「ゲイ」は必ずしも「オカマ」ではないという指摘は、これまで MtF³⁹的な表象に偏ってきた「ゲイ」のメディア表象（木場 2019）に対するカウンターとして、「ゲイ」のなかには「オカマ」に留まらない多様なグラデーションがあることを示す態度も示唆する一方で、この一連の語りにおいて自分は「ゲイ」であり、「オカマ」とは同一視されたくないという態度も推察される。ブドウさんにとって「オカマ」は「ゲイ」というカテゴリーの外に設定されており、インタビューの場において「わかんない」と言いながらも、自己を「ゲイ」に定位して「ゲイ」としてパスするためには「オカマ」の他者化が必要であることが示唆されている。

6-2-4 まとめ

本節では、自明とされる「普通」観を明らかにしながら、どのようにしてパッシングが意

³⁸テレビ東京、「ドラマ 24 きのう何食べた？」（最終取得日 2025 年 1 月 15 日
<https://www.tv-tokyo.co.jp/kinounanitabeta/>）

³⁹「Male to Female」の略語。木場（2019）は日本のメディア表象文化において「ゲイ男性には「女性性」を付与/強調するような表象がなされてきた」（木場 2019: 136）ことを報告する。

味づけられているのかということと合わせて考察してきた。

一つ目に確認したのは、定位家族（特に両親）との相互行為の場におけるパッシングの複雑性と固有の困難である。その家族との相互行為の場をパッシングする困難の一つに仮に「同性愛（/者）」の徴を隠して対面的相互行為の場をやり過ごすように「異性愛者」としてのパッシングが可能であっても、異性婚をしていることを前提とする〈理想の息子〉としてはパッシングできないという問題に起因することを分析した。そして〈理想の息子〉とは「異性愛者」でないと原理的に達成できない基準であり、対面的相互行為の場を「異性愛者」としてパスできていても、困難として経験されうることが示唆された。

二つ目には公的な場における職業人としての〈理想の〇〇〉という規範的な主体から「同性愛（/者）」は排除されており、パッシングする理由に「正当性」がないという形で説明された。カミングアウトをすることは機会損失を誘引し、個人を可傷的にすると理解されていると同時に規範的＝理想的主体から「同性愛/者」性が排除されていることを確認できた。

三つ目に、自己を「普通」に位置付けるために「LGBT」や「ゲイっぽい人」が他者化され、自己を「ゲイ」に定位するためには「オカマ」の他者化が必要であることなど、何かしらの他者化を経た自己規定があることを語りから解釈した。

これまでの議論を通して、ゲイ/バイセクシュアル男性にとっても「ゲイ」を他者化する論理は自明とされたが、それらの「同性愛（/者）」を排除した「普通」の知覚されるプロセスは必ずしも説明されなかった。しかし、これらの認識されている規範的異性愛に対する態度はパッシングのために動員されていることが十分に考えられる。

第7章 パッシングの理論的考察

7-1 カミングアウトの意義と困難

他者に向けて「同性愛者」であることを示すこと——カミングアウト——は当事者にとってどのような意味を持つことなのだろうか。「見えない」障害のカミングアウトの困難を論じている飯野（2023）は障害者自身が自らの障害や身体性に対し、否定的な評価や見方を「内面化」するような、感受されるスティグマの存在がカミングアウトをすることで「カミングアウトをしたら差別されるのではないか。」（飯野 2023: 87）という恐怖心や不安を生じさせることがカミングアウトにおいて生じうることを説明している（飯野 2023: 86-87）。

そのような機序を示す態度は今回のインタビューのなかでも十分に聴かれたものである。この「恐怖心」や「不安」を生み出す要因にはカミングアウトのどのような性質がかかわるのだろうか。

同性愛研究の黎明期においてカミングアウトが「同性愛者」の主体形成の契機として認められながら、アイデンティティ・ポリティクスが称揚されてきたことは1-2において確認してきたとおりである。

「カミングアウト」を「抵抗」に位置付ける論理は、カミングアウト後の「危険と誓約」（風間 2002: 355）を生み出すことによってカミングアウトの後に起動する「同性愛嫌悪の

力学を把握し、それに対して政治的介入を行っていくことが可能となる」(風間 2002:356) ことである。一方で、パッシングは、その「危険と誓約」を生み出さずに、避けるための同化主義的な側面を持ち、個人が生き抜くための「戦略」としての側面を有することも分析において確認してきた。

しかし、「危険と誓約」を個人が背負うことを条件とする「カミングアウト」が「抵抗」の唯一の拠点である、と論じることが当事者の生きられた現実在即して考えるとあまりにも希望がない。「カミングアウト」は「同性愛者」としての明確な主体を生み出す契機となり、歴史を振り返ってもアイデンティティ・ポリティクスがゲイ男性の可視化とそれに伴う権利拡大に貢献してきた側面は間違いなくあるだろう⁴⁰。特に 1990 年代以降の「エイズ危機」とそれに伴う同性愛嫌悪の言説の増大という現実、早急に自らを語る主体を打ち立てる必要性をもたらした⁴¹。エイズに罹患し、亡くなった死者のこれまでの〈生〉の記憶からエイズが存在、ひいてはゲイ男性であったことが消去され、沈黙を強いられるという事実もあった⁴²。

しかし、「アイデンティティの政治は多くの成果を収めてきたが、それは、境界の外に対しては異質性を、内に対しては同質性を強いる。その帰結として、マジョリティが拠って立つ普遍的基盤はそのまま、マイノリティは特殊な集団として棲み分けられる。それは論理的にそうであるばかりか歴史が教えることである。」(伊野 2005: 43-44) と指摘されるように、「カミングアウト」に基づく連帯は「同性愛者」の権利拡大を進めて、「可視化」に貢献してきた一方で、その本質主義的な「戦略」はつねに境界を生み出し、「マジョリティが拠って立つ普遍的基盤」を揺るがすことは叶っていないこともまた事実である。

⁴⁰ ゲイリブの過程においてシスゲイの存在が前景化しており、レズビアンやアセクシュアル、フィクトセクシュアルなど、依然として不可視化されている性的マイノリティの問題はある。

⁴¹ エイズ・アクティビズムの代表的な運動体である ACT UP (AIDS Coalition to Unleash Power) のメンバーたちが口にした有名なスローガンは「Silence is Death (沈黙は死)」であった(新ヶ江 2022: 154)。

⁴² 以下に引用するのは堀江(2015a)によるエイズアクティビズムの一つのきっかけとなったブルーノというエイズ罹患者の〈吊い〉の場においてどのようにして彼が吊われたのかということへの一考察である。「エイズという『ある病』は、けして『あきらかにはされない』。ブルーノが〈死〉へと至るプロセスを知る人びとがその場に立ち会いながらも、それは「あきらかにはされない」のである。語ってはならないものとして、ある。沈黙を強いられるものとして、ある。そして、語ってはならないという命令は、その場に強く作用するがゆえに、ある人びとにとっては、その欠如が突出して感得される。同時に、ここで語ってはならないものとしてあるのは、亡くなったブルーノがゲイ男性であったということでもある。ゲイ男性というかれ自身のセクシュアリティは語られず、しかし、それとは裏腹に『勇敢に』亡くなっていったことのみが語られる。〈男らしさ〉を示す『勇敢さ』は、まさにゲイ男性が〈普通＝異性愛者〉という規範から外れてしまった存在として、かき消されるように隠蔽されていくのである。そして、その『勇敢さ』をあえて強調する雰囲気葬儀空間を占拠していく」(堀江 2015a: 139)

加えて、「カミングアウト」を唯一の「抵抗」として位置づける問題は、先駆的に「異性愛規範」や「同性愛嫌悪」が社会にあることが設定されないといけないところにもある（金田 2004）。現代日本社会における「同性愛歓迎ムード」（元山 2022）のなか、差別の形態が無意識的かつ習慣的な部分に根を張るようになっている現在、特に「同性愛」に対する差別の形態が黙示的である日本において（小宮 2015）、「カミングアウト」は必ずしも言語的な水準において「同性愛嫌悪の力学」（風間 2002）を顕在化させない可能性もあるだろう。

組織において「権力の温存はしばしば非公式な手段でなされる」（Ahmed 2021=2024: 83）傾向があることを指摘するアーメッドは公にされない「非公式のポリシー」に基づき、仕事の分配をはじめとした偏りが生じる可能性を論じている。これはまさにクジラさんが「職場で言わない理由はやっぱりどっか普通と違うってことはやっぱりいつかどこかで不利益を被る可能性があるからですよ」とカミングアウトすることにおいて心配していたことであり、公的な場において個人がカミングアウトをしたときに「不利益」を被るプロセスは必ずしも可視化されえない。

調査協力者のほとんどに、カミングアウトをすることは「正当性」がないことであり「ノイズ」になりえるという語りに象徴されるような、特に公的な場においてカミングアウトすることに対して慎重な態度が見られた。6-1-3においてクジラさんの「嘘をついたり」する目的は「異常者」に見られないためであった。そしてクジラさんにとって「LGBTに寛容な雰囲気」を持つ組織であっても「同性愛者」であることが露呈することが「昇進」を阻みうるものが想定されていた。

ここで一つ思い起こされるのが、公的な場における「カミングアウト」がある種の「苦情」としての側面を持ちうること、あるいは「カミングアウト」が組織に「苦情」として聴かれうるものが自覚されている可能性である。ゲイ解放運動において志向されてきた、「ゲイ」や「レズビアン」というカテゴリーを積極的に引き受け、呈示する「カミングアウト」は社会に対する「クレーム申し立て」のプロトタイプ（草柳 2004: 79）と説明される。

「クレーム申し立て」を個人が引き受けることは相当のリスクを背負うこととなりえないだろうか。アカデミアにおける「苦情」がいかに聴かれないかを主題化するアーメッドによると「苦情」とは「過去にさかのぼる時間性を持つ」（Ahmed 2021=2024: 168）ものであり、「異議申し立て、声を上げること、闘い、名づけること、問いを投げかけること、撤退すること。ほほえんだり笑ったりしないこと。それは、うめき声やそれに類するもの」

（Ahmed 2021=2024: 169）として説明される。そして、「苦情」は聴かれないに限らず、「苦情はしばしば何かに対して『騒ぎ立てている』か、必要以上に何かを大ごとにするものとして扱われる」（Ahmed 2021=2024: 121）側面がある。「苦情がどの時点から始まるのかは判然としない」（Ahmed 2021=2024: 169）点など「苦情」と「カミングアウト」には、類似点はいくつか存在する。実際にアーメッドはカミングアウトが苦情として聴き取られることを以下のように説明する。「クィアやトランスの人たちなら〔……〕カミング・アウトが一度きりで終わらず、何度もし続けたいといけないことを知っている。あなたはパー

トナーや自分に使われる代名詞を訂正しないとイケないかもしれない。すると、カミング・アウトは訂正してばかりいる骨の折れるワークになる。訂正はしばしば苦情として聴き取られる。ネガティブで、攻撃的で、要求が多すぎるのだと。カミング・アウトには意図的な公表も含まれるが、つねにそんなふうに進むとは限らない。」(Ahmed 2021=2024: 198-199) パッシングに限らず、カミングアウトもまた終わりのある実践ではなく、絶え間ない「闘争」である。そしてカミングアウトに伴う発話が苦情として聴かれる可能性が常にあることが示唆される。苦情を申し立てるプロセスに消耗させられるのと同様、カミングアウトをし続けることは「モチベーションとエネルギー」(Kanuha 1999)を消耗するものであり、なぜならカミングアウトのあとに待っている反応は本人の予想がつかないものであって、もし、仮に差別的な反応を当事者が経験しても道徳的要求を突きつけることは必ずしも叶わないからである。それは苦情を訴えるプロセスにおいて経験される「次に何がドアから入ってくるか予想がつかない、おぞましいものだ。手に負えないものがやって来て、参ってしまうかもしれない」(Ahmed 2021=2024:77) ことと共通する。

カミングアウトすることは必ずしも即座に相手からの拒絶を意味するわけではなく、聴かれる可能性を示唆するような語りも見られたが、同時にそれは苦情として聴かれうることを当事者は理解していたし、クジラさんやブドウさん、ヒツジさんが職場におけるパッシングを理由づけるものとして「異常者ではない」ように、「秩序」を乱さないように、「ノイズ」にならないようにという態度は「同性愛者」であることを引き受け、提示することそのものが「苦情」として機能しうることの証左である。直接的な嫌悪の言説に触れていなくてもスティグマは感受される。

7-2 パッシングの「失敗可能性」

7-2-1 「異性愛主義」とはなにか

パッシングが規範への応答としての側面があることを示してきた。そして、その様々な規範には「異性愛」を自明視する異性愛主義を含むことを論じてきた。では異性愛主義とはどのようなものなのだろうか。

支配的な文化としての「異性愛」はフェミニズムやクィア理論のなかでアカデミックな議論において自明とされてきた「異性愛関係」の問い直しから始まった。(Rubin 1975=2000; Wittig 1980)

しかし〈異性愛主義とはなにか?〉という理論的問いかけに対して明らかな回答を捻出すことは難しい。「異性愛主義」という権力はあらゆる形で浸透し、あらゆる場面で作動しうる。バトラー (2005=[2008]2024) は『権力とはなにか』といった規格的な理論的問いかけを行うことはできない。私たちはただ、『権力はどのように作動するのか、あるいは、あれこれの行使において権力はいかなる形を取るのか、そしてそれはどのように働くのか』としか問うことはできないのである。」(Butler 2005=[2008]2024: 176) と説明している。

「異性愛主義」とは権力そのものであり、問うことができるのはその権力がいかに作動し、

いかなる形を取るのか、ということに限る。実際に異性愛が「制度」として明確に位置付けられて批判的に分析されているのは 1990 年に出版された『ジェンダー・トラブル』(1990[1999]=[1999]2018) においてである(竹村 2013: 131)。竹村の指摘する通り、バトラーは異性愛が文化の「マトリクス」として設定されて、異性愛セクシュアリティへの同一化が強要される図式を明らかにした。バトラーの説明した「異性愛のマトリクス⁴³」とは覇権的な言説や認識の枠組みであって、その批判は構造人類学や伝統的な精神分析の枠組みに向けられた。一例としてレヴィ・ストロースの議論において近親相姦^{エロティック}の禁止を論じる上で欲望の主体は「異性愛男性」であることのみが想定されており、「性の行為体が男であることや異性愛を自然なものとみなす考え方は、言説によって構築されたものに過ぎず、それを基盤とする構造主義の枠組みではどこにもきちんと説明されていないのに、どこでもかならず前提とされている」(Butler 1990[1999]=[1999]2018: 89-90) ことが指摘されている。このような認識枠組みはアカデミックな議論に限定されるものではなく、様々な社会関係のあいだでも共有されていると考えることができる。

例えば、木村(2023)は日本における 2023 年 8 月の同性カップルの犯罪被害者給付金の遺族給付金を巡る訴訟において、パートナーが殺害された際の精神的苦痛は同性であれ異性であっても変わらないと認められたうえで、『同性パートナーについて、異性パートナーないし異性婚姻関係と同視することが要請されるとの社会的意識が醸成されていたとは認め難い』ので、同性パートナーに遺族給付金を支給しなくても、『国民の不信感』は生じない(木村 2023: 97) という判決が出たことに対して〈みんなが差別しているから、差別は正しい判決〉だとして批判している。異性愛中心の社会システム、異性愛主義は法を解釈する水準においても作動しており、その規範的な認識枠組みは、すでに確認してきた通り、男性に対して「彼女いるの?」と問いかけるような「(人は皆) 異性愛者だ」ということを前提とした会話など個人の生活世界の水準でも機能する。そして、このような異性愛主義の働きとして解釈できるような規範的認識は時に周縁化される個人に対して「暴力」として働きのうる。

バトラー(2005=[2008]2024)はアドルノの抽象的普遍性の暴力性という批判とヘーゲルの抽象的普遍性に対する批判を関係づけて以下のように論じている。

「問題は普遍性そのものではなく、文化的個別性に応えることができない普遍性の作用であり、その適用範囲に含まれる社会的、文化的諸条件に応じて自らを定式化しなおすことができない普遍性の作用なのである。」(Butler 2005=[2008]2024: 13)「私」は規範への関係に関する物語しか持たず、「私」は「規範によって、つまり主体の生存可能性を確立するような規範によって条件づけられている」(Butler 2005=[2008]2024: 17) ために、「異性愛」を基盤にする様々な支配的な認識枠組みが自明である以上、その「普遍性の作用」は常に生じうるものであり、同性に対して欲望を有するゲイ/バイセクシュアル男性にとっても自明

⁴³ 『問題=物質となる身体』(1993=2021) においては「異性愛のマトリクス」ではなく「異性愛のヘゲモニー」として説明されている。

なものとして認識されうることは6-2ですでに確認してきた通りである。

異性愛を自明視する異性愛主義のはたらきはゲイ/バイセクシュアル男性にとって避けられるものではない。

7-2-2 パッシングの「失敗可能性」

パッシングの問題を異性愛主義との関係において捉えると、パッシングは必ずしも功利的な戦略とは呼べないようなものとして立ち現れる。パッシングとは規範への継続的な応答である限り、パッシングはつねにすでに「失敗」に開かれており、バトラーの定式化に従えば、そのパフォーマティヴィティに「攪乱」の可能性は内在している（大貫 2018）。

規範が個人にとって生存可能性を脅かすようなものとしてはたらくとき、その社会的場面をパスできることはある種の「特権性」がないとできないことであり、パスすることができない個人がいることも確かである。多くのシスジェンダーのゲイ/バイセクシュアル男性は対面的相互行為の場における出会いのはじめにおける「一瞥による判断」（鶴田 2004）を軽々と通過できる傾向にあるが、トランス女性やトランス男性においてはそうはいかない（鶴田 2004）。シスのゲイ/バイセクシュアル男性による様々な場面におけるパッシングは男性ジェンダーの特権的利用という批判もあり得るだろう。実際に、バイセクシュアルの人々は異性愛者としてパスできる特権（straight-passing privilege）を持っていると認識されることがあることは報告されている（J.Lingel 2009; N.Rosie 2024）。

しかし主体形成の基礎をなすような社会的規範の存在がいかに関「強制」としてはたらきうるかという点はこれまでのパッシングに関する議論において見落とされてきたことは確かだろう。

また、6-1-4において確認されたのがブドウさんの「パッシングの失敗」を示す事例である。パッシングが「失敗」に開かれた諸実践として理解するとき、パッシングはどのように位置づけられるだろうか。明確な事例として「パッシングの失敗」を示したのはブドウさんだけだったが、6-2で示した通り、イチゴさんは自身のパッシングが失敗する可能性を自覚していたし、以下に引用するように、クジラさん（と「私」）も自身のパッシングが失敗する（/している）可能性を自覚している。

クジラさんの語り（一回目）

私：あ～。なんか隠しきるって結構大変な作業じゃないですか。

クジラさん：はいはい

私：というか僕はもうもはや不可能なんじゃないかと思っていて（笑）。どこかでなんかこうボロが出ちゃったり、隠しきれなくなったり、自分の中でこう無理が出ちゃったりとか隠し切れなかった経験ってあります？

クジラさん：ええ、それは何を？ゲイであること？それとも女性的なところとか？

私：そうですね、どちらにせよ

クジラさん：全然ばれてる人にはばれたんじゃないですかね。

これまでの語りと分析において仮にパッシングの「失敗⁴⁴」、つまり自身の性的指向が「普通」ではないことが周りに露呈していたとしてもそれは、本人にとっては知りえない場合があることを示している。

マイノリティ性を引き受けることを拒絶し、既存の支配的な規範を再生産することで「同性愛者」の「不可視化」に貢献しうる側面も有するパッシングの諸実践であるが、ここで論じたいのはパッシングの「成功/失敗」が常に他者からの評価に依存しているがゆえに開かれているパッシングの「失敗可能性」である。パッシングがつねに成功するような実践であれば、パッシングの効果とは既存の規範の再生産にすぎないだろう。しかし、パッシングの失敗が明らかにすることは、「異性愛」が支配的な文化であることそのものであり、「異性愛者」という主体位置が構築可能であるという事実である。パッシングの「失敗可能性」は、自然化されているセックス、ジェンダー、セクシュアリティの三位一体の異性愛主義の基盤を崩しうる、権力のなかにおける「抵抗」としての側面を有することは論じられないだろうか。そのためにはすでに何度も示している通り、カミングアウトもパッシングも一度立場を表明すれば、終わる「一回性」の実践としてではなく、その立場を示すためにつねに継続的な実践が不可欠であるという、その「継続性」に着目しないといけない。規範に応答し続けることで規範をパフォーマティヴに反復する側面を持つパッシングの諸実践は規範といかなる関係を持つだろうか。パッシングのパフォーマティヴィティを検討し、規範＝〈法〉を揺るがす契機がある可能性をバトラーの議論に則り、論じることで本項の結論とする。

バトラーの議論は、言語構造や規範などを示す象徴界の〈法〉を可変的なものとして論じているところにその特徴がある。『問題＝物質となる身体』第三章「〈幻想〉的同一化とセックスの引き受け」(Butler 1993=2021: 125-160)において、ラカンによって定式化された象徴界の〈法〉が批判的に検討されている。象徴界の〈法〉は「ある方向性を強制するような禁止」(Butler 1993=2021: 128)でありながらも、セクシュアリティを抑圧するのと同時に、産出するものとしてフーコー的な解釈がなされている。そして問題化されているのは「象徴界の過剰な権力」(Butler 1993=2021: 146)である。バトラー(1993=2021)の主張においては象徴界の〈法〉は不変の先行する権威でもなく、絶対的なものでもない。〈法〉とは「性化された主体を言語内部に構成する言説的次元として理解される」(Butler 1993=2021: 143)のものであり、身体化する引用の例示によって生産されるものであり、「権威的な法であるためには法は反復されねばならないがゆえに、法はそれ自体の失敗の可能性

⁴⁴ 鶴田(2004)は『演技』して何かになろうとしているのだが、『演技』であることが露わになってしまえば、それはパッシングの失敗である」(鶴田 2004: 26)と説明する。本稿においては意図的な「演技」ではない場合もパッシングに含めているが、それが「演技」であったと解釈される場面をパッシングの「失敗」と呼ぶ。

性を恒常的に再設定し続ける」(Butler 1993=2021: 146) ものである。ある種の頑強な同一化の作用は〈法〉の構成原理の内部で性化された位置を引き受けることであり、「ラカンは〔その優勢に〕保証を与え、同性愛を一過性の幻想という実現不可能な生へと追放することで、文化の異性愛主義を保護する」(Butler 1993=2021: 149) としてラカンの枠組みを批判的に検討しながら、象徴界そのものの根本的な変容の必要性を主張している。

本稿においてはバトラーのラカン批判の妥当性を詳細には検討しないが、バトラーの提出した、ある方向性を「強制」して規範化する〈法〉の脱自然化という論点は重要である。

例えば、バトラーが『ジェンダー・トラブル』([1990]1999=[1999]2018) において、ドラァグの模倣の実践を引用したのは「自然なもの」として自明視される「男性/女性」といったジェンダー二元論や自明視されている「異性愛」というセクシュアリティの虚構性を明らかにするためであった。「異性愛の『現実』は、オリジンでありすべての模倣の土台であると自称する模倣を通して、パフォーマンスに構築された。」(Butler 1991=1996: 124) にもかかわらず「強制的な異性愛は、オリジナル、真実、正統であると自称」(Butler 1991=1996: 124) し続けることを主張している。

本研究において明らかになったことは周縁化された欲望を有するゲイ/バイセクシュアル男性も異性愛規範の了承された社会構造のなかで社会生活を営んでおり、ゲイ/バイセクシュアル男性にもその「強制」が働き、パッシングの諸実践は一面には異性愛主義の働きとして読み替えることも可能であるということだ。「生存可能な主体を生産するためにある種の『引用』を強制する、規範との関係」(Butler 1993=2021: 318) があり、その規範と「交渉するよう強制されている」(Butler 1993=2021: 325) という文脈を踏まえるとパッシングを功利的な「戦略」に還元することはかなり一面的なパッシング理解となるだろう。パッシングが起こることはある種の社会的な「強制」の結果であり⁴⁵、パッシングのために様々な規範的な態度が動員され、パッシングとはその規範的な態度を引用、反復するという側面も分析を通して確認してきた。しかし、バトラーの定式化に従えば、規範の反復の失敗とはつねに反覆的なものである。

「反覆行為は、ときおり起こる不整合のために、この「基盤」が暫定的で偶発的な〈基盤ナシ〉であることを明らかにするのである。ジェンダー変容の可能性が見出されるのは、まさにこのような行為のあいだの任意の関係のなかであり、反復が失敗する可能性のなかであり、奇形-形のなかであり、永続的なアイデンティティという幻の効果がじつはひそかなにされる政治的構築にすぎないことを暴くパロディ的实践のなかなのである」(Butler [1990]1999=[1999]2018: 247-248)

⁴⁵ バトラー (1988) は「文化がジェンダー本質主義の幻想を演じることに失敗した人々をいとも簡単に罰したり、疎外したりすることは、あるレベルにおいて、ジェンダーの真偽は社会的に強制 (compelled) されている」(Butler 1988: 528 筆者訳) ことを説明している。

「パッシングの失敗」とはまさにパロディ的实践の失敗であり、反復の失敗は「異性愛者」という位置の「基盤」が暫定的で偶発的であることを示し、「永続的なアイデンティティ」が構築されることを示すという意味でつねに反覆に開かれている。藤高（2018）はバトラーのドラッグのパロディ解釈とパフォーマティヴな攪乱について以下のように論じている。

「むしろ、バトラーにとって、パロディは『成功/失敗』という『行為』の水準で考察されなければならないものである。[.....] 例えば、ドラッグがその『失敗』であるのはセックス、ジェンダー、セクシュアリティ、それらのあいだに想定される『首尾一貫性』の『法』（例えば、オスは男になり、女を愛する、というような）から逸脱しているからである。[.....] それは、セックス、ジェンダー、セクシュアリティのこれらの水準が一貫しているわけではなく、むしろその『自然なもの』にみえる『首尾一貫性』が『規範的な幻想』であることが暴露されるのだ」（藤高 2018: 144）

繰り返しになるが、「パッシングの失敗」という「行為」の失敗が示すのは、彼が「同性愛（者）」であることを明らかにすることだけではなく、「異性愛者」という位置がパッシングという「ある作業」によって、また反復と排除を通して構築可能なものであり、社会生活の場が通過可能になるという事実である。ここで重要なのは反復とは主体によって遂行されるわけではなく、反復こそが主体を可能にするという点⁴⁶であり、「男性であること」——それは「異性愛者であること」を含意するが——を達成する、ゲイ/バイセクシュアル男性による一連の行為としての継続的なパッシングはつねに「失敗」する可能性があり、「失敗」したとき、自然化されている「男性であること」という位置を脱自然化し、主体位置の不安定さを明らかにする可能性がある。

しかし、今回はゲイ/バイセクシュアル男性に対するインタビューを通して、彼らによって語られた経験に基づいて推論するに過ぎないため「パッシングの失敗」という「行為/パフォーマンス」が「聴衆」にどのような影響を及ぼしているかは定かではなく、「聴衆」の規範的な認識枠組みが攪乱された、とは必ずしも言い切れない。坂本（2005）は「語る」という行為は「聞く」という行為がないと成立しえないものであり、〈聞く主体〉がいかに成立するか、ということがパロディなどの攪乱の戦略に先立つ課題であることを指摘している⁴⁷。実際に今回確認した事例において「パッシングの失敗」という「行為/パフォーマンス」

⁴⁶ 「実際、ジェンダー規範を引き受ける『人』など存在しない。逆にジェンダー規範のこうした引用こそが、『人』として適格であり、『人』として生存可能になるために必要なものであり、そのとき主体形成は、正当性を与えるジェンダー規範の先行的作用に依存しているのである。」（Butler 1993=2021: 318）と論じられている通り、規範の反復こそが「人」という主体として成立する条件である。

⁴⁷ 坂本（2005）は「ポストモダンの、パロディやアイデンティティの流動化の戦略は、結局のところ、この〈聴く主体〉が存在しなければ、意味がない。換言すれば、〈聴く主

はなかったこととされて「カムアウトの無化」のような状態になりうることや、他者化される可能性も十分に考えられる。

サラ・アーメッド (2021=2024) は「苦情」が聞かれているようにみえても、現実には影響が反映されないことを「ノンパフォーマティヴ」として説明している。「カミングアウト」も「パッシングの失敗」もどちらも〈聴く主体〉が成立することで初めてパフォーマティヴに規範の攪乱が見込めるものであって、聴かれない限り〈法〉の変容は見込むことができない。しかし、今回示したのは、パッシングがつねに「失敗可能性」に開かれていることであり、「失敗」したとき、「聴衆」の認識や規範を攪乱するための「トラブルの芽」となりうる可能性である。

第8章 結論

8-1 結論——パッシングという経験

本稿の主題として提出された問いは以下の二点である。

- ① ゲイ・バイセクシュアル男性によって語られるパッシング実践とはなにを行う (行わない) ことで成立する実践なのか。
- ② ゲイ/バイセクシュアル男性は規範に対してどのような態度を有しているのか

一つ目の問いに対して、暫定的に (1) 「嘘をついたり」、(2) 「言わない (言えない)」、(3) 「コミュニティ」を「広げない」、というそれぞれの語りに象徴されるパッシングの様相を主に「能動/受動」(Daniel 2018) という枠組みにおいて整理することを試みた。

一つ目の (1) 「嘘をついたり」という語りに象徴されるパッシングの様相は能動的な「戦略」の側面を有しており、それは「普通」であることを目指すための「修正=fit」(kanuha 1999) の諸実践の側面を有することが示された。ここで語られたのは主に、職場や家族、友人間との対面的相互行為の場をパスするために用いられる様々な「戦略」であり、示された「普通」は、第一義的に異性愛主義の観点で「普通」である「異性愛者」を示した。

一方で「異性愛者」としての「普通」以外に関しては、必ずしも明確に語るることのできないような解像度の粗いものであることもまた示唆された。

次に (2) 「言わない (言えない)」という語りに象徴されるような受動的なパッシングは、それまで自覚的ではなかった諸実践がインタビューのなかで意識化されていったプロセスが確認され、それまで意識的に行われているわけではなかった諸実践が「隠している」ことや「言わない」ことに回収され、異性愛主義の「誤認」のメカニズムを利用した「戦略」として解釈できる側面があった。それと同時に、パッシングの成功が他者の評価に依存しているため「言わない」という「戦略」のみではパスしきれない可能性が自覚されていることが

体〉がいかに成立するかが、パロディなどの攪乱の戦略に先立つ重要な課題なのである。」(坂本 2005: 229) と論じる。

確認できた。

また、「言わない」ではなく「言えない」という語りから、「誤認」の利用とは言い難いような規範的な抑圧の結果として強制されるパッシングの可能性に言及した。「言わない」と説明されるパッシングにおいても規範的な強制の働きが働いている可能性もあるが、明確に「言えない」という語りであらわれたのは明らかに個人が管理/操作できない範囲のことである。しかし、この「言わない」もしくは「言えない」という語りに象徴される「沈黙」という反応は規範に同化することでその場をパスする「戦略」の側面や規範的な抑圧の効果だけに回収させることはできないだろう。「言わない」、もしくは「言えない」という「沈黙」は問いかけへの「抵抗」としても機能する可能性もある。バトラー (2005=[2008]2024) は「それはあなただったのか」という他者からの問いかけに直面して無言でいることは「あなたにはそのような問いかけをする権利はない」だったり「私はこの問いに応じてこの申し立てに権威を与えはしない」とか、「たとえそれが私であったとしても、それはあなたの知ったことではない」といった「抵抗」であることを説明している。「沈黙」はときに問いや質問者が行使する権威の正当性を疑問に付すことであり、語りを拒否することも語りへの関係である (Butler 2005=[2008]2024: 20-21)。これまで、「言わない (言えない)」という語りに象徴されるような「意図的なパフォーマンス (intentional performance)」 (Kanuha 1999: 41) に限られないゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングは十分に事例とともに分析されておらず、多様なパッシングのありかたを示したことは本稿の貢献の一つであるといえる。

次に示した「コミュニティ」を「変に広げない」ということで自己の所属する環境を選ぶことを語るブドウさんは、自分の性的指向に関することが露呈しそうな話題が出されたときに「そういうのいいから」と言えるコミュニティに属することを語った。「そういうのいいから」という「言わない」ことはまさに語りの拒否という語りへの関係であり、「抵抗」の側面を持つものだろう。そしてこの「コミュニティ」を「変に広げない」という語りは、対面的相互行為の場を能動的/受動的にパッシングすることではなく、コミュニティを選ぶことで対面的相互行為の場において「なにを/どのように話すか」という次元ではなく「誰に対して話すか」ということを選ぶことに重点が置かれていた。これまでパッシングに関して議論されてきたのは、対面的相互行為の場を通過するためのパッシングの「戦略」であり、そのために「能動/受動」という腑分けが有効であったが、今回の事例は対面的相互行為の場における発話行為に限定されない、対面的相互行為の場を「選ぶ」(同時に制約もされている) 水準にあるパッシング事例であり、これまでに十分に確認されてこなかった点である。

そして最後に確認したのが「パッシングの失敗」を示す事例である、本事例は対面的相互行為の場をパッシングするためにその場で共有される規範に応じた様々な「戦略」や、パッシングさせられる「強制」の場面が語られた一方で、パッシングの「成功」を最終的に規定するのは行為者ではなく、むしろ被行為者である「聴き手」であることを明確に示す事例である。先行研究において、パッシングの功利的な側面が強調されてきたのはパッシングの成

功事例のみが語られ、分析されたからであると考えることができる。しかし、現実においてパッシングとは常に成功するものではなく、パッシング（通過）するためにはつねに行為者にとって不明瞭な評価軸をパス（合格）し続けたいけないような諸実践であった。

そして、これまでの議論から、功利的な戦略や規範への従属だけに回収できる問題ではなく、パッシングとは規範に対する応答であり、環境への適応であるという側面を示したが、次に、その規範に対して当事者はどのような態度を持つのか、ということを確認した。

一つ目に確認したのは、異性間の婚姻を自明視する態度であった。「結婚」に関する語りや家族との相互行為の場におけるパッシングの困難さを示す語りが示したことは対面的相互行為の場で「異性愛者」としてもパスすることができても、困難が経験されてしまうような、「普通」としてパッシングするためには「同性愛者」であることを隠すだけでは不十分であるという現実があることである。例えば、クジラさんは母親からの悪意のない「あなたに家族の素晴らしさ、家族がいる、家族を作るっていう素晴らしさを伝えられなくて本当にごめんね」と呼びかけられた際に、自分には異性婚をし「標準」家族をつくることができないために「申し訳な」さとして表出し、家族に会いたくなくなった時期があることを語った。この母親の呼びかけに答えるためには「標準」家族をつくる〈理想の息子〉としてパスする必要があり、〈理想の息子〉像は原理的に「異性愛者」でないと達成できないことも同時に推察された。この水準でパスができないがゆえの困難はクジラさんのように直接求められる場合もあれば、ライオンさんのように必ずしもどのようなプロセスで獲得されるか必ずしも語られず、曖昧に「生きづらさ」という言葉で表現された。

次に確認したのが公的な場における職業人としての理想像である。ブドウさんは〈理想の教員〉としてパスするために「同性愛者」として自己呈示することは「正当性」がないことを語った。公的な場においてカミングアウトすることが「正当性」がないことを示唆する語りは他の調査協力者にも語られ、公的な場における規範的=理想的主体から「同性愛(者)」の排除の論理が自明とされていることが確認できた。

最後に自己を「普通」に定位するために「LGBT」の問題を「他人事」として処理することや、「ゲイっぽい人」を「普通」と対置させることや「ゲイ」というカテゴリーから「オカマ」を排除することで自己を「ゲイ」に定位することができる他者化のプロセスも示唆された。

場や関係のなかで共有される規範に応じて、パッシングするためにその場や関係における規範的な態度を獲得していたことが示唆される。そして、これまでの事例が示したことは「異性愛者」であることは、性的関心が異性に向くこと、つまりは「性的指向」の問題としてだけではなく、定位家族との相互行為の場、職場における相互行為の場ではたらく「常人」としての指標の一つであり、このような規範は異性愛主義として説明できる。そして、規範に従属しているように見えることは、規範の反復こそが主体の成立条件であるということを経験すると、避けられないことであり、権力関係のなかで生きる限り「わたしたちはすべて、どこか『異性愛的な人間』である」（竹村 2013: 15）ことは避けられない一方で、パッシン

グはつねにすでに⁴⁸「失敗」の可能性を孕んでおり、「失敗」は規範を攪乱する「トラブルの芽」となりうる可能性がある。

8-2 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は主に二点挙げられる。一点目は調査協力者の属性の偏りである。本研究において調査協力者は20代～30代の東京在住のシスのゲイ/バイセクシュアル男性に限定されている。ゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングを論じるうえで、調査協力者らの年代においても、居住地においても限定的な範囲にとどまっており、高齢のシスゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングの問題、地方在住のゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングの問題を照射することはできなかった。またシス男性に限定されているためにレズビアン/バイセクシュアル女性をはじめとしたほかの性的少数者のパッシングに関しては考察することができていない。加えて、インターセクショナルに経験される抑圧に関しても考察できず、人種や障害など他のマイノリティ性との交差に伴う抑圧とそれに対する対応や適応としてのパッシングの問題を本稿では扱うことができなかった。

二点目は分析に際しての限界である。本稿において、調査者という立場で話を聞き、分析している「私」はすでに言及したとおり、当事者としての側面を有していたために話の前提において擦り合わせがいない場面などがあり、時間的な制約のあるインタビューの場において引き出すことの出来た語りはいくつかあるだろう。しかし、常に、パッシングをしてきた「私」にとってパッシングに関する語りの多くは「私」にとって自明なことであり、分析自体がかなり自己の経験に基づくフィルターを通して解釈されているため、偏りを産んでいる可能性は否定できない。一方でこの事態は、ゲイ/バイセクシュアル男性のパッシングにはある程度の共通する側面があることを同時に示している。分析に際して「異化」（砂川 2015）の視点が十分に持てなかったことは本研究における限界であるが、新たな「気づき」を得られなかったことそれ自体、記述すべき点であると考え、ここに記述する。

⁴⁸ 大貫（2018）は、バトラーのパフォーマティヴィティ理論を以下のように解釈する。

『存在論』としては、あらゆる実践はパフォーマティヴであり、「攪乱」の契機はつねにすでに存在する。だからこそ、『批判的脱主体化』の可能性が開かれている。それはまた、『生の被傷性』を意味する。」（大貫 2018: 97）すべての実践が「規範的」に正当化されるわけではなく、「生の被傷性」の平等な割り当てこそが倫理的に要請されることを論じていることが解釈されている。つまりパッシングの「失敗」とはそれ自体はパフォーマティヴな規範の攪乱を意味しないものである。

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々からご指導とご鞭撻のほどを賜りました。また、調査協力者の皆様からの協力がなければ成立しませんでした。この場を借りて、謝辞を述べさせていただきます。

まず、慶應義塾大学総合政策学部教授 小熊英二氏に心より感謝申し上げます。修士課程より受け入れていただき、出会ったその時から研究の発展のためのご助言をいただきました。問題関心は一貫していたものの、学問的な知見が不足する私に、いかに関心を論文として成立させられるかという点において、二年間にわたって様々なアドバイスをいただくことで自分では気づくことの出来なかった視座や知見をいただきました。誠にありがとうございます。

次に、慶應義塾大学総合政策学部教授 國枝孝弘氏に心より感謝申し上げます。とくに個人の「語り」をいかにして扱うかという点に悩み続けておりましたが、「聴き手」の重要性をはじめとしたさまざまな貴重なアドバイスをいただきました。そして本論文の論理を詳らかにご検討いただき、アーギュメントを論文として構成するためのご指導を賜りました。心よりお礼申し上げます。

次に慶應義塾大学総合政策学部准教授 宮代康丈氏に感謝申し上げます。本論文において重要な側面である様々な概念の用語法や、論述の構成に関するアドバイスを多くいただきました。また修士研究会においては様々な文献の読解に関する多大なるアドバイスをいただき、理解を深めることができました。厚く御礼申し上げます。

また、東邦大学専任講師 鈴木弥香子氏、鈴木弥香子氏を中心にした「共々研」の皆様、小熊研究会の皆様には本研究に対して様々な観点からアドバイスをいただき、背中を押していただきました。誠にありがとうございます。

最後にクジラさん、ライオンさん、イチゴさん、ブドウさん、ヒツジさん、調査協力者の皆様に深くお礼申し上げます。皆様のご協力があっではじめて成立した研究でした。誠にありがとうございました。

2025 年 1 月

後藤田竣佑

参考資料

参考文献

- Ahmed, Sara, 2021, *Complaint!*, Durham, Duke University Press. (竹内要江, 飯田麻結 訳, 2024, 『苦情はいつも聴かれない』 筑摩書房.)
- Butler, Judith, 1988, “*Performative Acts and Gender Constitution: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory*,” *Theatre Journal*, 40 (4) : 519-531.
- [1990]1999. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York, Routledge. (竹村和子訳, [1999]2018, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社.)
- 1991, “Imitation and Gender Insubordination,” in D. Fuss (ed.) *Inside Out, Lesbian Gay Theories*, New York, Routledge. (杉浦悦子訳, 1996, 「模倣とジェンダーへの抵抗」 『imago』 7 (6): 116-135.)
- 1993, *Bodies That Matter: On the Discourse Limits of Sex*, New York, Routledge. (佐藤嘉幸監訳, 佐藤嘉幸, 竹村和子, 越智博美訳, 2021, 『問題＝物質となる身体——セックスの言説的境界について』 以文社.)
- 1997, *Excitable speech : a politics of the performative*, New York, Routledge. (竹村和子訳, 2004, 『触発する言葉: 言語・権力・行為体』 岩波書店.)
- 2005, *Giving an Account of Oneself*, New York, Fordham University Press. (佐藤嘉幸, 清水知子訳, [2008]2024, 『自分自身を説明すること——倫理的暴力の批判』 月曜社.)
- Daniel, Silvermint, 2018, “Passing as Privileged,” *Philosophy and WGSS*, 5 (1): 1-43. (最終取得日 2024 年 1 月 15 日
<https://quod.lib.umich.edu/e/ergo/12405314.0005.001?view=text:rgn=main>)
- Dana, Rosenfel, 2009, “HETERONORMATIVITY AND HOMONORMATIVITY AS PRACTICAL AND MORAL RESOURCES : The Case of Lesbian and Gay Elders,” *Gender and Society*, 23(5): 617-638
- Garfinkel, Harold, 1967, “Passing and the Managed Achievement of Sex Status in an ‘Intersexed’ Person Part 1 an Abridged version,” *Studies in Ethnomethodology*, New Jersey: Prentice-Hall: 116-85. (山田富秋, 好井裕明, 山崎敬一訳, 2004, 「アゲネス, 彼女はいかにして女になり続けたか——ある両性的人間としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」 『エスノメソドロジー——社会学的思考の解体』 せりか書房, 233-322.)
- Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, New Jersey: Prentice-Hall. (石黒毅訳, 2001, 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』 せりか書房.)

- Goffman, Erving, 1981, *Forms of talk*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Iris Marion Young, 1990, *Justice and the Politics of Difference*, Princeton University Press. (飯田文雄, 荻田真司, 田村哲樹監訳, 河村真実, 山田祥子訳『正義と差異の政治』法政大学出版局.)
- Kite, M. E., and Whitley, B. E., Jr. 1996, “Sex differences in attitudes toward homosexual persons, behaviors, and civil rights: A meta-analysis,” *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22 (4), 336–353.
- Larsen, Nella, McDowell, Deborah E, 1986, *Quicksand and Passing*. New Brunswick, Rutgers University Press. (鵜殿えりか訳, 2022, 『パッシング；流砂にのまれて』みすず書房.)
- Lingel, Jessa, 2009, “Adjusting the Borders: Bisexual Passing and Queer Theory,” *Journal of bisexuality*, 9 (3-4) : 381-405.
- Mustafa F. Ozbilgin, Cihat Erbil, Sibel Baykut, Rifat Kamasak 2022, “Passing as resistance through a Goffmanian approach: Normalized, defensive, strategic, and instrumental passing when LGBTQ+ individuals encounter institutions” *Gender Work and Organization*, 30 (3): 862-880.
- Nathan D. Shippee, 2011 “Gay, Straight, and Who I Am: Interpreting Passing Within the Frames for Everyday Life” *Deviant Behavior*, 32(2) : 115-157.
- Rosie Nelson, 2024. “Deconstructing the Clinging Myth of ‘Straight-Passing privilege’ for bi+ People,” *Journal of Bisexuality*, (24) 3: 303–324.
- Rosenfeld, D. 2009, Heteronormativity and homonormativity as practical and moral resources: The case of lesbian and gay elders. *Gender and Society*, 23 (5):617–638
- Rubin, Gayle, [1975]1997, “*The traffic in Women: Notes on the ‘Political Economy’ of Sex*” in Linda Nicholson ed., *The Second Wave: A Reader in Feminist Theory*, Routledge: 27-62. (長原 豊訳, 2000, 「女たちによる交通——性の「政治経済学」についてのノート」『現代思想』 28(2): 118–159.)
- Pushkala, Prasad, 2005, *Crafting Qualitative Research: Working in the Postpositivist Traditions*, New York, Routledge. (箕浦康子監訳, 2018, 『質的研究のための理論入門 ポスト実証主義の諸系譜』ナカニシヤ出版.)
- Sedgwick, E. Kozofsky, 1990, *Epistemology of The Closet*, New York, The University of California Press. (外岡尚美訳, 1999, 『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀』青土社.)
- Valli Kalei Kanuha 1999, “The Social Process of "Passing" to Manage Stigma: Acts of internalized Oppression or Acts of Resistance?,” *The Journal of Sociology and Social Welfare*, Volume 26 Article 3.
- Wittig, Monique, 1980, “The Straight Mind” 1992, *The Straight Mind And Other*

Essays. Beacon Press.

飯野由里子, 2023, 第4章「『見えない』障害のカミングアウトはなぜ難しいのか?」菊地

夏野, 堀江有里, 飯野由里子 編『クィア・スタディーズをひらく3 第3巻

健康／病、障害、身体』晃洋書房.

石川良子, 2003, 「パッシングとしての〈ひきこもり〉」『ソシオロジ』48(2): 39-55.

伊野真一, 2005, 「第一章 脱アイデンティティの政治」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房.

大坪真利子, 2019, 「『個人の選択』としてのカミングアウトという困難」『解放社会学研究』(33): 7-23.

大貫挙学, 2014, 『性的主体化と社会空間: バトラーのパフォーマティヴィティ概念をめぐって』インパクト出版会.

大貫挙学, 2018, 「J. バトラーの「倫理」概念をめぐって——パフォーマティヴィティ理論における「他者性」の観点から——」『現代社会学理論研究』12: 90-102

岡田桂, 2019, 「“不完全に”クィア——性的少数者をめぐるアイデンティティ/文化の政治とLGBTの「生産性」言説がもたらしたもの」『年報カルチュラル・スタディーズ』10: 7-26.

織田暁子, 野村凌, 2019「ゲイ・レズビアンに対する意識の性差: 個人的受容感・社会的受容感の比較から」『仁愛大学研究紀要』人間学部篇, 18: 77-85.

草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会 クレイム申し立ての社会学』世界思想社.

草柳千早, 2023, 「二重性を設える——セルトーの日常的実践論からゴフマンの共在研究へ——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』68: 109-123.

風間孝, 2002, 「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』53: 348-364.

風間孝, 2015, 「『寛容』な文化における同性愛嫌悪」『国際教養学部論叢』8(2): 1-15.

槇田美雄, 1991, 「アグネス論文における〈非ゲーム的パッシング〉の意味——エスノメソドロロジーの現象理解についての若干の考察」『年報筑波社会学』3: 74-98.

河村裕樹, 2017, 「『普通であること』の呈示実践としてのパッシング ガーフィнкелのパッシング論理を再考する」『現代社会学理論研究』11: 42-54.

キース・ヴィンセント, 風間孝, 河口和也 編, 1996, 『ゲイ・スタディーズ』青土社.

菊地夏野, 堀江有里, 飯野由里子 編, 2019『クィア・スタディーズをひらく. 1, アイデンティティ, コミュニティ, スペース』晃洋書房.

木場安莉沙, 2019, 「メディアに見る性的少数者の表象 再名づけの実践とイデオロギーの戦略」『年報カルチュラル・スタディーズ』7: 119-142.

木村草太, 2023, 『「差別」のしくみ』朝日新聞出版.

ケイン樹里安, 2021, 「ルッキズムとレイシズムの交点——「ハーフ」表象をめぐる抑圧と

- 対処」『現代思想』49(13): 28-40.
- 小手川正二郎, 2023, 第二章 「『男らしさ』を脱ぎ捨てるのではなく——『男らしさ』のフェミニスト現象学」稲原実苗編,『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』ナカニシヤ出版: 25-42.
- 小宮明彦, 2015, 「同性愛嫌悪をめぐる日英（教育）文化比較—明示的差別の国イギリスと黙示的差別の国日本—」教育学研究室紀要：『教育とジェンダー』12: 30-41.
- 阪井裕一郎, 2024, 『結婚の社会学』ちくま新書.
- 坂本佳鶴恵, 2005, 『アイデンティティの権力 差別を語る主体は成立するか』新曜社.
- 桜井厚・西倉実季, 2017 「インタビュー 対話的構築主義との対話：ライフストーリー研究の展望」『現代思想』45(6): 60-84.
- 三部倫子, 2014, 『カムアウトする親子—同性愛と家族の社会学—』御茶の水書房.
- 新ヶ江章友, 2013, 『日本の「ゲイ」とエイズ コミュニティ・国家・アイデンティティ』青弓社.
- 新ヶ江章友, 2022, 『クィア・アクティビズム——はじめて学ぶ〈クィア・スタディーズ〉のために』花伝社.
- 砂川秀樹, 2015, 『新宿二丁目の文化人類学: ゲイ・コミュニティから都市をまなぐ』太郎次郎社エディプス.
- 竹村和子, [2002] 2021, 『愛について アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店/岩波現代文庫.
- 竹村和子, 2013, 『境界を攪乱する 性・生・暴力』岩波書店.
- 鶴田幸恵, 2004, 「トランスジェンダーのパッシング実践と社会学的説明の咀嚼 カテゴリーの 一瞥による判断と帰納的判断」『ソシオロジ』49 (2) : 21-36.
- 中尾元, 2021, 「ライフストーリー研究の方法論: 認識論 (epistemology) としての人文×社会科学の交差点」『人文×社会』1(1): 125-137.
- 日高庸晴, 2000, 「ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究」『思春期学 = ADOLESCENTOLOGY』18 (3) : 264-272.
- 藤井良樹, 2023, 「カミングアウト研究を再考する：クィア方法論の視点から」『日本ジェンダー研究』, 26: 153-167.
- 藤高和輝, 2017, 「J・バトラーのジェンダー・パフォーマティビティとそのもうひとつの系譜」『Gender and Sexuality』12: 183-204.
- 藤高和輝, 2018, 『ジュディス・バトラー——生と哲学を賭けた闘い』以文社.
- 堀江有里, 2008, 「〈クローゼットから出る〉ことの不可能性--レズビアンをあいだに措定される〈分岐点〉をめぐる」『解放社会学研究』22: 102-108.
- 堀江有里, 2015a, 『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版.
- 堀江有里, 2015b, 「〈反婚〉試論：家族規範解体をめぐる覚書」『現代思想』43 (16): 192-200.

- 前川直哉, 2017, 『＜男性同性愛者＞の社会史—アイデンティティの受容/クローゼットへの解放』 作品社.
- 町田奈緒士, 2022, 『トランスジェンダーを生きる 語り合いから描く体験の「質感」』 ミネルヴァ書房.
- 眞野豊, 2014, 「同性愛嫌悪の内面化とクローゼットの不在との間:地方に生きるゲイのライフストーリーの考察から」 『地球社会統合科学研究』 1: 71-80.
- 丸井淑美, 2020, 「性的少数者の学校生活の実態と学校教育の課題に関する研究—女性同性愛,男性同性愛,性同一性障害（性別違和）の当事者インタビュー調査より—」 『日本健康相談活動学会誌』 15（2）:143-152
- 元山琴菜, 2022, 第9章「現代日本社会の『同性愛歓迎ムード』に潜む差別の危険性：マイクロアグレッション概念を鍵として」 牟田和恵編著『フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想』 松香堂書店.
- 森山至貴, 2024, 『「ふつうのLGBT」像に抗して 「なじめなさ」「なじんだつもり」から考える』 青土社.
- 山田薫, 2015, 「『見えないスティグマ』としての慢性疾患 四〇歳代女性関節リウマチ患者の生活史から」 『社会学研究』 97: 133-157.
- 山田富秋, 2020, 『生きられた経験の社会学——当事者性・スティグマ・歴史』 せりか書房.
- 吉村さやか, 2020, 「「女性に髪がないこと」とパッシングの障害社会学——髪のない女性たちの「生きづらさ」への対処戦略の検討から」 『解放社会学研究』 34: 210-234.

雑誌 (ZINE)

- 和田たくみ 2023. 『透明人間さよなら』 本屋メガホン.

Web ページ

- 電通, 2021, 「電通、「LGBTQ+調査 2020」を実施」 (最終取得日:2024 年 1 月 14 日 <https://www.dentsu.co.jp/news/release/2021/0408-010364.html>)
- 厚生労働省 (2024 年 1 月 2 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/000625161.pdf>)
- あんじー, 2023, 「2023 年 アノ人に会いにゆく. vol.10～『本屋メガホン』和田拓海さん～」 (2025 年 1 月 15 日取得, <https://aun-web.jp/blog/blog-9758.html>)
- 厚生労働省, 2020, 「令和元年国民健康・栄養調査結果の概要について」 (最終取得日 2025 年 1 月 14 日, <https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000722240.pdf>)
- テレビ東京, 「ドラマ 24 きのう何食べた？」 (最終取得日 2025 年 1 月 15 日 <https://www.tv-tokyo.co.jp/kinounanitabeta/>)